

---

# 魔法少女リリカルなのはStrikerS ～ 相反する二色の翼 ～

天照大神

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのはStrikers 相反する二色の翼

### 【Nコード】

N2871Q

### 【作者名】

天照大神

### 【あらすじ】

白と黒の翼をもつ青年……………

彼は起動六課に配属され忙しい毎日を送ることになる……………

・あの時、助けてくれた人は今何処に……………？

・会いたい……………あつてあの時の感謝を伝えたい……………

彼の介入によってStsの物語はどう変わるのか！？

魔法少女リリカルなのはStrikerS 相反する二色の翼

始まります.....

## 主人公・デバイス設定（前書き）

まず質問ですが……

この小説を初めて読む人でしょうか？

その方々にとってはネタバレになるので本編を読んでから此处を見て下さい

お願いします

## 主人公・デバイス設定

蒼波 優斗

17歳 男

魔導士ランク A

魔力光 白

時空管理局三等空尉

本作品の主人公

レジアス中将直下の局員

戦闘スタイルは剣を使つてのFA  
フロントアタッカー

アルカディアスフォーム

デバイス バルカディアスにかかっているリミッターを外すことにより使用可能になる

背中には2対の白翼が出現し、その姿はなのはいわく「天使のよう・  
・」

戦闘スタイルはFAからオールラウンダーに変わる

魔力ランクはA SS

バロムフォーム

リミッターを外した際、使用可能になる

背中には2対の漆黒の翼が出現し、戦闘スタイルは剣ではなくのはのような砲撃主体になる

魔力ランクはA SS

???フォーム

Strikersが始まる4年前、空港火災の際フェイトとギンガを助けた時の姿

背中には右側に黒翼、左側に白翼が3対ついている

戦闘スタイルは不明

魔力ランク????

デバイス バルカディアス

優斗の相棒であり、インテリジェントデバイス

優斗との付き合いの年月、製作元は今だ不明

リミッターを外す際、その力が何者かに感知される等、発言をしている

優斗もその事については、知っているようだ

## 主人公・デバイス設定（後書き）

随時、本編であらたな設定・能力等々が出次第更新していきます



## プロローグ（前書き）

どうも天照大神です！！

是非読みたい！！という方が多数いましたので早速書き上げました！！

転生の方と同時進行しているので此方もどうぞ宜しくお願いします

ではどうぞ！！

## プロローグ

夢を見た・・・・・・・・

あの時・・・・・・・・4年前に起きたあの火災の夢を・・・・・・・・

私が・・・・・・・・助けてもらったあの時の夢を・・・・・・・・

その日、私は当時研修中だった1人の友人と別の友達と一緒に研修中の友人がいた地域の近くにあるホテルに泊まって楽しく話していた

けれど・・・・・・・・突然研修中の友人に連絡が来た

「近隣の空港で原因不明の大火災が発生。至急現場に向かい、民間人の救出もしくは指揮をとれ」と

私達はその内容を見てすぐにデバイスを起動し空港に向かった

研修中の友人は現場の指示を、残った私ともう1人の友人は空港内に取り残された民間人の救出をするために空港内で分かれて行動していた・・・・・・・・

?>サー、前方の階段に反応が!!<

「分かった!」

私の愛機が報告した階段フロアの下の方に手すりに手をつけながら降りている女の子が1人いた

女の子「きゃあ!？」

階段が激しく揺れ、女の子が悲鳴をあげる

「待ってて!今助けるから!」

しかし、私が叫ぶと同時に階段が崩れ、女の子が下に落下し始める

「!?!?!」

私は加速魔法を使って落下していた女の子を抱きしめた

「大丈夫!？」

女の子「は、はい……」

女の子は泣きながら私に言う

「すぐに外に出るから、しっかり捕まって」

女の子「お、お姉さん!上!」

「!？」

女の子の声で上を見ると上階に登るための階段が崩れて私達に向かって落ちてきていた

（よ、避けられない！？）

私は女の子を抱きしめて目を瞑った

ドガアアアアアン

「えっ……………」

爆音と爆風が私の上で起こり私は目を開く

「あっ……………」

目に映ったのは右に黒、左に白の三対の翼を広げた人だった……………

？」「・・・・・・・・・・・・・・・・」

その人は私の方を向くと私の事をじつと蒼い瞳で見る

「あ、あのー！」

私がお礼を言おうとした時、その人は翼をはばたかせて何処かへ飛んで行ってしまった・・・・・・・・

「・・・・・・・・・・あっ」

それを見つめていた私の前に白と黒の羽が2枚ずつ落ちてきた

女の子「これ・・・・・・・・さっきの人の、翼・・・・・・・・？」

「うん・・・・・・・・・・」

私はそれを持って、今にも崩れそうな空港内から脱出した・・・・・・・・

？「フエ・・・・・・・・ちゃん！フェイトちゃん！！！」

「はっ！！な、何なのは？」

私は隣にいたなのはの声に現実に戻る



なのは「どうしたの？さっきからぼーっとしてたけど」

「うん・・・・・・・・朝見た夢を思い出してて」

なのは「夢・・・・・・・・？」

「うん。だから心配しないで」

なのは「分かった」

高町なのは

私の最初に出来た友達で、もう10年間の付き合い

？「2人とも~~~~~？うちの話を見殺ししないで欲しいんやけど」

「……？」

なのは「あつ、ごめんはやてちゃん」

「ごめんねはやて」

はやて「まあいいんやけど……………」

この部屋で唯一椅子に座っている人物、八神はやて

はやてとももう10年の付き合いになる

？「ふつ……………平和でたるんだか？テストロッサ」

？？「なのはもなのはだ。心配ばつかしてるとお前が倒れるぞ」

「分かってますよ、シグナム」

なのは「ヴィータちゃん酷い！？そんなことならないよー！ー！  
！」

ヴィータ「どうだか？お前が無茶するのは身内で知らないやついねえよ」

なのは「うう………」

ピンク色の長い髪の女性はシグナム、小さい子の方はヴィータ

2人ともはやてと同じ時期に知り合った人物だ

はやて「この起動六課が始動してから一週間、順調みたいやね」

なのは「うん！FWのみんなも頑張って私の教導受けてるよ」

シグナム「ふっ……なのはの教導で毎日ヘトヘトらしいがな」

ヴィータ「ま、それがなのはの教導だしな」

「でもはやて、一週間の状態の報告の為に私達隊長陣を呼んだの？」

はやて「違うで………実はな、レジアス中將から通知が来たんよ………」

なのは「レジアス中將から!？」

シグナム「主はやて………まさか部隊人員の配置換えですか？」

ヴィータ「まさか!?!いくらなんでも早すぎだろ!？」

はやて「落ち着くんや2人とも。とりあえず、内容見せるで」

はやてが持っていた端末を操作すると私達の前に画面が現れる

《起動六課の前線メンバーは戦闘経験が少なくと後見人から聞いた。よって、私の部下を1人起動六課に配属する。ただし、私からの呼び出しを受けた場合はそちらを優先させるように。》

なのは「・・・・・・・・・・これだけ？」

はやて「そうや・・・・・・・・・・」

あまりにも単純な文章に何を言えいいのか分からなくなる4人

はやて「とにかく、その配属される人物がもう来とる。今はグリフイス君がこの部屋に案内しとるはずや」

その時

？《八神部隊長、お連れしました》

はやて「ん、ありがとなグリフィス君。もう戻ってええよ」

グリフィス《はい》

はやて「さて……………はいつてええよ」

？「失礼します」

はやての声に反応し、蒼い瞳に黒い髪をした青年が部屋に入ってくる

？「レジオス中將から任を受け、本日起動六課に配属されました蒼波 優斗三等空尉です！！」

その青年は敬礼をして私達に自己紹介をした・・・・・・・・・・

## 第1話 烈火の将との戦い（前書き）

どうも天照大神です

この話を投稿するじてんでお気に入り登録が11件もありました

登録してくださった方々、有難うございます!!

では、本編をどうぞ!



## 第1話 烈火の将との戦い

はやて「宜しうな蒼波三等空尉」

優斗「はい！！八神部隊長！！！！」

はやて「それでな・・・・・・・・さうそく聞きたい事があるんやけど」

優斗「なんですか？」

はやて「君の目的はなんや？」

優斗「えっ・・・・・・・・？」

はやての言葉に首を傾げる優斗

シグナム「レジアス中將は機動六課の設立に最初から反対して  
いてな。しかしつい最近はそのが無くなった」

はやて「だからレジアス中將がなんかしらの目的を持って君を配  
属させたんやと思うんや」

優斗「ですが……自分は中將から「貴様はまだまだひよつ  
こだ。1年間六課の教導官に絞られてこい」としか言われてませ  
んが……」

5人「……はい？」

優斗「本当ですよ」

優斗の言葉に頭を抱えるはやて

はやて「（うちの思いすごしか……）分かった、変な事聞  
いてごめんな」

優斗「いえ」

なのは「えっと……蒼波君」

優斗「はい、高町一等空尉」

なのは「とりあえず蒼波君はFWに配属でいいんだよね？」

優斗「はい。中將にもそう言われましたので」

なのは「分かった。これから宜しくね」

なのはは笑顔で優斗に言う

優斗「はい!!」

優斗も敬礼をして返事をした

フェイト「そういえば」

ヴィータ「どうしたフェイト？」

フェイト「優斗の魔導士ランクってなんなのかな？」

シグナム「そうだな．．．．蒼波」

優斗「はい、自分はAランクです」

フェイト「Aランク．．．．．」

ヴィータ「それで二等空尉まで登ったのか!？」

優斗「いえ．．．．運が良かっただけですよ」

優斗は謙遜しながら答える

なのは「蒼波君？そろそろ訓練の時間だから私と一緒に訓練場行こうか」

優斗「はい！ー！高町一等空尉」

なのは「にやはは……階級は付けなくていいよ」

優斗はなのはについていくようにして部屋から出ていった

はやて「とにかく……これでFWはもっと頼もしくなれるな」

シグナム「……………」

ヴィータ「シグナム？」

シグナム「フフフフフ．．．．蒼波、是非貴様と一線交わりたい．  
．．．．．」

はやて「はあ．．．．．またバトルマニアの血が」

フェイト「あははは．．．．．」

はやては呆れ、フェイトは苦笑いをしていた．．．．．

なのは「みんな、お待たせ」

？「なのはさん！」

？？「大丈夫です」

優斗がなのはと一緒に訓練場に行くと、3人の少女と1人の少年。  
それに竜が一匹いた

？？？「なのはさん、そちらの人は？」

赤い髪の少年が優斗をみてなのはに尋ねる

なのは「蒼波優斗君、今日からFWに配属されたんだ」

優斗「宜しく」



？「私はスバル。スバル・ナカジマ。宜しくね」

？？「ティアナ・ランスターよ、宜しく」

？？？「エリオ・モンディアルです！！」

？？？？「キャロ・ル・ルシエです！！この子はフリードです」

竜「キュクー！！」

4人が優斗に自己紹介する

なのは「蒼波君、私達は蒼波君の実力を知らないからまずは見せてもらってもいいかな？」

優斗「はい。いいですよ」

なのは「うん。それじゃあ、私達は一端はなれるよ」

4人「はい!!」

なのは《蒼波君？準備はいい？》

優斗「大丈夫です」

なのは達が離れると、優斗の近くのなのはが映った画面が現れ話しかけてくる

訓練場には廃棄されたビルが立ち並んでいた

なのは《蒼波君はこれから出てくるターゲットを時間内に破壊してもらおうよ》

優斗「分かりました」

なのは《制限時間は5分。ターゲットは15機………スタート……》

なのはの掛け声と同時に訓練場に卵型のロボット　ガジェットドローンが現れ散開していく

優斗「いくぞ、バルカディアス」

優斗はポケットから黒と白のカラーリングの羽を取り出して言う

? < ああ。 S t a n d B Y R e a d y . >

羽が光り、優斗が包まれる

光が収まると、白いバリアジャケットに黒いマント。右手に剣を持った優斗が現れた

優斗「はっ!!」

優斗が声を発すると同時に、かけだして近くのカジエツト1機に斬りかかる

カジエツトはそれに反応して優斗に攻撃をしようとする

優斗「遅い!!」

優斗はガジェットが攻撃をする前に剣で真っ二つに斬る

バルカディアス<後ろだ優斗>

剣 バルカディアスの指示で後ろを向くとガジェットが3機優斗を  
めがけて迫ってきていた

優斗「ふっ」

3機からの攻撃をすれすれで避ける優斗

優斗「はあっ!!」

攻撃の合間にガジェットに近づいてバルカディアスで3機を我武者羅に切り刻む優斗

優斗「このまま行くぞバル!!!」

バルカディアス<ああ!!!>

優斗はそのまま残りのガジェットに向かっていった

スバル「すごい………」

エリオ「はい………」

優斗の戦いに見ほれる2人

ティアナ「なのはさん……彼のランクは？」

なのは「Aランクだって言ってたよ」

キャロ「Aランクですか？」

ティアナ「やっぱり私となんかじゃ違うのね………」

・ティアナはどこか羨ましい目で優斗の戦いを見ていた………

優斗「これで最後!!」

優斗がバルカディアスで最後の一機を斬る

なのは《お疲れさま蒼波君。とりあえず一端こっちに》

なのはが言いかけた瞬間、別の画面が現れる



シグナム《すまないなのは。私がいる》

その画面には騎士甲冑を纏ったシグナムが映っていた

なのは《シグナムさん！？》

シグナム《蒼波と一戦交わしたい、大丈夫か？》

なのは《でも……蒼波君は今ので疲れていて》

シグナム《では行くぞ蒼波！！》

シグナムはそう言って画面を切る

なのは《シグナムさん！？まだいいとは言ってませんよ！？》

優斗「えっと……どうすれば」

バルカディアスくきたぞ優斗>

優斗の右方向からシグナムが向かってくる

なのは《蒼波君！？あまり派手に戦わないでね！！訓練場が持つかわからないから！！》

なのははそう言って画面を切る

シグナム「はあああああああああああああ！！！！」

シグナムが剣 レヴァンティンで優斗に斬りかかる

優斗「はっ!!」

優斗もバルカディアスで斬りかかりつばぜり合いになる

シグナム「ふふふ……同じ剣士、私の闘志が震えているぞ  
蒼波!!」

優斗「はあ……それはどうも!!」

優斗が力を込めてバルカディアスを振る

シグナム「せえい!!」

バルカディアスを振った後の優斗にすぐさま斬りかかるシグナム

バルカディアス<Protection>

レヴァンティンと優斗の間に白いシールドが現れ、レヴァンティンを受け止める

シグナム「なっ」

優斗「はあ！！！」

受け止めた時に出来たシグナムの隙を逃さずにバルカディアスでシグナムを一閃する優斗

シグナム「がはっ！？」

そのまま吹きとばされビルの壁に激突するシグナム

優斗「はぁ・・・・・・・・・・はぁ・・・・・・・・・・これで終わるといいんだけど」

シグナムとの斬りあいでも消耗している優斗

バルカディアス<・・・・・・・・・・どうやら、まだのようだな>

バルカディアスがそう言うのと瓦礫をどけながらシグナムが立ちあがっていた

シグナム「蒼波・・・・・・・・・・次の一撃で終わらせる」

レヴァンティンからカートリッジが2発排出され、剣全体が炎に包まれる

優斗「バルカディアス、カートリッジロード」

バルカディアス<Round Cartridge>

バルカディアスからもカートリッジが2発ロードされ、剣が白い光に包まれる

シグナム「紫電……………」

優斗「光輝……………」

互いに、相手めがけて走り

優斗・シグナム「一閃!!!」

剣がぶつかり、訓練場全体に衝撃が走り、2人を煙が覆った……………

なのは「蒼波君！？シグナムさん！？」

それを画面越しで見ていたなのはは2人の名前を呼んで安否を問う

スバル「す、凄い……………」

エリオ「シグナム副隊長と互角に……………」

キャラ「あの一撃も同じ位なんて……………」

ティアナ「・・・・・・・・・・・・・・・・」

なのは「2人とも！！大丈夫ですか！？」

シグナム《ああ》

なのは「蒼波君は！？」

シグナム《安心しろ、気絶しているだけだ》

シグナムの横には地面に倒れている優斗がいた

なのは「もう・・・・・・・・やりすぎないで下さいね」



シグナム《ふっ．．．善処しよう》

突如始まった優斗とシグナムの模擬戦はシグナムの勝利で終わった．  
．．．．．

## 第1話 烈火の将との戦い（後書き）

優斗「さすがシグナム副隊長……俺なんかでは話にならない」

天照大神「シグナムに1撃いれたお前も凄いがな」

優斗「俺なんてまだまださ」

天照大神「そうか。次回、第2話「4年ぶりの再会？」です」

優斗「じゃあな」

## 第2話 4年ぶりの再会？

優斗とシグナムの模擬戦から数日後・・・

なのは「みんな！！今日も頑張って訓練するよ！！」

FW「はいっ！！」

朝早くからFWはなのはの教導を受けていた

なのは「朝練の内容は5分内に私に1撃入れるか逃げ切る事。ただし、誰かが一度でも攻撃を喰らえばリセット。最初からやり直したよ」

ティアナ「みんな？5分間なのはさんの攻撃避けられる自信はある

「？」

優斗・スバル「ない!!」

エリオ・キャロ「ありません!!」

4人はティアナの質問に即答する

ティアナ「私もないわ……なら」

優斗「やることは1つだ……」

スバル「なのはさんに1撃入れる!!」

なのは「ふふっ……それじゃあ、スタート!!」

なのはの掛け声で訓練は開始された

優斗「ふっ、はっ!!」

スバル「くっ！」

エリオ「うわっ!？」

優斗、スバル、エリオはなのはに近づこうとギリギリにアクセルシ  
ューターを避け続ける

キャロ「フリード、ブラストレイ!!」

フリード「きゅー!!」

キャロはフリードに指示を出し、フリードはアクセルシューターに  
火球を放つ

ティアナ「このっ!!」

ティアナは落とせる範囲のアクセルシューターを銃で撃ち落として  
いた

優斗「このままじゃいずれ誰かが喰らうぞ!!」

ティアナ「分かってるわよ!!」

優斗はティアナに念話を飛ばして打開策を模索し始める

優斗「スバル、これから言う俺の案に乗ってくれるか!？」

スバル「いいよ!!--それをすればなのはさんに1撃与えられるんだよね!!--」

ティアナ「ちょっと!?!勝手に進めないでよね!!--」

優斗「いいから俺の作戦を信じろ!!--まず俺とスバルが囧になって高町教導官に隙を作る」

ティアナ「それで!?!」

優斗「そこを一番スピードのあるエリオに託す!!--いいなエリオ!」

エリオ「で、でも僕のスピードだけじゃ」

キャロ「わ、私がブースト魔法使います！！エリオ君は一度戻ってきてー！！」

ティアナ「あゝもう！！あんたの作戦に乗ってあげるわよ！！エリオ！！直ぐに後退してー！！」

エリオ「はい！！」

エリオがそのままティアナとキャロの位置まで後退する

優斗「悪いなスバル、危ない役目にしちまって」

スバル「ううん……だって、これがチームなんだものー！！」



なのは「2人とも、おしゃべりしていると当たるよ?」

優斗・スバル「!!!!」

2人は自身に向かって飛んでくるアクセルシューターをギリギリでかわす

優斗「はあああああ!!!!」

スバル「てえええええええい!!!!」

優斗とスバルはそれぞれ反対方向からなのはに迫る

なのは「甘いよ」

なのは2人の間にそれぞれシールドを展開する

優斗「!!」

なのは「これじゃあ私に当たらないよ」

なのはがそういった瞬間

エリオ「てえええええええええい!!!!!!」

エリオが槍 ストラードを突き刺しながらなのはに向かってきていた

なのは「!!」

そしてエリオがなのはに接触し煙が舞う

ティアナ「やった………？」

ティアナが4人が見えないなか状況を把握しようとする

なのは「うん………合格だね」

煙の中からはなのはが少し笑いながら出てきた

エリオ「えっ………？」

傍にいたエリオがなのはの言葉に声をだす

なのは「私のシールドを貫いてバリアジャケットに攻撃が届いた。  
訓練内容クリアだよ」

スバル「やったあ!!」

優斗「ふう……」

地面に降りていたスバルが喜び、優斗は構えていた剣を降ろす

なのは「朝練はここまで、みんなシャワーあびたら午前中はデスクワークしっかりやろうね」

FW「はい!!」

そして各々はシャワーを浴びに寮に戻っていった

優斗を除いて

なのは「蒼波君?なんで戻らないの?」

優斗「いえ……少し残って自主練したくて」

なのは「駄目、ちゃんと身体を休ませないといつか壊れるんだよ？」

優斗「……………分かりました。あ、高町教導官」

なのは「なに？」

優斗「今日、中將から呼び出しが来ているので午後の訓練などが受けられないんですが……………」

なのは「そっか。分かったよ」

優斗「すみません、では」

優斗は礼をして寮に向かった

フェイト「……………捜査の手伝い？」

10 時頃、部隊長室にいるはやてから呼び出され私は部隊長室に来ていた

はやて「そうや。師匠からお願いされてな」

フェイト「ゲンヤさんが？」

ゲンヤ・ナカジマ

陸士108部隊の部隊長でスバルの父親である

はやて「108には執務官の資格を持つてる人がいないんよ。それで、今追ってる犯罪者捕縛の手伝いをしてくれってお願いが来たんや」

フェイト「でも、私はあいつの捜査が……」

はやて「そこもわかつとる。108が今追ってる犯罪者も関係してるかもしれないんや……」

フェイト「……分かった」

はやて「お願いな、現地に行けば部隊所属の捜査官がいるはずやか

らその子聞いてな」

フェイト「うん」

はやて「まあ、向こうさんからしたら嬉しい再開やな」

フェイト「？」

はやての言葉の意味が分からずにフェイトは108の犯罪者捕縛の人達がいる場所に向かった……



局員「お疲れ様です、ハラOWN執務官!！」

フェイト「いえ」

フェイトは現地に到着し、108の局員にあいさつした

局員「あちらのテントに担当の捜査官がいます。そこで話を」

フェイト「分かりました」

フェイトは指示されたテントの中に入る

フェイト「失礼します、テストロッサ・ハラOWN。ただいま到着しました」

？「ど、どうもハラウン執務官！！現場指揮担当のギ、ギンガ・ナカジマです！！よ、宜しくお願いします！！」

中にいたのはフェイトより2、3歳ほど下の女の子だった

その子はフェイトが入ってきた瞬間、慌てるように敬礼していた

フェイト「ギンガ………？もしかしてあの時の」

ギンガ「は、はい！！その節はお、お世話になりました！！」

フェイト「ふふっ………落ち着いてギンガ」

ギンガ「は、はい………」

ギンガを落ち着かせるフェイト

フェイト「それで、状況は？」

ギンガ「はい．．．．数人の犯罪者がこの先の樹海に潜伏しています。ただ、なかなか反応が確認出来なくて搜索が滞っているんです．．．．．」

フェイト「それで私が呼ばれたんだね」

ギンガ「はい．．．．すみません」

フェイト「ううん、ギンガ。部隊員の指揮を他に任せられる人はいる？」

ギンガ「は、はい。なんにんかいますけど」

フェイト「その人に指揮を任せて、私と行動してくれるかな？」

ギンガ「フエ、フェイトさんですか!？」

フェイト「広い樹海の中、私でも探すのは時間がかかる……  
特に今はリミッターがあるしね」

ギンガ「……分かりました」

ギンガはフェイト考えに乗り、指揮を任せて樹海の中に入っていった……

そして、その頃樹海の真上に1人の人物が浮いていた・・・・・・・・

？「ここか・・・・・・・・？」

？？＜ああ、この樹海内にと内容には書かれていた＞

その人物は背中に白い翼を2対羽ばたかせていた

？「・・・リ・ッテ・への内通者・・・・・・・・そいつの捕縛だったな」

？？＜そうだ・・・・・・・・いくぞ＞

？「ああ」

その人物は翼を羽ばたかせて樹海の上空を飛び始めた・・・・・・・・

フェイトとギンガはバリアジャケットを纏って樹海の中を動いていた

フェイト「バルディッシュ、反応は？」

バルディッシュ「駄目です・・・・・・反応、確認出来ません」

ギンガ「どうしましょうフェイトさん……」

フェイト「このまま少しずつ探すしかないよ……」

ギンガ「分かりましきゃあ!？」

ギンガが地面に浮き出ていた木の根っこに足を引っ掛けころんでしまっ

フェイト「大丈夫、ギンガ？」

ギンガ「は、はい」

ギンガが立ちあがろうとした時に彼女の首元から一本の針金に通っている白と黒の1組の羽がぶら下がる

フェイト「それ……」

ギンガ「は、はい……あの時、助けてくれた人の羽です……」

4年前の空港火災、その時2人を助けた人物がそこを去る際に落としていった白と黒の羽

フェイト「私と同じで大事にとっておいたんだ……」

フェイトはそういつて自身の首元からギンガと同じように針金に通された羽を取り出す

ギンガ「あの人は……今何処に……」

フェイト「あのお礼……まだ伝えてないのにね……」



その時、2人が進んでいた方向から爆音が聞こえた

ギンガ「フェイトさん!!」

フェイト「いくよギンガ!!」

ギンガ「はい!!」

2人は羽をバリアジャケットの内側にしまつと全速力で音のした方向に移動していった……

フェイト「!!!!」

樹海が少し開けたような場所に出た2人が最初に目にしたのは地面に倒れ込む数人の男達だった

ギンガ「この人たち……私達が追っていた犯罪者です!」

フェイト「なんでこんなふうに……」

フェイトがその先を見ると2対の白い翼を広げ、白の仮面に黒いラインが入り額から鼻までを隠している仮面（参照：機動戦士ガンダムSEEDのラウ・ル・クルーゼの仮面）をつけている1人の人物がいた

フェイト「あ、あなたは……?」

フェイトが問いかけるが仮面の人物は何も言わず翼を羽ばたかせて空に浮いてしまう

フェイト「ま、待って!!」

フェイトは飛行魔法を使ってその人物を追う

フェイト「ど、どうして逃げるんですか!？」

仮面「・・・・・・・・・・」

仮面の人物は何もしゃべらずフェイトに背を向けている

フェイト「あなたは・・・・・・・・4年前の、人ですよ？私達を助けてくれた」

仮面の人物は何も言わずフェイトの言葉を聞いている

フェイト「私！！ずっとあなたに言いたい事が！」

その時、仮面の人物が下を見たと思いきや突然急降下していった

フェイト「えっ！？」

仮面の人物はギンガの前に降り、彼女を翼と両手で守るように覆い隠す

その時、その人物の背中に1つの魔力弾が命中した

フェイト「なっ！？」

フェイトが驚いていると1人の倒れていた犯罪者が指を向けていた

犯罪者「へ、へへ……これで仲間の敵は取れたな……」

犯罪者は今にも気を失いそうな状態でしゃべっていた

フェイト「!!」

フェイトがその犯罪者の前に降り、バインドをかける

フェイト「あなた達を拘束します」

フェイトは犯罪者達にバインドをかける

フェイト「あの人は・・・！」

フェイトが後ろを向くと魔力弾が当たった際に生じた煙が次第に晴れてきていた

そして煙が晴れるとさっきと変わらぬ体勢でギンガを守っている仮面の人物の背中が見えた

フェイト（・・・・・・・・あれ？なんで私、胸が痛く・・・・・・・・）

その姿を見たフェイトは胸にチクンとした痛みを感じた

ギンガ「あ、あの・・・・・・・・」

仮面「・・・・・・・・大丈夫か？」

仮面の人物がギンガから離れると仮面に罅が入り、目の部分が完全に壊れ蒼い瞳が見えていた

ギンガ「か、仮面が……」

仮面「気にするな……」

その人物は申し訳ない顔をしていたギンガの頭に手を置く

ギンガ「あ、あうう……／／／／／」

その行動に顔を赤くするギンガ

（また……だ。また胸が痛い……）

再び胸に痛みを感じるフェイト

仮面「・・・・・・・・・・・・・・・・」

仮面の人物は羽を広げ、羽ばたかせると空に浮いて行ってしまう

フェイト「あ、あの！！あなたの名前は！？」

フェイトが仮面の人物に問う

仮面の人物はフェイトの声に反応し、振り返ってその蒼い目でフェイトを見つめる

仮面「俺は・・・・・・・・」「アサルト」、「白黒のアサルト」だ・・・・・・・・」

そっいつて仮面の人物・アサルトはそこから飛び立ってしまった・・・・・・・・



### 第3話 アゲスタでの戦闘

フェイトとギンガがアサルトに助けられてから数日後……

FW陣と隊長達は地球に出張任務に行き、依頼されたロストロギアの回収に行った

回収の際、ティアナがしっかりと指揮をとり優斗、スバル、エリオの3人のコンビネーションで押さえキャラが封印を施し解決したのだ

そして、その日からさらに数週間後……

前線メンバーと隊長達はヘリの中で話していた……

はやて「今日の任務、みんなわかつとるな？」

ティアナ「はい」

優斗「ホテル・アグスタで行われるオークションの警護ですね・・・」

なのは「うん。オークション中に取引されるかもしれないロストロギアを狙って来るかもしれないんだ」

エリオ「そんな・・・」

フェイト「そして襲ってくるガジェットを操ってるのが・・・」  
ジェイル・スカリエツ「」

フェイト操作して出した画面には1人の男の顔が映っていた

フェイト「S級広域次元犯罪者……数年前から私が追ってるんだ」

そう言った時のフェイトの表情は何処か怒りがこもっていた……

なのは「みんなも一応頭に入れといてね」

優斗「はい」

キャロ「あれ……？シャル先生、その箱は……？」

キャロがはやての隣にいるシャルの足元の箱を見て問う

シャル「これ？ふふっ……隊長達+彼の仕事着」

キャラ「彼……？」

はやて「そや、優斗君や」

優斗「はい!？」

はやてに指名され驚く優斗

なのは「優斗君は私達隊長陣と一緒に中の警備に当たってもらうの」

優斗「き、聞いてませんよ高町教導官!？自分は外の配置かと……」

はやて「部隊長命令やで」

優斗「は、はあ……………」

はやての言葉にため息をつく優斗

？「八神部隊長！もうすぐ到着す！」

はやて「お、ありがとうなヴァイス君」

ヴァイス「いえ」

操縦席から声をかけたのはヴァイス・グランセニック陸曹。機動六課の優秀なパイロットだ

そしてヘリがアグスタのヘリポートに着き、なのは達はヘリから降りる

シャル「はい、優斗君」

降りた優斗はシャルから1着の服を渡される

優斗「はあ……これを着ればいいんですね」

優斗は服を持って更衣室に向かおうとすると

なのは「優斗君、更衣室の近くでちゃんと待っててねー!!」

そんな声が後ろから聞こえ、またため息を吐きそうになる優斗だった……

着替え終わった優斗は首元ぶら下がっている愛機と念話していた

優斗「はあ……………」

バルカディアス「おい優斗、そんなにため息してると幸せが逃げ  
ぜ？」

優斗「六課であの人にあった時点でもう手遅れだよ……………」

優斗はある人物の姿を頭の中に浮かべる

優斗（もう会うことは無いと思ってたんだけどなあ……………）

なのは「あ、いたいた」

前方から声が聞こえ、前に意識を向ける優斗

はやて「へえ……似合っとするよ優斗君」

フェイト「ほんと……大人っぽい」

なのは「うん、カッコイイよ優斗君」

3人は優斗の服をみて感想を言う

優斗の恰好は全体的に黒く、黒いサングラスもかけていた

優斗「サングラスかけているのによく自分だと分かりましたね……」



」・

なのは「にやはは・・・・・・・・・・」

なのはは少し笑っていた

はやて「で・・・・・・・・どうやっ？うちの服は？」

はやては一回転して優斗に聞く

優斗「3人ともよくお似合いですよ。モデルみたいです」

なのは・フェイト・はやて「えっ・・・・・・・・／／／」

優斗は笑顔で答えたが、それを聞いた3人は顔を赤くしてしまった

優斗「？」

なのは（にゃ……なんか恥ずかしいよ……／＼／＼／＼／）

はやて（優斗君の顔見てあんな言葉聞いたら……やばいで  
／＼／＼／＼／）

フェイト（ど、どうしたんだろ私！？／＼／＼／＼／心臓がバクバク  
言ってる……／＼／＼／＼／）

優斗「……どうしました？」

なのは「にゃ、にゃんでもないよ！……？」

はやて「そ、そうや！……！」

フェイト「だ、大丈夫だから!!」

優斗「はあ……………」

優斗は3人の言葉を少し某けて聞いていた……………  
・  
・

スバル「今日は八神部隊長の騎士が全員集合かあ……………」

スバルとティアナはエリキャラと別れて2人で行動していた

ティアナ「そういえばあんたは隊長達に少し詳しいんだっけ？」

スバル「うん、シグナム副隊長にヴィータ副隊長。それにシャマル先生とザフィーラが部隊長の個人戦力でリイン空曹長も含めて6人で局の切り札だって……………」

ティアナ（やつぱり、ね。隊長達は歴戦のエース。エリキャラは身内で……………あの年でBランクになっただけじゃなくレアスキル持ち……………スバルはバカだけこれからもっと伸びるだろうし……………私だけ、凡人……………）

スバル「ティア？」

ティアナ「あ、ごめん。なによスバル？」

スバル「ティアがなんか……元気なさそうだったから」

ティアナ「平気よ、私の心配しないで今は警備に集中しましょ」

スバル「うん」

2人は念話を切る

ティアナ（でも……私だって、やれるんだから！）

ティアナは沈んでいく夕焼けに染まっている空を見て決意していた・  
・・・・・

フェイト「今の所は危険物や以上はないみたいだね」

バルディッシュ「そうですね」

バルカディアス「見つけ次第報告します」

フェイト「うん、ありがとう」

優斗「あ、あの……ハラOWN執務官？」

フェイト「駄目、はやてとの約束忘れたの？」

優斗「す、すみません……。フェ、フェイトさん……」

優斗が何故フェイトを名前で呼ばないといけないのか

それは数十分前に遡る……。……

はやて「こちらは2組に別れて行動する。不審なものを見つけ次第連絡や」

優斗「はい」

なのは「分かったよ」

はやて「じゃあ……うちは優斗君とペアで」

なのは・フェイト「ま、待った!!」

はやての言葉に待ったをかける2人

フェイト「ず、ずるいよはやて!!」

なのは「そうだよ!!優斗君は私と回るの!!」

優斗「えと……自分は誰とでも……」



はやて「2人とも、なら優斗君に決めてもらおうや」

優斗「え、ええ!？」

なのは「そうだね」

フェイト「うん、それが公平だ」

3人は優斗にじりじりと迫ってくる

なのは・フェイト・はやて「さあ、誰と回るの!？」

優斗「えと……じゃ、じゃあ……」

優斗はフェイトの方を見る

優斗「ハ、ハラウン執務官。い、いいでしょうか？」

フェイト「ふえ！？う、うん／＼」

なのは「そ、そんな……………」

はやて「くつ…………でも次は……………」

2人は悔しそうに呟いている

はやて「あ、そや。優斗君、アグスタにいる時はうちらを名前で呼んでや」

優斗「え！？な、何故ですか！？」

はやて「他のおえらいさんにしつこく言われない為や。なのはちゃん、いくで」

なのは「うん。また後でね2人とも」

はやてとなのははそう言っ歩いて行ってしまう

フェイト「じゃあ・・・行こうか優斗」

優斗「は、はい・・・」

そして優斗とフェイトもアグスタの中を歩き始めた・・・  
・・・

優斗「でもフェイトさん……う、腕に抱きつく必要はないのでは……」

フェイトは優斗の右腕に抱きついている

フェイト「だ、駄目……かな？」

上目づかいで優斗を見るフェイト

優斗「そ、その……恥ずかしいんですよ……」

フェイト「そ、そっか・・・・・・・・・・／／／／／」

その言葉を聞いたフェイトは何処か嬉しそうだった

フェイト（何だろう・・・・・・・・優斗とこうしてると、心が安心というか・・・・・・・・安らいでいるというか・・・・・・・・）

フェイトはよく分からない感情に少し戸惑っていた・・・・・・・・

ティアナ「このっ！！」

スバル「はあああああああああ！！！！！」

あれから数時間が経過し、外では突然現れたガジェットにティアナ達が応戦していた

シグナム「はっ！！！」

シグナムがレヴァンティンを振り、ガジェットの数機を一気に破壊する

ヴィータ「てええええええええい！！！」

ヴィータは持っている槌　ぐらーファイゼンでガジェットをたたき壊している

？「うおおおおお！！！！」

青い狼が吠えると同時に、白い魔法陣が現れそこから砲撃がガジエツトに放たれ貫通し爆発する

この狼の名はザフィーラという

スバル「すごい……………」

ティアナ「あれで…………リミッター付き」

スバルとティアナは3人の戦いに見ほれている

ティアナ「って私達もやるわよ！」

スバル「うん！！」

ティアナ（そうよ．．．いつも通りやればいい。ランスターの弾丸は、どんなものでも打ち抜くんだから！！）

ティアナは決意した表情でガジェットに魔力弾を放ち始めた

フェイト「外で戦闘．．．．．」

はやて《うん．．．．．FWやうちの家族が応戦してくれとるよ》



優斗とフェイトはホテル内の廊下の隅ではやてとなのはと通信で話していた

優斗「なら自分も………!?!」

2人の横を1つの何かが通り過ぎ、外との壁を破壊して外に出る

優斗「バルカディアス!!」

バルカディアス< S t a n d B y R e a d y . >

優斗はバリアジャケットを起動してそのまま外に向かう

フェイト「優斗!?!」

フェイトの声を無視して先程の何かを追っていく優斗

優斗「さっきの……もしかしたらロストロギアを持っていたかもしれない」

バルカディアス<ああ、優斗！>

優斗「！！」

優斗の前方には3つの人影があつた

？「ほう……管理局の魔導士か」

？？「どうする旦那、ルールー？」

???「私は……捕まるわけにはいかない」

？「そうだな．．．．．悪いが此処は逃がさせてもらうぞ、局の魔導士よ」

優斗「させるか！！」

優斗はバルカディアスで斬りかかる

？「ふん！！」

人影の中の中年の男性が突然槍を取り出してバルカディアスを防ぐ

？？「旦那！！」

？「先に行けルーテシア、アギト。こいつは俺が押さえる」

???「分かった……………」

??「くっ…………あたしはすぐにもどるからな旦那!!」

残りの人影の足元に魔法陣が広がると同時に、人影の姿は消えてしまった

優斗「転移魔法……………じゃあ、さっきの人がガジェットを」

?「ふん!!」

男性が槍を振るい優斗は回避して距離を開ける

優斗「バルカディ阿斯、カートリッジロード」

バルカディアス<Round Cartridge.>

優斗はカートリッジを一発ロードすると、剣が白い光に包まれた

?「・・・・・・・・・・・・・・・・」

男性が持っている槍からも一発、カートリッジが排出される

優斗「光輝・・・・・・・・閃!!」

?「うおおおおおおお!!!!」

剣と槍がぶつかり、凄まじい衝撃波が発生する

優斗「!?!」

？「くっ！？」

お互いの技が相殺され、再び距離を開く

？「なかなかだな…………その実力、騎士といってもいいだろう」

優斗「あなたは…………何者だ」

？「俺か…………俺は、ゼスト。ゼスト・グランガイツだ」

優斗「ゼスト…………グランガイツ」

ゼスト「悪いが此処で捕まるわけにはいかない。俺にはやるべき事がある」



アギト「大丈夫か、旦那!？」

ゼスト「ああ」

アギト「ルールーが待ってる。早く逃げよう」

アギトの言葉でゼストもそこから立ち去ろうとするが

? < H e a v e n   B u s t e r . >

ゼスト・アギト「!？」

一筋の白い光線が2人の横を通り過ぎる



ゼスト「なっ・・・・・・・・」

飛んできた方向を見ると、2対の白い翼が見えた

しかし、2人の姿はそれを見た瞬間に消えてしまった

？< 転移したな・・・・・・・・追跡は出来そうにない>

？？「・・・・・・・・そうか」

その人物は翼を消して、そこから立ち去った・・・・・・・・

## 第5話 挫折したT／成長するために必要な事

優斗 side

アグスタで戦闘が終了してから数時間後

六課の面々は破壊されたガジェット等を調べていた

優斗「ティアナがミスを……………ですか？」

なのは「うん……戦闘中に、コントロールしきれなかった魔力弾がスバルに直撃する所だったんだって……………」

優斗「ですがウィータ副隊長が防いだんですよね？」

なのは「うん。だからティアナは無事、今は裏の方に見回りに行ってるよ」

優斗「そうですか……………」

2人が話しているとフェイトと1人の男性が傍に来た

フェイト「なのは」

なのは「フェイトちゃん、ユーノ君」

？「久しぶり、なのは」

なのは「うん！」

優斗「えつと……………」

フェイト「優斗、こちらはユーノ・スクライア。本局無限書庫司書長なんだ」

ユーノ「初めまして」

優斗「此方こそ」

優斗とユーノは互いに握手した

フェイト「なのは、スクライア司書長の警護たのんでいいかな？私はエリオ達の様子を見てくるから」

なのは「うん、いいよ」

なのははそう言ってユーノと別の方向に歩いて行った

優斗「ハラOWN執務官、自分は……………」

フェイト「もう……………終わりなんだ……………」

フェイトは残念そうに呟いた

優斗「あの……………何か言いました？」

フェイト「ううん……………優斗はエリオ達の手伝いをお願い。だから、2人の所に行こうか」

優斗「はい」

優斗とフェイトは離れた所でガジェットを調べているエリオとキヤロの元に歩いて行った

優斗    s i d e    o u t

なのは    s i d e

なのは「久しぶりだね、ユーノ君と話すの」

ユーノ「そうだね」

なのはとユーノは並びながら話していた

ユーノ「なのは……無茶はしないでね」

なのは「ユーノ君……？」

ユーノ「なのはは昔から加減を知らないからな……」

なのは「うー……そんな事無いもん」

私は頬を膨らませながらユーノ君に言う

ユーノ「誰だつて、友達が傷つくのは嫌なんだ……あの時だつて」

なのは「そつか……私は大丈夫、もうあんな事が起きないようにしてるんだから」

ユ一ノ「うん・・・・・・・・」

私達はその後も、別れるまで楽しく話していた

なのは s i d e o u t

フェイト s i d e

フェイト「此处だよね・・・・・・・・」



バルディッシュくはい>

私は優斗と別れ、ホテルの付近の林の一角に来ていた

そこは、一部分の木々や草が焦げていた

バルディッシュく蒼波氏が昨夜、此処で戦闘していたのは間違いな  
いようです>

120

フェイト「昨日、あの壁を破壊した人物と戦闘したって聞いたけど・  
・・・・・・?」

フェイトがその付近を調べていると白い羽が数枚落ちているのを見  
つけた

フェイト「これ・・・・・・なんで、これが此処に・・・・・・  
」

フェイトはそれを拾って何かを考えだした・・・

フェイト    s i d e    o u t

ティアナ    s i d e

アグスタの事件から数日、私は自分が起こした失態を恥じ自主練を始めた

それがスバルにもばれて結局、2人で新しい作戦の練習になっている

スバル「明日の模擬戦、これなら大丈夫だよティア！」

ティアナ「ほんとうにいいのスバル？これ、かなり危ないのよ。私はともかく、あんたは尊敬してるなのはさんの事を裏切る事に・・・」

スバル「なのはさんだってちゃんと説明すれば分かってくれるよ！それに、私はティアのパートナーなんだよ？ティアの味方なんは当たり前だよ」

ティアナ「（バカスバル・・・・）分かったわよ。じゃあ、最終確認。やるわよ」

スバル「うん！」

ティアナ（そうだ・・・・私は強くなるんだ。それを明日の模擬

戦で、さらに・・・!!)

ティアナ side out

優斗 side

俺は今、訓練場の近くでティアナ達の自主練を見守っている  
今日が初めてではなくティアナが1人で始めた日からずっとだ

バルカディアス「いいのか優斗？ナカジマはともかくランスターは・  
・・・」

優斗「ああ。だけどなバル・・・だれだって1度も失敗しないで強くなれるわけがない。強くなるには、失敗だって必要なんだ・  
・・」

バルカディアス「分かってるさ・・・お前が、そうだったかな」

その後、2人の自主練が終わってから優斗も部屋に戻った・・・

優斗 side out

翌日

訓練場は廃棄ビルの設定になっていた

なのは「今日の内容、みんな覚えてるよね？」

FW陣「はい!!」

ヴィータ「肩に力入れないで、いつも通りやれよ」

なのは「最初はスターズの2人から。準備してね？」

スバル「はい！」

ティアナ「分かってます」

なのははバリアジャケットを纏い、レイジングハートを持って訓練場に浮遊し始めた

ティアナ（やってみせる………ランスターの弾丸の力の証明を！！）

優斗 side

模擬戦がスタートして直ぐに、離れた所のビルの屋上で模擬戦を見ていた俺たちの所にハラOWN執務官がやってきた

フェイト「あ……遅れちゃった」

ヴィータ「まだスターズが始まったばかりだぞ」

フェイト「本当は私がスターズも受け持つ予定だったんだけど……」

ヴィータ「確かに、なのはの奴……最近、ろくに休んでねえからな」

エリオ「あっ！ティアナさんが」



ヴィータ「クロスファイアか……けど」

ティアナが撃った魔力弾　クロスファイアーがなのはに迫っていく  
しかし、なのは放ったシューターに破壊されてしまう

フェイト「いつもの……キレがないね」

フェイトがそれを言うと同時に、背後からスバルがウィングロードを展開してなのはに迫る

なのははスバルに魔力弾を放つが、スバルはそれを回避最小限の回避で避けなのはに1撃を入れに行く

なのは「!!」

なのははすぐに防御を展開してスバルの攻撃を防ぐ

エリオ「ああ！？惜しい！！」

キャロ「あと少しだったのに……………」

ヴィータ「おかしいな……………あいつ、あんな事今までしたか？」

フェイト「ううん……………」

エリオ「あれ……………ティアナさんは？」

エリオの言葉で、ティアナを探すが無処にも姿が見つからない

キャロ「あ、あれ！！」

キャラが指を指した方向には、ティアナが銃　クロスミラージュを構えて砲撃の体勢にはっていた

ヴィータ「ティアナが砲撃！？あいつ、いつの間に！！」

フェイト「でも、ティアナの魔力総量じゃ……………」

優斗「違う……………」

フェイト・ヴィータ「え……………！？」

優斗が言つと、砲撃を放とうとしていたティアナの姿が一瞬で消えた

キャラ「げ、幻術！？」

エリオ「じゃあ、本物のティアナさんは・・・・・・・・」

なのはもティアナを見失っており、周りを見回している

ティアナ「はあああああああ！！！！！」

ティアナはスバルが出したウイングロードを走り、クロスミラー  
ユの砲身からオレンジの魔力刃を現出させながらなのはに迫っていた

ティアナ「一撃必殺！！はあああああ！！！」

なのは「レイジングハート・・・・・・・・モード、リリース・・・・・・・・」

そして2人がぶつかり、煙が舞う

フェイト「なのは!？」

優斗「・・・・・・・・・・」

煙が晴れると、ティアナの魔力刃を素手でつかんでいるなのはの姿があった

ティアナ「!？」

なのは「ちゃんとさ・・・・・・・・」

ティアナ「えっ・・・・・・・・」

なのはは何処か悲しい表情で話し始める

なのは「練習通りやろうよ・・・・・・・・練習の時だけ、言う事聞い

てる振りをしても……本番でしなきゃ、練習の意味……  
ないよ」

ティアナ「っ！！！」

なのはの言葉を聞いたティアナは上空のウイングロードに移動して  
クロスミラーージュをなのはに向けて構える

ティアナ「あたしは……もう、傷つけないから！！」

目に涙をためながら砲身に魔力を込めるティアナ

なのは「……………」

なのはは無表情でティアナに指を向け、魔力弾を複数形成し始める

ティアナ「誰も失いたくないから！！だから……強くなりました！」

なのは「そう……」

ティアナ「うあああああ！！！！ファントムブレイ」

なのは「クロスファイアー、シュート」

ティアナの砲撃が放たれるよりも早く、なのはの魔力弾が放たれティアナに命中し煙がティアナを覆う

スバル「ティアー！！あれ、バインド！？」

なのは「そこでじつとしてて……」

なのはの側にいたスバルはバインドで動けなくなっていた

なのは「私の言ってる事、間違ってたかな・・・？」

スバル「え・・・・・・？」

なのはが言った言葉に反応するスバル

その間に煙が晴れてくる

スバル「え・・・・・・？」

なのは「じゃまするのかな・・・・・・優斗君」

優斗「いえ・・・・・・ただ、これ以上は模擬戦にはならないと思った  
だけです」



優斗がバリアジャケットを纏い、ウイングロードの上に倒れている  
ティアナを守るようにして立っていた

優斗「高町教導官、これ以上ティアナに攻撃するのなら……  
此処からは俺が相手をします」

剣をなのはに向けて、優斗はそう言った

優斗   s i d e   o u t

**第5話 挫折したT／成長するために必要な事（後書き）**

次回はあの悪魔と優斗が戦います

ちゃんと書けるのか不安ですが・・・

では

## 第6話 白翼の翼とAの涙（前書き）

どうも、天照大神です

今回は魔王降臨・・・・・・・・

優斗と魔王の戦い、どうなったのか・・・・・・・・！

どうぞ、ご覧ください・・・・・・・・ってあれ？なんだあのひk

天照大神は桃色の光に飲み込まれた

## 第6話 白翼の翼とAの涙

優斗 side

なのは「優斗君……優斗君も、私の邪魔をするのかな？」

優斗「……………」

優斗はなのはの問いに答えず無言でバルカディアスを構える

なのは「そう……なら、君にもお話だね……………」

なのはがそう言つと待機状態だったレイジングハートが起動し、なのはの手に収まる

優斗「……………行きます!」

優斗はウイングロードを蹴り、なのはに向かって行った

なのは「デイベインシューター」

なのはの周りに20個程の魔力弾が現れる

優斗「おいおい……あれで本当に魔力リミッターかかってるのかよ……」

バルカディアス「流石はエース・オブ・エース、という訳だな」

優斗はなのはの出した魔力弾を見ながらバルカディアスと念話していた

優斗 side out

フェイト side

ヴィータ「なにやってるんだあいつら！？早く止めねえと！！！」

フェイト「駄目！なのは念話の回線閉じてるみたい！！」

さっきからなのはに何回も念話をし続けているけれど一向に繋がらない……

エリオ「優斗さんにも通じません!」

キャロ「ど、どうすれば……」

私達は2人の戦闘をどうすれば止められるのか考えていた

フェイト「スバルにティアナも早く避難させないと!!あそこに居続けるのは危険だよ!!」

ヴィータ「分かってる!!よし、あたしが」

優斗《来ないで下さい、ヴィータ副隊長》

ヴィータがバリアジャケットを起動しようとした時に、彼女の横に優斗が通信画面を開いてきた

優斗「2人は俺が避難させます。それに、この戦闘に手を出さないで下さい」

ヴィータ「何言ってるてめえ!!! いいから早く戦闘を止める!!!」

フェイト「そうだよ!!! いくらなのはにリミッターがあっても、今の優斗じゃ勝てないんだよ!?!」

優斗「平気です、では」

優斗はそう言って通信画面を切ってしまった

フェイト side out



優斗    s i d e

俺は回線を切ると同時にスバルの横に降りた

スバル「ゆ、優斗さん……………」

優斗「大丈夫だ、今から避難させる」

優斗はスバルにかけられていたバインドを解除する

バルカディアス<Protection>

2人の前にプロテクションが張られ、そこに魔力弾が命中し煙が  
あがる

優斗「今だ」

スバル「は、はい！」

2人はそれを利用してティアナが倒れている所に移動する

なのは「・・・・・・・・・・・・・・・・」

それを見たなのはは魔力弾による攻撃を停止する

優斗「スバル、ティアナを連れてハラオウン執務官達がいるビルの屋上に行くんだ」

スバル「で、でも!!」

優斗「それと、着いたらウイングロードを解除してくれ。俺は自分で飛べるからな」

スバル「・・・・・・・・はい」

スバルはティアナを背負ってウイングロードに乗ってフェイト達の方角に向かった

優斗「攻撃、しなかったんですね・・・・・・・・」

なのは「2人には、後でお話するって決めたから・・・・・・・・」

優斗「・・・・・・・・・・」

なのは「優斗君には、命令無視の分・・・・・・・・しっかりと話してあげるよ」

なのははそう言うと今度は40個もの魔力弾を出現させた

優斗「・・・・・・・・・・!!」

俺は向かって来る魔力弾をひたすら斬り続けた

なのは「・・・・・・・・・・」

魔力弾が消滅するたびになのはは効率よく魔力弾を形成して攻めていく

2人は戦闘を続けている間にフェイト達が目視出来ないほど遠くに動いていた

優斗   s i d e   o u t

フェイト   s i d e

フェイト「スバル！！大丈夫！？」

スバル「は、はい……………」

スバルが私達がいる屋上にティアナを背負って避難してきた

ヴィータ「あたしはティアナをシャマルの所に連れて行ってくる！  
！フェイト、後は任せたぞ！！」

フェイト「うん！」

ヴィータがティアナとスバルを連れて屋上から出ていく

エリオ「フェイトさん……………」

エリオが不安げに私を見る

フェイト「大丈夫……………きっと」

私は安心させるようにエリオの頭をなでる

キヤロ「あっ！！2人が移動してます！！」

キヤロの言葉で2人の方を見ると、私の視界からどんどん遠ざかっていた

終いにはほとんど見えなくなるほど移動していた

フェイト「なのは・・・・・・優斗・・・・・・」

私は2人の名前を口にしていた・・・・・・

フェイト side out

優斗・なのは side

なのは「そろそろ……終わりにしようか」

私はレイジングハートを優斗君に向けて構え、魔力を収束し始める

レイジングハート<Divine Buster.>

その魔法は私の得意魔法砲撃、デイバインバスター

いくら優斗君でもこれは防げるはずがない



優斗「・・・・・・・・・・・・・・・・」

優斗君は何故か目を瞑って剣を降ろしている

なのは「・・・・・・・・？でも、これはお話だから・・・・・・・・」

そう言っている間に魔力が収束を終える

なのは「デイベイン・・・・・・・・バスタアアアアアアア！！！！」

そして、桃色の砲撃が優斗君に一直線に向かい、命中した

時間を少し遡ってなのはが魔力を収束し始めた頃

バルカディアス「いいのか優斗？この力は・・・・・・・・」

優斗「ああ、確かにフェイト執務官に見られるのはまずい。だけど、ここならフェイト執務官がいた場所からは遠くて見えない。だから大丈夫だ」

バルカディアス「そうか・・・・・・・・なら、俺はなんにも言わん」

優斗「ごめんな・・・・・・・・バル」

そして目を閉じている優斗になのはの砲撃が直撃した

なのは「これで終わり………」

なのはが振り返って戻ろうとするが

バルカディアス<Heaven Buster.>

なのは「!？」

なのはの背中に白い砲撃が向かって来る

レイジングハート<Protection>

しかし、レイジングハートがプロテクションを張り防がれる

なのは「ありがとう、レイジングハート………」

砲撃が飛んできたのは優斗がいる煙の中からであった

なのは（デイバインバスターを防いだ……？）

私が疑問に思っていると煙が一気に吹き飛ぶ

なのは「えっ……………」

煙の中からはさっきまでのバリアジャケットに白い2対の翼を広げている優斗の姿があった

なのは「なにな………？それは」

優斗「俺の……………隠し玉一つですよ」

優斗は翼を羽ばたかせながらなのはを見る

優斗「高町教……………いや、なのはさん」

なのは「なにな………？」

優斗「俺はもちろん、スバルやティアナ。エリオにキャロは確かにあなた達と比べたら凡人です……けど」

優斗は降ろしていたバルカディアスを構えなおす

優斗「凡人は凡人なりに、努力して……それで、挫折してこそ強くなれる事だってあるんです」

なのは「私の何が間違ってるって言うの……?」

優斗「……」

なのは「私の思いが分かるの!? 私は!! 教え子の皆に……私のように辛い思いをさせたくない!! だからじっくりと、基礎を大事に訓練してるんだよ!!!」

なのは目に涙をためながら優斗に叫ぶ

優斗「誰にだって．．．他人の思いが必ず通じるわけがない、でもだからこそ！！話しあう必要があるんです！！なのはさんは気づいてたんですか！？ティアナが焦ってる事に！？」

なのは「そ、それは．．．．．」

優斗「話さないと．．．．．伝えないと！！お互いにすれ違ってしまっ．．．．．！あなたはそれでいいんですか！？」

なのは「う．．．うわあああああ！！！！」

レイジングハート<Divine Buster Full Power>

レイジングハートからカートリッジが4発排出され、方針に桃色の魔力が集まる





「!!」

白と桃色の砲撃がぶつかり衝撃波が発生した

優斗「っ・・・・・・・・・・」

なのは「・・・・・・・・・・!!」

拮抗している2つの砲撃が次第に桃色がおされていく

優斗「はあああああ!!!!!!」

・そして、そのまま白い砲撃はなのはを飲み込んだ・・・・・・・・

なのは（私………）

なのはが目を開けると少しぼやけている青い空が目映った

優斗「気がつきましたか？」

なのは「優……斗、君」

なのはの顔をのぞくように優斗の顔が目映る

相変わらず視界がぼやけているが優斗の顔だと判断出来た

なのは「私……負けたんだ」

何があつたかを理解した私は1度目を閉じる

優斗「……………なのはさん」

名前を呼ばれ、目を開いて優斗君の顔を見る

優斗「ティアナに……………伝えて下さい、なのはさんの教導に  
対する思いを……………どうして、それを信じているのかを……  
……」

なのは「優斗、君……………」

ぼやけていた視界が次第に治っていき、なのはの目には優斗が天使のように見えた

優斗「俺は……あなたの、味方ですよ……いつまでも」

なのは「あ……」

優斗はなのはの頭を撫でながら優しくなのはに言った

優斗・なのは side out

## 第7話 思い

フェイト side

あれから暫くすると、優斗がなのはを抱えて私達の所に飛んできた

フェイト「なのは！！優斗！！」

ビルの屋上に降りた2人に私にエリオ、キャロが近寄る

なのは「にやはは……………ごめんね、フェイトちゃん」

フェイト「なのは！怪我は無い？」

なのは「うん……………平気だよ」

エリオ「優斗さんは!？」

優斗「俺も大丈夫だ」

キャラ「よ、よかったです……」

エリオとキャラにそう言っている優斗を私は見た

優斗「すみません、ハラOWN執務官……勝手に行動してしまっ……」

フェイト「……優斗はその後、私からお説教だよ」

優斗「分かりました……」

なのは「ごめんね、優斗君……」

優斗「いえ、なのはさんが悪いわけではないんですから……」

フェイト「っ……」

なんだろう、優斗がなのはを名前で呼んだ瞬間……胸が少し痛くなった……？

優斗「俺はこのままなのはさんを医務室に連れて行きます。それでいいですか？」

フェイト「うん……エリオ、キャラも。今日の模擬戦は中止、分かった？」

エリオ・キャラ「はい」

優斗「それじゃあ、いきますねなのさん」

なのは「うん」

優斗はなのはをお姫様だっこで連れて行った

フェイト「つ……………」

それを見た私は、また胸が痛くなるのを感じていた



フェイト「このへんかな………」

訓練場の一角を歩いていた私はふと足をとめた

フェイト「うん………なのはの魔力が残ってるね」

辺りからはなのはの魔力が感知出来た

フェイト「あのなのはを止めるなんて………優斗、どうやったのかな？」

いいながら足を動かして何か手掛かりがないか探す

フェイト（この辺のサーチャーが何故か機能していなかったのはなんでだろう……？）

本来なら訓練場内にはサーチャーがいたる所に設置されており、映像を離れていても見る事が出来る

しかし、優斗となのはの戦いは見る事が何故が出来なかったのだ

私は1つのサーチャーに触れて以上が無いが簡単に確認する

フェイト「うん……………異常はない、ならなんで……………」

考え込もうとした私は、足元に白い何かを見つけた

フェイト「こ、これって!?!」

それを手に取った私は驚きを隠せなかった

フェイト「……………」

私はそれを服のポケットにしまって訓練場を後にした

フェイト      s i d e      o u t

優斗      s i d e

なのはさんを医務室に連れて行き、その後ハラオウン執務官に呼ばれたので俺は談話室に向かっていた

優斗「説教で談話室を使うのか……普通？」

バルカディアスくさあな、命令を無視した罰だろ>

優斗「はあ……………」

バルと話している間に談話室の前に着き、扉を開ける

優斗「ハラOWN執務官、蒼波優斗です」

フェイト「あ、来たね優斗。此处に座って」

フェイトは自身の前にある椅子を指し、優斗はそれにしたがって座った

優斗「って、他の局員は？」

フェイト「ちょっとお願いして部屋から出て貰ったんだ」

優斗「そ、そうですか……………」

バルカディアス「優斗、頑張れよ」

優斗「あ、ああ……………」

フェイト「じゃあ、始めるよ……………」

そして、フェイトのお説教が始まった……………」

1時間が経過したがフェイトはまだ続けていた

フェイト「優斗」

優斗「は、はい……………」

一端、話の区切りになった所でフェイトが優斗の名前を言った

フェイト「正直に答えて欲しいんだ……………」

優斗「は、はあ……………」

フエイト「あなたは・・・・・・・・4年前、私とギンガを助けてくれた人だよね？」

優斗「えっ・・・・・・・・」

ハラオウン執務官の言葉に俺は啞然としていた

フエイト「あなたは・・・・・・・・私とギンガを「白黒のアサルト」と名乗って、助けてくれたんだよね・・・・・・・・？」

優斗「な、何の事ですか？自分にはよく分かりませんが・・・・・・・・」

フエイト「4年前、私とギンガを助けた時あなたが広げていた翼。その羽を私とギンガは1つずつ持っているの。優斗がアグスタで戦闘した場所に今日のなのはとの戦いで戦った場所にも、ね・・・・・・・・」

優斗「・・・・・・・・・・」

フェイト「優斗、あなたはやっぱり・・・・・・・・」

フェイトが言いかけた瞬間、部屋内にアラート音が鳴り響いた

優斗「敵!?!」

フェイト「優斗、すぐに隊長室に行くよ!?!」

優斗「はい!?!」

優斗とフェイトはすぐに部屋から飛び出して隊長室に向かった



バルカディアス「おい優斗・・・・・・・・」

優斗「・・・・・・・・なに？」

バルカディアス「もう・・・・・・・・隠しておく必要はないんじゃないか？」

優斗「つ・・・・・・・・」

バルカディアス「過ぎたる力は争いを生むだけでも・・・・・・・・此処の人達なら、信用出来ると俺は思う」

優斗「・・・・・・・・」

バルカディアス「ま、俺はお前の指示に従っただけだな」

優斗はバルカディアスの言葉に答えず、隊長室に急いで向かい続けた

優斗   s i d e   o u t

アラートの正体は海上に出現したガジェットだった

隊長達の指示でガジェットはフェイト、ヴィータ、優斗が破壊に向かいすぐに終わった

その間、FWはシャリーリーとなのはの2人から、なのはの教導の意味。そして、その原点といえるある事件を聞かされた

それを聞いたティアナは自分の行動を恥じ、なのはと2人で改めて話をし和解した

優斗「・・・・・・・・・・」

そんななか優斗はセッティングがされていない、平地状態の訓練場にいた

バルカディアス<優斗・・・・・・・・・・>

バルカディアスの言葉に答えず、優斗は夜空を見上げていた・・・・・・・・

第8話    D a t e    W i t h    F a t e (前書き)

どうも天照大神です

ISの執筆に集中してしまい此方を忘れていました・・・

大変申し訳ありません

では、本編をどうぞ

## 第8話    D a t e    W i t h    F a t e

優斗    s i d e

あれから数週間

俺達はいつも通りになのはさんの教導を受けていた

なのは「みんな、お疲れ様」

FW「は、はい……………」

朝の訓練が終了し、皆木に背を預けながら返事をしていた

なのは「でね、実は今日の訓練が第二段階の見極めテストだったんだけど……………」

えっ！?という声がFW陣から上がる

なのは「どうでした?」

なのはがフェイトとヴィータに聞く

フェイト「合格」

スバル・ティアナ「はやっ!」

フェイトの即答に2人が声を出していた

ヴィータ「まあ、こんだけ鍛えたんだから合格しない方がおかしいけどな」

優斗「そ、そうですか……」

なのは「私も良い線いってと思うし……これで第二段階終了！」

フェイト「デバイスリミッターも一段解除するから、後でシャーリーの所に行って来てね」

ヴィータ「明日からはセカンドモードでの訓練もやるぞ」

FW「はいつ……！」

優斗「あの……明日から、ですか？」

俺はヴィータ副隊長の「明日」に疑問を感じた

ヴィータ「ああ、訓練再開は明日からだ」

なのは「みんな初日から訓練づけだったから」

フェイト「今日は久しぶりの休暇って事。みんな、楽しんできてね」

FW「はい!!」

優斗（休暇か……俺は特にいく所はないんだがどうするか・  
・・・）

優斗はシャワーを浴びに行く道の途中で考えていた



優斗「・・・・・・・・・・」

時間は10時、優斗は自室のベッドの上で寝ころんでいた

バルカディアスくでかけないのか、優斗？>

優斗「俺は特に行くあてもないからな」

バルカディアスの問いに即答する優斗

コンコンッ

優斗「？どつぞ」

部屋の扉がノックされ、返事をする優斗

フェイト「優斗」

優斗「ハラオウン執務官？」

扉が開き、入ってきたのは私服姿のフェイトだった

優斗「どうしたんですか？」

フェイト「うん。優斗、私と一緒にクラナガンに行かない？」

優斗「じ、自分が一緒にですか？自分よりもなのはさんとかがいるのでは……」

フェイト「む……………」

ハラオウン執務官が少し不機嫌な声を出した

優斗（俺……………なにか言ったか？）

フェイト「私は優斗と行きたいの、分かる？」

頬を膨らませながら俺に言うハラオウン執務官

優斗「……………分かりました、準備をするので一度出ててもらえますか？」

フェイト「うん、分かった」

俺はハラオウン執務官が外に出ると同時にささつと着替え始める  
準備を終え、俺は部屋から出る

優斗「終わりました、じゃあ行きましょうか」

フェイト「うん！」

返事をしたハラオウン執務官は俺の右腕に抱きつく

優斗「あ、あの……離して下さい」

フェイト「だめ」

笑顔で否定され、ハラオウン執務官はさらに腕に密着してくる

優斗（む、胸が……／＼／＼って駄目だ駄目だ、変な事考えるな）

優斗は腕に当たる感触をなるべく無視しつつクラナガンに向かった

優斗   s i d e   o u t

フェイト   s i d e

フェイト（うゝ………此処までしてるのに優斗は何も言ってくれない………）

フェイトは今日の為に仕事を多くこなし、今日の予定を開けていたのだ

全ては優斗と少しでも一緒にいたい為である

フェイト（あの日以来優斗はなのはと親しげだし……しかも名前で呼ぶようになってるし……）

優斗がなのはを名前で呼ぶようになってからフェイトはある事を思っていた

優斗「あの……ハラオウン執務官？」

フェイト「……フェイト」

優斗「えっ……？」

フェイト「今日一日、フェイトって呼んでくれないと何も答えない・  
・・・」

優斗「・・・分かりましたよ、フェイトさん」

フェイト「っ・・・・・・・・・・／／／」

名前を呼ばれて胸が暖かくなるフェイト

その影響か頬を少し赤く染まる

フェイト（何でだろう・・・・・・・・やっぱり、優斗に名前と呼ばれる  
と心が温かくなる・・・・・・・・）

フェイトは自身に起きている変化にすこし戸惑っていた

雑談をしながら、2人はクラナガンのショッピングモールを歩いていた

簡単に言えば、ウィンドウショッピングである

フェイト「ねえねえ優斗！！あの服可愛いと思わない？」

優斗「そうですね、蒼と黄色の組み合わせが特徴的で良いと思います」

ガラスケースに置いてある新商品の服を見たり



フエイト「あ！！このお人形可愛い！！」

優斗「そうですね」

小物等を販売していたカートの中の人形を見ていた

フエイト「~~~~~」

アクセサリー等を扱っている店内でブレスレットを見ていたフエイトは優斗に話しかけた

フエイト「優斗　なに見てるの？」

優斗「いえ、色々な種類があるなあと・・・」

フエイト「そっか」

その後、2人は店からでてショッピングモールの中心にある噴水の  
場所で一休みしていた

フェイト「ごめんね優斗、私が振り回しちゃって」

優斗「いえ、フェイトさんが楽しんでいるならそれでいいですよ」

フェイト「優斗・・・・・・・・・・ありがとう」

優斗はその言葉を聞いた後、座っていたベンチから立ち上がる

優斗「すみません、俺ちよっと・・・・・・・・すぐに戻りますから!!」

フェイト「あつ優斗!?!」

優斗はそのまま走って行ってしまった

フェイト「もう・・・・・・・・・・」

フェイトは座りながら頬を膨らませる

フェイト（駄目だなあ私、ホントは優斗の休暇なのに私だけが楽しんでじゃって・・・・・・・・）

フェイトは目を瞑って思考する

フェイト（うん、午後は優斗が行きたい場所に行こう・・・・・・・・後で聞かないとね）

その時

「ねえ彼女？１人？」

フェイト「はい？」

フェイトが座っているベンチの前に３人の男達が立っていた

男１「なんならさあ、俺達と遊ぼうよ」

フェイト「お断りします、連れがいますので」

男２「そう言わないでさあ、俺達といた方が楽しいよ？」

フェイト「結構です」

男3「ほら、俺達がいい場所案内してやるよ」

男の1人がフェイトに手を伸ばす

しかし

優斗「俺の連れに何してるんですか………?」

いつの間にか戻ってきていた優斗が伸びかけていた手を掴んでいた

フェイト side out

優斗 side

戻ってくるとフェイトさんが男3人組に絡まれていたのが見えた

しかも、1人がフェイトさんに手を伸ばしたのを見て俺はその手を掴んだ

優斗「大丈夫ですか、フェイトさん？」

フェイト「優斗！！うん！！」

男3「誰だてめえ？」

優斗「この人の連れですよ」

男が手を引つ込めようとしていた為、俺も掴むのを止めた

男2「おいおい、俺達が話してたのに割り込むんじゃないよ」

男1「痛い目見たいのか？」

優斗「はぁ……これを言っても言えますか？」

俺は局員の証拠のカードを3人に見せる

男1「ま、マジかよ……」

男2「ど、どうする……」

男3「くそっ……」

優斗「今謝れば見逃しますよ？ただし、二度とこっぴどい事をしないで下さいね？」

男達「」「す、すみませんでした……」「」

男達はそう言って立ち去った

優斗「大丈夫ですか、フェイトさん？」

フェイト「う、うん。有難う優斗」

俺は手を差し伸べてフェイトさんが手を取って立ちあがる

優斗「このまま此処にしていると目立ちますし、移動しましょうか」

フェイト「うん」



俺達は移動して、時間も時間だったので昼食をとる事にした

店に入り俺はハンバーグ、フェイトさんはドリアを注文して食べていた

蒼也（うまそうだなフェイトさんのドリア……）

俺は意識はしていなかったがドリアを見つめていた

フェイト「優斗、ドリア食べたいの？」

優斗「えつと……はい」

フェイト「うん……優斗のハンバーグを食べさせてくれるならいいよっ」

優斗「有難うございます、じゃあ……」

俺は適度な大きさに切ったハンバーグをフェイトさんに渡そうとする

フェイト「駄目……その、あーんして食べさせて／＼」

優斗「……はい？」

フェイト「ほら」

フェイトは口を軽く開いて待機していた

優斗（くっ……恥ずかしいけど仕方ない!!）

優斗は意を決してハンバーグをフェイトの口に持っていく

優斗「・・・・・・・・あーん」

フェイト「あーん／＼・・・・・・・・うん、美味しい」

優斗「そうですか・・・・・・・・じゃあ、俺も貰いますね」

フェイト「うん。はい、あーん」

優斗「・・・・・・・・フェイトさん、何してるんですか？」

フェイト「ほら、食べて優斗」

優斗「拒否権は・・・・・・・・？」

フェイト「ないよ ほら、あーん」

優斗「……………あーん／／／」

その後、2人は残りを全てあーんで済ませていた

優斗 side out

## 第9話 黒い翼

優斗 side

優斗「俺が……行きたい場所、ですか？」

フェイト「うん」

昼食を終えた俺達はこの後どうするかを話していた

優斗「特に無いんですが……」

フェイト「うーん……」

俺の言葉に考え込むフェイトさん

その時

ピピピっ、ピピピっ

フエイト「キャロから・・・全体通信？」

キャロ《こちらライトニング4。緊急事態の為、全体通信で状況を報告します！》

優斗「どうした？」

キャロ《路地裏にてレリックのケースを発見。そのケースは女の子が持っていました》

エリオ《女の子は意識不明です、指示をお願いします》

フェイト「救急の手配は隊長陣がやるから、応急手当をお願い！」

スバル《優斗さん！》

スバル達と通信が繋がる

優斗「俺達も現場に向かう、そこで合流だ」

スバル《はい！》

はやて《全員配置に就いて。安全に保護するで、その2人もレリックも》

全員《はい（了解）！！》

フェイト「いくよ優斗！」

優斗「はい！」

俺とフェイトさんは急いでキャロ達の元に向かった

シャル「もう大丈夫、手当は終わったわ」

シャルが診察をすませ、その場にいる俺達に告げる



なのは「せっかくの休日だったけど……みんなはこれから現場調査だね」

優斗「いえ、仕方ないですよ」

シャル「なのはちゃん。この子をへりまで運んでもらえるかしら？」

なのは「はい」

なのはは女の子を抱きかかえ、へりに向かった

優斗   s i d e   o u t

はやて side

シャーリー「っ！ー！来ました！ガジェット反応、地下水路よりガジェット？型総数20、空中よりガジェット？型、総数200！！！」

はやて「多いな……」

ヴィータ《はやて！！》

ヴィータから通信が入る

ヴィータ《会場で演習中だったんだけど、ナカジマ三佐から許可をもらった。それと》

ギンガ《108部隊のギンガ・ナカジマです。別件の捜査をしていますんですが、其方の事件と関係がありそうなんです。其方に協力してもよろしいでしょうか？》

はやて「うん、お願いや。リインはヴィータと合流して南西方向を」

ヴィータ・リイン《ああ（はいです）！！》

はやて「なのは隊長、フェイト隊長は反対側方向を」

なのは・フェイト《うん（分かった）》

はやて「ギンガは下でスバル達と合流や」

ギンガ《はい！！》

．．．．．気をつけんと、なにか起きそうや．．．．．

はやて      s i d e      o u t

優斗      s i d e

ギンガ《久しぶりね、ティアナ》

ティアナ「はい、とりあえず合流ポイントはさっき言った場所で」

ギンガ《うん》

はやて《割り込みごめんな。ギンガ、あんたは何の捜査をしてたんや？》

ギンガ《私が捜査をしていた現場に5、6歳ぐらいが入る生体ポットが2つあり、更に何か重い物を引きずった様な跡がありましてそれを追ったら…それとこの生体ポットを前に見た事があるんです》

ギンガが展開した画面に割れているポットが映る

はやて《私もや……人造魔導師計画の素体培養機》

キヤロ「人道魔導士って……？」

スバル「優秀な魔導士の子供に投薬や機械をいれて後天的に力を与えられた存在……」

ティアナ「倫理的は勿論、その他の方でも問題が山の様にあつてよ  
つぽどどうかしていないと手を出さない技術なんだけどね……」

優斗「……………」

スバル「優斗さん？」

優斗「なんだ？」

スバル「いえ……なんだか、表情が暗かったので」

優斗「気にするな。それに……お出ましだ」

優斗達が進んでいた通路の先にガジェットが数機確認できた

ティアナ「行くわよ!!」

4人「了解!!」

ガジェットとの戦闘が始まった

優斗 side out

はやて side

シャーリー「そんな・・・ありえない！！目標の敵航空戦力増大  
！！」

ルキノ「なのは隊長達も目視可能」

はやて「グリフィス君、ここは任せるで」

グリフィス「は、はい！！」

はやては指令室から出て行った

はやて side out



フェイト side

なのは「シュート!!」

なのはがアクセルシューターを放つが何機か通り抜けてしまう

フェイト「幻影か……なのは、ここは私がやる」

なのは「フェイトちゃん!？」

フェイト「限定解除して……広域殲滅でいつきに終わらせる  
！」

はやて《残念やけど、それは部隊長権限で却下や》

通信画面が開き、騎士甲冑姿のはやてが言う

フェイト「はやて!？」

指令室で指揮をしてたんじゃ!？

はやて《私がクロノ君に頼んで限定解除して殲滅する、2人はヘリの護衛に行つて欲しいんよ》

なのは「でもはやてちゃん!」

はやて《うちは前線に出るタイプやあらへん……2人が使うよりは、私が今使う方が敵に手の内見せても問題あらへん》

フェイト「はやて………」

はやて《頼むで……嫌な予感がするんや》

フェイト「……分かった、行こうなのは」

なのは「はやてちゃん、気をつけてね!!」

はやて《ありがとな》

はやてと通信を切り、私達は全速力でへりに向かった

フェイト side out

優斗 side

あの後、俺達はレリックを見つけたが突然現れた紫の髪の少女とそ  
の子の召喚獣と思われる敵と交戦していた

優斗「はあっ!!」

召喚獣「・・・・・・・・」

何度も斬りかかるが全て止められる

ギンガ「はあああああああ！！！！」

召喚獣「・・・・・・・・」

ギンガ「くっ！？」

ギンガが背後から殴りかかるが召喚獣が後ろ向きに回転で蹴りを入れ吹き飛ばされる

その時

？「うおりゃあああああ！！！！」

優斗「!？」

俺達がいた空間が激しい光に包まれた

？「へっ！このアギト様 came からはルーラーとガリユーには手  
出させねえぜ!!」

??「ありがと、アギト……」

赤い髪で、大きさがリンと同じ妖精な感じの少女は紫の髪の女の  
子の側に浮いていた

優斗「ユニゾンデバイス……!!」

ティアナ「どうします、優斗さん!？」

優斗「くっ……………」

あらたな敵戦力の追加に焦る優斗とティアナ

ヴィータ「お前ら、動くなよ!!」

優斗・ティアナ「!!」

ドガアアアンツ!!!

天井が壊れ、空いた箇所からヴィータとリンが降りてくる

リン「凍てつけ!!」

リンが放った凍結魔法により紫の髪の少女とアギトが凍る

召喚獣「……………!!」

召喚獣が援護に向かうとするが

ヴィータ「てりやあああああああ!!!!」

ヴィータが振るった一撃で壁に吹き飛んだ

ヴィータ「おし、みんな無事だな」

優斗「有難うございます、ヴィータ副隊長」

ヴィータ「いや……………」



リン「駄目です、逃げられました!」

ヴィータ「ちつ……こつちもか!」

リンの声に反応してヴィータも召喚獣の方を見るが何処にもいなかった

ゴゴゴゴゴゴゴゴ……

その時、地下水路全治が揺れ出した

ヴィータ「なんだ!？」

キャロ「さっきの女の子……多分召喚士だったんです!おそらく大型の召喚獣を召喚したんだと思います!」

ヴィータ「くっ……地下から逃げるぞ!!」

ヴィータの指示に従い、外に脱出し始めた

優斗 side out

女の子「いいよ地雷王……ガリユーもお疲れ様」

女の子は召喚していた召喚獣を戻していた

アギト「なあルールー、やっぱあいつらに協力するのは止めようよ」

女の子「駄目……ドクターはお母さんを治してくれるんだもの……その為に、？番のレリックを……！」

アギト「なっ！？」

2人の身体をバインドが縛りあげる

ヴィータ「つと……捕まえたぜ」

2人を囲むように、ヴィータ・優斗・ギンガ・ティアナが立ち、キヤロとエリオはレリックのケースを持って少し離れていた

女の子「……私はいいけど」

ヴィータ「……………」

優斗（この反応……マズイッ!?!）

俺は飛行魔法と加速魔法を併用して急いでへりの方向に向かう

ヴィータ「おいっ!?! 優斗!?!」

女の子「大事なへりはどうするの……………」

ヴィータ「なっ……………」

ヴィータがへりの方向を確認すると高い魔力を確認できた

女の子「あなたはまた……守れないかもね」

ヴィータ「!!!?」

ヴィータが女の子に掴みかけると同時に通信画面越しに爆音が聞こえてきた

なのは side

高い魔力反応を感知した私は全速力でへりに向かっていた

その時、反応があった場所から砲撃がへりに向かって放たれる

なのは（っ！？間に合って！！！）

砲撃が当たる前にへりの前に到着するなのは

なのは「レイジングハート！！ミッドウェー限定解除！！エクシードモード！！」

レイジングハート＜OK！！＞

限定解除し、防御魔法を展開しようとするが

なのは（駄目っ…………展開が間に合わない

）

その時、なのはの前に黒い翼を2対広げた人物が割り込み、左手を

砲撃に向け防御魔法を展開して砲撃を防ぎ始めた

なのは「!!」

なのはもようやく展開した防御魔法で砲撃を防ぎ始めた

そして砲撃が収まる……

なのは「……………優斗、君？」

優斗「話は後ですなのはさん!! 敵が逃げます!!」

なのは「う、うん!!」

私は優斗君の言葉に従って砲撃を撃った人物に砲撃を放つ

優斗「フェイトさん!」

優斗君は通信でフェイトちゃんに向かって叫ぶ

フェイト《逃がさないっ……!!》

フェイトちゃんの砲撃もギリギリでかわし、敵は逃げ始める

はやて《おとなしく……捕まるんや!!》

最後に、はやてちゃんの広域殲滅魔法「デアボリック・エミッショ  
ン」が空間を攻撃した

けれど……

はやて《駄目や……逃げられた》



なのは「そんな！？確かに当たったはずだよ！？」

フェイト《多分……高速起動出来る仲間がいて、助けたんだと思う》

優斗「そうですか……………」

なのは「ゆ、優斗君……………」

優斗「まあ、誰も怪我などはありませんしレリックも女の子も守れましたから……………」

なのは「そ、そうだね……………ひとまず、終わりがな」

優斗君の言葉で私は戦闘態勢を解除した

な  
の  
は  
  
s  
i  
d  
e  
  
o  
u  
t

## 第10話 伝えなかった言葉（前書き）

どうも、天照大神です

実はコンディション最悪な状態で書いてました……

頭痛、鼻炎、喉の痛み

昨日少し出かけた際に突風によっていたと思われる花粉にやられた  
っぽいです（汗）

では、本編をどうぞ……

## 第10話 伝えたかった言葉

優斗 side

昼間の緊急出動も無事終了し、時刻は20時

今俺は部隊長室で危機に陥っている

理由はあの力を使ったからだ

はやて「……………で、優斗君。あの黒い翼はなんなんや?」

優斗「えつと……………やっぱり話さないと駄目ですか?」

はやて「当たり前や。レジアス中將から貰った資料には書かれてなかった力……………詳しく聞かせてもらっつで?」

優斗「……………はい」

なお、部屋には八神部隊長の他に隊長陣がそろっていた

優斗「昼間のあれはバルカディアスのリミッターを外した時に使える「バロムフォーム」です」

ヴィータ「バロム……フォーム？」

優斗「簡単に言えばフルドライブと同じく、高出力の威力が出せるようになるんです」

はやて「それだけならなんで資料には隠してたんや？」

優斗「………言えません」

はやて「………分かった。なにやら事情ありのようやし、深くは追求はせんよ」

優斗「有難うございます……………」

八神部隊長の優しさに少し救われた感じがした

なのは「えっと……………」

そこになのはが手を上げて介入してきた

なのは「その……………優斗君はあの黒い翼、バロムフォームって  
言ったよね？」

優斗「はい」

なのは「じゃあ……………私を止めてくれた時のあの白い翼はなん  
なの？」

フェイト「白い……翼？」

あ……忘れてた

なのはさんを止める時に使ったんだった……

その言葉に反応してハラOWN執務官が話しかけてくる

フェイト「優斗……？それも話してくれるよね？」

優斗「……バル」

バルカディアス<ああ>

俺はバルカディアスにその時の映像を展開させた

ヴィータ「ほんとだ……白い翼が生えてやがる」

優斗「それは「アルカディアスフォーム」です」

はやて「アルカディアス……」

優斗「俺は普通が剣を使うフロントアタッカーですが……その2つの時はポジションが変わります」

フェイト「ポジションが……?」

優斗「アルカディアスはハラOWN執務官のようなオールラウンダー型に、バロムではなのはさんのような砲撃主体の型です」

はやて「それはさっき言うてたリミッターのせいなんか?」



優斗「まあ・・・そうですね。六課に配属される際に魔力リミッターもかけたので外さない限りは本来の動きは無理ですね」

なのは「じゃあ・・・優斗君の戦闘スタイルは最初からオールラウンダーなの？」

優斗「はい」

俺の言葉に納得する隊長達

はやて「うん、なら話しはお終いや」

優斗「ふう・・・・・・・・」

俺が一息つくと黙っていたシグナム副隊長が話しかけてきた

シグナム「蒼波・・・・・・・・明日全力で私と手合わせn

」

優斗「お断りします」

シグナム「何故だ！？ただ貴様の本気と斬り合いたいというだけなのに！？」

なのは「シグナムさん！？あなたが本気出したら訓練場が持たないんですよ！？」

優斗「なのはさんもう言ってますし、駄目です」

シグナム「くっ・・・・・・・・」

ヴィータ「バトルマニア・・・・・・・・」

ヴィータ副隊長は頭に手をのせて呆れていた

はやて「あ、忘れてたわ。優斗君、リミッター外した時の魔導士ランク知りたいんやけど……」

部屋からでる直前に八神部隊長がそう言うて俺は足を止めた

優斗「魔導士ランクですか？」

はやて「そうや、どうせAランクはリミッターつけた状態やろ？」

優斗「……………そのまま忘れてればよかったのに」

俺は小声で呟いた

中將も言っただけど……こついう所が狸っばいんだよなあ……

はやて「だれが狸や!」

心読まれた!?

ヴィータ「で、どうなんだよ?」

なのは「私も知りたいな」

フェイト「私も」

優斗「………に、逃げられない」

俺は諦めて自分の本当の魔力ランクを言う事にした

優斗「アルカディアスフォームとバロムフォームの時の魔導士ランクは……SSです」

隊長陣「え……？」

俺はそう言って部長室から出て行った

部長室を後にした俺は自分でセットした森林形態の訓練場に立っていた

バルカディアス<話しちまったな・・・・・・・・>

優斗「まあ・・・・・・・・なのはさんに見せた時点で覚悟はしてたけどな」

バルカディアス<だがいいのか？・・・・・・・・「アレ」の事は話さなくて？>

優斗「ああ・・・・・・・・此処に・・・・・・・・ハラOWN執務官達を、巻き込むわけにはいかないからな・・・・・・・・」

バルカディアス<すまないな優斗・・・・・・・・俺のせいで>

優斗「気にするなバル、俺が望んでお前と一緒にいるんだからさ」

バルカディアス<・・・・・・・・ありがとう>

優斗「ああ・・・・・・・・・・さて、ばれたとはいえ良い事が1つあったな」

バルカディアス<?>

優斗「此処でアルカディアスとバロムの調整をしても平気だって事さ」

バルカディアス<呑気だなお前も>

優斗「うるせえ・・・・・・・・バル」

バル<ああ>

バルのリミッターを外して俺はまずアルカディアスフォームになった

背中に白い翼が2対生え、大きく広がる

優斗「うん・・・・・・・・問題はないな」

剣状態のバルを何回か振り、翼を使って木々の間を飛行する

優斗「次はバロムだ」

バルカディアス<ああ>

一度地面に降りると、白い翼は一転して黒く染まった

右手には剣ではなく杖があった

もちろん、杖はバルである

優斗「こつちも以上はなし・・・・・・・・と」



アルカディアスと同じ様に飛行し、確認を終える優斗

がさっ・・・・・・・・

優斗「!?!」

後ろから足音が聞こえ後ろを振り向く

フェイト「・・・・・・・・・・」

優斗「ハラオウン・・・・・・・・執務官?」

そこには俺を見つめるハラオウン執務官の姿があった

優斗「どうしたんですか？」

しかしハラウン執務官は俺の言葉を無視してバロムフォーム状態の俺の前まで歩いてくる

さわっ・・・・・・・・

優斗「・・・・・・・・はい？」

ハラウン執務官はなにも言わず翼を触り出した

フェイト「・・・・・・・・やっぱり」

ハラウン執務官は何か確信したのか今度は俺の方を向く

フエイト「優斗が・・・・・・・・私とギンガを助けてくれたんだね」

優斗「・・・・・・・・・・」

フエイト「今触ってはつきりした。この翼の羽と、私が持つてる白と黒の羽から・・・・・・・・同じ魔力に暖かさを感じる」

優斗（もう・・・・・・・・隠しても無駄か）

フエイト「あなたは・・・・・・・・」

優斗「そうですよ・・・・・・・・俺は4年前、空港火災であなた達を助けた人ですよ」

俺の言葉にハラオウン執務官の瞳は揺れていた

優斗「はあ・・・・・・・・・・正体は明かすつもりなかつ  
！？」

俺が言いきる前に俺はハラウン執務官に抱きつかれ、その勢いで  
地面に倒れてしまった

フェイト「・・・・・・・・つと」

優斗「え・・・・・・・・？」

フェイト「やっと・・・・・・・・会えた」

ハラウン執務官は俺の胸に顔を沈め、身体を震わせて言いだした

フェイト「ずっと・・・・・・・・ずっと探してた。会って・・・・・・・・  
お礼を言いたかった」

優斗「お礼・・・・・・・・・・？」

フェイト「うん・・・・・・・・・・」

ハラオウン執務官は顔をあげて俺の顔を見る

その瞳には涙が溜まっていた

フェイト「あの時・・・・・・・・私を助けてくれて、本当に有難う」

優斗「まさか・・・・・・・・それを言うだけの為に俺を探してたのか？」

フェイト「そうだよ・・・・・・・・・・優斗」

優斗「・・・・・・・・・・いのか？」

フェイト「えっ・・・・・・・・・・？」

優斗「怖く・・・・・・・・・・ないのか？あんな・・・・・・・・・・強すぎる力を  
持っている俺が・・・・・・・・・・」

フェイト「怖くなんか無いよ・・・・・・・・・・だって、優斗は私を助  
けてくれた王子様なんだよ？」

優斗「ハラOWN執務官・・・・・・・・・・」

フェイト「優斗・・・・・・・・・・」

2人はいつの間にか完全に見つめあっていた

顔と顔の距離は遠くから見れば重なっているように見えるほど近か  
った

くう・・・・・・・・

優斗「へっ・・・・・・・・？」

フェイト「っ・・・・・・・・／／／／／」

その場に合わない音が聞こえ、俺は疑問の声をあげる

フェイト「うう・・・・・・・・き、聴いた？／／／／／」

優斗「その・・・・・・・・はい」

フェイト「っ・・・・・・・・／／／／／！」

ハラオウン執務官は顔を離して俺の身体の上から退くと暗闇でも分

かる位に顔を真っ赤にしていた

フェイト「な、内緒だよ！！他の人に絶対に言わないでね！！／／／／／」

優斗「・・・・・・・・っはは」

フェイト「もう！！わ、笑わないでよ！！／／／／／」

優斗「す、すみません・・・・・・・・」

俺は笑いをなんとか沈めて立ちあがる

ハラオウン執務官も少し落ち着いたのか立ちあがっていた

優斗「ありがとう・・・・・・・・」



フェイト「えっ……………」

俺はハラウン……………いや、「フェイト」さんに対してそう小さく呟いた

優斗「行きましようか……………フェイトさん」

フェイト「……………うんっ！」

俺達はそのまま訓練場を後にした

優斗 side out

## 第10話 伝えたかった言葉（後書き）

計画停電は本当に辛いと思う天照大神です

今回でた「アルカディアス」と「バロム」ですが分かる人いますかね？

まあ・・・・・・・・分からなくても今は問題ありません

ちなみにオマケ見たいなものがあります

優斗「あむ・・・・・・・・」

フェイト「あむ・・・・・・・・」

2人は六課の食堂で遅めの食事を取っていた

時刻は既に21時を回っていた

優斗「・・・あ、フェイトさん。ソースついてますよ」

フェイト「え？」

フェイトが食べていたスパゲッティのソースがフェイトの唇のすぐ左横についていた

優斗「すみません・・・」

フェイト「え・・・あっ」

優斗は持っていたフォークを置いて、右手の人差指でソースをとり自分の口に入れた

フェイト「あっ・・・／＼ゆ、優斗！」

優斗「？」

フェイト「あ、あゝん／／／／／」

優斗「・・・・・・・・・・あゝん／／／」

フェイトの突然のあゝんに一瞬止まった優斗だったがすぐに受け入れていた

フェイト「えへへ／／／」

すでにフェイトは自分の口を少し開けて待っていた

優斗「あゝん・・・・・・・・」

優斗はフォークで自分が食べていたポテトサラダをフェイトの口に運んでいた

フェイト「・・・・・・・・・・／／／」

優斗「・・・・・・・・・・／／／」

その後もあぐんで互いの食事を食べさせ合っていた2人であった

今話終了後すぐの2人の食事シーンでした

無意識だが完全にいちゃついている2人ww

?「作者さん……………」

??「うちらを……………」

???「忘れないで下さいね……………」

……………(汗)

????????「OHANASHIしよつか……………」

……………ではでは

## 第11話 予言

優斗 side

「なのは「すみませんシグナムさん、車出してもらっちゃって・・・」

シグナム「なに、車はテストロッサからの借り物だ。それに、向こうにはシスターシャッハがいらっしゃる。私が仲介した方がいいだろう」

優斗「・・・・・・・・・・・・・・・・」

なのは「どうかした？優斗君？」

優斗「何故自分まで行く必要があるのですか？」

なのは「え？えつと・・・・・・・・・・」

シグナム「蒼波、今更遅い。こうなつたからには貴様にも来てもらうぞ」

優斗「はあ・・・・・・・・別がいいですけど」

現在、俺達は昨日保護した女の子の様子を見るために聖王協会が管理している病院に向かっている

やはり俺が行く理由が見つからない・・・・・・・・

なのは「当面は六課か協会で預かる事になりそうですね・・・・・・・・」

シグナム「そうだな・・・・・・・・む？」

シグナムとなのはの間にモニターが現れ、そこに女性の顔が映る

？《騎士シグナム。聖王協会、シャツハ・ヌエラです》

シグナム「どうされました？」

シャツハ《すみません。此方の不手際がありまして………検査の合間に、あの子が姿を消してしまい巻いた………》

なのは「シグナムさん」

シグナム「ああ、急いでそちらに向かいます」

シャツハ《はい》

優斗………



病院の駐車場に到着し、車から降りると先程の女性が出迎えてくれた

シャツハ「申し訳ありません！」

なのは「状況はどうなってますか？」

シャツハ「はい・・・特別病棟とその周辺の封鎖と避難の完了。  
今の所は飛行や転移。侵入者の反応は見つかっていません」

なのは「それなら・・・外には、出られないはず。手分けして探しましょ」

シャッハ「はい！」

シャッハさんはそう言って別方向に探しに行った

なのは「じゃあ、私達も手分けして……………」

優斗「……………」

シグナム「どうした、蒼波？」

優斗「いえ……………俺は向こうを探します」

2人と離れて、女の子を探し始める優斗

優斗「いくら人造魔導士とはいえ．．．．この対応．．．．ふざけているのか？」

バルカディアス＜優斗．．．．．＞

優斗「誰だって．．．あの女の子だって人造魔導士に生まれたかったわけじゃない筈なのに．．．．．」

がさっ

優斗「あ．．．．．」

女の子「あ．．．．．」

茂みから音がし、そちらを向くと探していた女の子がウサギのぬいぐるみを持って茂みから顔を出していた

女の子「・・・・・・・・・・」

俺を見た女の子は身体を震わしておびえ始めた

優斗「大丈夫だよ・・・・・・・・俺は、君に何もしないから・・・・・・・・」

そう言った優斗の背中に、アルカディアスフォームの翼が1対現れた

女の子「あ・・・・・・・・」

それを見た女の子は震えが止まって、優斗の傍まで歩いてくる

優斗「・・・・・・・・」

ふあさ・・・・・・・・

女の子「・・・・・・・・」

翼と身体で女の子を優しく抱きしめると、女の子は気持ちよそそつにしていた

優斗「君の名前は・・・・・・・・なにかな？」

女の子「ヴィヴィオ・・・・・・・・お兄ちゃんは？」

優斗「俺は優斗・・・・・・・・蒼波、優斗だよ」

ヴィヴィオ「優斗・・・・・・・・お兄ちゃん」

優斗「なのはさん、女の子を見つけました」

なのは「本当！？今そっちに行くから！」

優斗「はい」

ヴィヴィオを見つけた事をなのはに念話で伝えていると、いつの間にかヴィヴィオは眠っていた

優斗   s i d e   o u t

フェイト side

フェイト「臨時査察って……六課に？」

はやて「うん、地上本部のほうでそういう動きがあるみたいなんよ……」

地上本部「……レジアス中将かな？」

フェイト「今配置やシフトの変更命令が出たりしたら致命的だし……」

はやて「そうなんよなあ……優斗君に頼んで何とか出来んかな？」

フェイト「はやて……」

はやて「冗談や、冗談やからそんな怖い目で見るの止めてくれんフ  
エイトちゃん!？」

やだなあ……そんな目ではやてを見るわけないよ

フエイト「そうだはやて……そろそろ、教えてくれないかな？」

はやて「何をや？」

フエイト「六課の……設立の本当の理由を」

はやて「そやね……この後、聖王協会に行くんよ。カリムに報告、それにクロノ君も来る」



フェイト「クロノも？」

「はやて」「うん。さて、ならなのはちゃんにも伝えへんと……………」

なのはがいる部屋のモニターを付けると

ヴィヴィオ《やだあああああ！！いつちゃやだあああああ！！！！》  
！！！！》

なのは《にゃあああああ！？ほら、泣かないで！？》

ヴィヴィオ《うわあああああん！！！！》

フェイト「……………」

はやて「とにかく……現場に行ってみよか」

フェイト「そうだね……」

私達は部屋から移動し、目的地の扉を開ける

ヴィヴィオ「ぐすつ……ぐすつ……」

優斗「……（汗）」

なのは「……（汗）」

部屋にはなのはに抱きついて、なお左手で優斗の服を掴んで離そう  
としないヴィヴィオの姿があった

はやて「エース・オブ・エースにも勝てん相手がいるんやね」

なのは「フェイトちゃん……はやてちゃん、助けて……」

なのはから念話で助けを求められる

フェイト「えつと……ヴィヴィオ？」

ヴィヴィオ「ふえ？」

フェイトの言葉に反応したヴィヴィオがなのはの胸から顔を離し、フェイトを見る

フェイト「ヴィヴィオはなのはさんと離れたくないの？」

ヴィヴィオ「うん……」

フェイト「それに……優斗の服も掴んでるけど……」

ヴィヴィオ「優斗お兄ちゃんとも一緒にいたい……」

フェイト「そっか……でも、2人にも色々とお仕事とかの事情もあるし……また、後で会えるよ」

ヴィヴィオ「うん……」

フェイト「だから、今はほんの少しだけお別れして、また後で……  
……ね？」

ヴィヴィオ「……うん」

そう言ってなのはから離れて、優斗の身体に抱きつく

優斗「自分が見てますから、フェイトさん達は行って来て下さい」

なのは「ごめんね、優斗君」

フェイト「うん、後でお礼はするから」

はやて「ほな、ヴィヴィオを宜しく頼むで」

優斗「はい」

そして、優斗にヴィヴィオを任せて私達は聖王協会に向かった

「聖王協会」

？「どうぞ」

なのは「失礼します、高町なのは一等空尉です」

フェイト「フェイト・T・ハラオウンです」

部屋に入る際に敬礼をして、挨拶をする

？「いらっしゃい。聖王協会騎士団騎士、カリム・グラシアと申し

ます。どうぞ、こちらへ」

なのは・フェイト「失礼します」

座るように言われ、カリムさんが座っているテーブルの椅子に座る

フェイト「クロノ提督も、お久しぶりです」

クロノ「ああ、フェイト執務官」

カリム「ふふっ……お二人とも、そんなに固くならないで。私たちは個人的にも友人だから、いつも通りで平気ですよ」

クロノ「と、騎士カリムが仰せだ。普段と同じで」

はやて「平気や」

なのは「クロノ君、久しぶり」

フェイト「お兄ちゃん、元気だった？」

クロノ「よ、よせ……………」

フェイト「ふふっ……………」

カリム「兄妹仲がよくていいわね」

はやて「せやな……………さて、始めるで。昨日の動きについてのまとめと、改めて、機動六課設立の裏表について。…それから、今後の話や」

これで分かるんだ……………六課の存在意義が



フェイト side out

優斗 side

現在俺は、六課の中庭でヴィヴィオと一緒にいる

ヴィヴィオ「ふわ・・・・・・・・・・優斗お兄ちゃんの翼、暖かい・・・」

優斗「そうか」

病院の時と同じ様に、翼を1対だけ広げてヴィヴィオを抱きしめて  
いる

よっばどこの翼が気にいったようだ

バルカディアス「この程度なら反応は感知されはしないだろうが・  
・・気を付けておけよ？」

優斗「ああ、分かってるよバル・・・・・」あいつら「に・・・  
・・ばれないよう、注意するさ」

優斗 side out

なのは・フエイト side

六課設立の理由、ロストログア・レリックの対策と、独立性の高い少数部隊の実験例

私達はそう聞かされていた

クロノ「知つての通り、六課の後見人は僕と騎士カリム。それから僕の母親で上官、リンディ・ハラオウンだ。それに加えて、非公式ではあるが、かの三提督も設立を認め、協力の約束をしてくれている」

なのは「三提督………」

フエイト「あの………伝説の三提督が」

カリム「その理由は私の能力に関係しています。私の能力」「予言者  
プロフェーティン・シユリフテン」の著書」。これは最短で半年、最長で数年先の未来。それを詩文形式で書き出した預言書の作成を行うことができます

なのは「未来……！？」

クロノ「聖王教会はもちろん、次元航行部隊のトップもこの予言には目を通す。信用するかどうかは別にして、有識者による予想状況の一つとしてな」

フェイト「そつか……」

はやて「ちなみに、地上部隊はこの予言がお嫌いや。実質のトップが、この手のレアスキルとかお嫌いやからなあ……」

なのは「レジアス・ゲイズ中将……だね、はやてちゃん……」

クロノ「そんな騎士カリムの予言能力に、数年前から少しずつ、あ  
る文章が書き出されている」

予言の文章が読みあげられる

古い結晶と無限の欲望が集い交わる地

血競る王の下、聖地よりかの翼が蘇る。

死者たちの踊り、なかつ大地のほうの塔は焼け落ち

それを先駆けに数多の海を守る法の船が砕け墜ち散る

なのは「それって……」

フェイト「まさか……!？」

カリム「……………ロストログアをきっかけに始まる管理局地上本部の壊滅と、そして……管理局システムの崩壊」

カリムの言葉に、その場にいる全員が静まった

カリム「……………それだけでは、ないんです……………」

クロノ「どういう事ですか……………騎士カリム」

カリム「この文章の続きと思われるものが……………ここ数日、浮かび上がってきたんです」

はやて「なんやて!?!」

カリム「……………白と黒混じりし一筋の希望　その者の力により、かの翼は崩されるだろう」

しかし、いずれ闇を支配し軍勢は　それを

滅せんと現れる

希望すら覆つその間に 希望は飲み込まれる………」

はやて「……………どういう、事や？」

クロノ「分からない……………これについて、さらに調査が必要だな。ユーノにさらに資料を求めるか……………」

フェイト「……………」

なのは「フェイトちゃん？」

フェイト「な、なになのは!？」

なのは「なにか、考えてるようだったから……………」

フェイト「う、ううん。そんな事ないよ」

なのは「そう?」

その後、この事件を……予言を防ぐために動く事を決め私達は六課に戻っていった

なのは・フェイト side out



## 第12話 2人のママ

なのは side

なのは「はい、朝の訓練終了」

FW「は、はい………」

今日も朝からなのはの教導を受けていたFWがヘトヘトになりながらも返事をする

なのは「目立ったミスも無かったし、今後もこの調子で頑張っ  
てね」

FW「はい！」

FWは揃って戻っていったが、優斗は訓練場に残っていた

なのは「どうしたのかな、優斗君？」

優斗「いえ、アルカディアスとバロムの調整をしたくて」

バルカディアス<優斗、展開するぞ>

優斗「ああ」

優斗君がバルカディアスに返事をする、優斗君の背中には黒い翼が2対現れた

優斗「……………問題はないな」

優斗君がそう言うと、黒い翼が一瞬で消えて、今度は白い翼が2対現れた

なのは「・・・・・・・・」

その翼を見ていた私は自然と翼の1つに顔をうずめていた

優斗「なのはさん？」

なのは「ん？」

優斗「えつと・・・・・・・・何をしてるんですか？」

なのは「うーん・・・・・・・・補充？」

優斗「何のですか!？」

なのは「にゃはは〜」

その後私達は、優斗君の調整が終わってすぐに2人で食堂に向かった

なのは「あ、ヴィヴィオ〜！フェイトちゃん！」

フェイト「なのは」

ヴィヴィオ「！」

食堂に向かう途中、ヴィヴィオと歩いていた2人に声をかけるなのは  
なのはの声に気付いたヴィヴィオはなのはの元に走ってきて抱きつ  
いた

なのは「おはよう、ヴィヴィオ」

ヴィヴィオ「おはよう!」

優斗「おはよう、ヴィヴィオ」

ヴィヴィオ「優斗お兄ちゃん、おはよう!」

フェイト「ねえなのは、優斗と2人で何してたのかな……?」

低い声でフェイトがなのはに話しかける

なのは「内緒だよ」

フェイト「むっ……………」

優斗「はぁ……………ヴィヴィオ、朝ごはん食べに行こうか」

ヴィヴィオ「朝ごはん？」

優斗「ああ」

なのはに抱きついていたヴィヴィオは離れると優斗の手を握って食堂に歩いて行った

なのは・フェイト「ま、待って……………」

2人を追うように、なのはとフェイトは小走りで食堂に向かって行った

なのは「あれ、ティアナは？」

朝食が終わり、スターズのオフィスに来た

しかし、ティアナの姿が見えずスバルに聞く

スバル「八神部隊長と同行だそうです。確か本局に行くと言っていました」

なのは「そっか」

スバル「なのはさんも今日はオフィスですか？」

なのは「うん。ライトニングは現場調査に行っちゃったし、前線メンバーは私、スバル、優斗君の3人だけだね」

スバル「あはは……何も起きない事を願ってます（汗）」

スバルは苦笑いをしながら冷や汗を流していた

なのは side out



フェイト side

キャロ「テロ行為……ですか？」

フェイト「うん。でも、その可能性があるって事なんだけどね」

ヘリで現場に移動している途中、キャロがフェイトの話の疑問を聞いていた

エリオ「そっか……いくら管理局施設の魔法防御が完璧でも、ガジェットが使われたら……」

フェイト「そう、すぐに制圧されちゃう。管理局は質量兵器は禁止しているからね」

キャロ「質量……兵器？」

フェイト「うん、魔力を使わない……物理兵器って言えば分かるかな？」

エリオ「は、はい」

フェイト「ガジェットが出てきたら、六課が対処するだろうし……  
・・頑張ろうね」

エリオ・キャロ「はい!!」

フェイト「うん、良い返事だ……」

そう言ったフェイトの顔はすぐに落ち込んだ感じになる

フェイト（あの予言の続き・・・・・・・・「白と黒混じりし一筋の希望」の部分、私は・・・・・・・・誰の事なのか、分かった気がする）

予言の続きの文章、それが何を意味しているのか。それを思考する  
フェイト

フェイト（・・・・・・・・ゆづ、と・・・・・・・・）

胸の中で優斗の名前を言うフェイトの顔は、何処か不安を感じられた・・・・・・・・

フェイト    s i d e    o u t

なのは side

スバル「・・・さん！・・・はさん！！」

なのは「！？な、なにスバル？」

スバル「えっと、データのセットが終わってますよ？」

なのは「あ、ホントだ。駄目だね、ぼーっとしちゃって」

スバル「いえ」

なのは「もうお昼の時間だし、寮で待ってるヴィヴィオと一緒に  
飯食べよっかな。スバルも一緒にどう？」

スバル「はい！」

片付けをして、オフィスから出て寮に向かう2人

スバル「でも……ヴィヴィオは、これから先どうなるんでしょ  
うか……？」

なのは「きちんと受け入れてくれる家庭があれば、それが一番なん  
だけどね」

スバル「難しいですよね……生まれが、普通と違うから……  
」

なのは「うん……ただ、それだけなのにね。後は……  
私達と何も変わらないのに……」

スバル「そうだ!! なのはさん……」

なのは「うん……いいよ、でも喜ぶかな?」

スバル「大丈夫ですって!!」

寮の入り口辺りで、2人はある事を話していた

ヴィヴィオ「・・・・・・・・・・？」

スバルが考えた案を一通り説明し終えたが、ヴィヴィオは首を横に傾けていた

なのは「やっぱり、良く分からないかな？」

スバル「うーん・・・・・・・・・・そうだ！簡単に言うとな、暫くはなのはさんがヴィヴィオの母親、ママだって事だよ」

ヴィヴィオ「・・・・・・・・・・ママ？」

なのは「・・・・・・・・・・いいよ、ママでも」

そう言って、優しい笑顔でヴィヴィオに微笑むのは

ヴィヴィオ「ママ．．．．？」

なのは「はい、ヴィヴィオ」

ヴィヴィオ「う．．．．うええ．．．．」

その返事を聞いたヴィヴィオはなのはに抱きついて泣き始めた

なのは「よしよし．．．．」

ヴィヴィオ「ぐすつ．．．．．ねえ、ママ？」

なのは「なに？」

ヴィヴィオ「．．．．．パパは、いないの？」



なのは・スバル「・・・・・・・・・・あ」

考えていなかった事に動揺し始める2人

なのは「ど、どうしようスバル!?!」

スバル「そわ、分かりませんよ!?!ああ、最初に気づいておくべきだったーーーー!!」

念話で慌てまくる2人

ヴィヴィオ「・・・・・・・・ママ」

なのは「なに、ヴィヴィオ?」

表情から焦りの色を消してヴィヴィオに返事をするのは

ヴィヴィオ「ママにとって……パパってどんな感じ？」

なのは「そうだね……優しくて、暖かい……かな？」

ヴィヴィオ「優しくて……暖かい……」

なのはの言葉に、首を傾げて考えるヴィヴィオ

その場は一度収まって、なのはとスバルはまたオフィスに戻っていた

なのは side out

優斗 side

デスクワークを終えた優斗は寮の廊下を歩いていた

時間は既に夜の10時を回っていた

優斗「はあ……毎度のことながら、姉さんは量が多いよ……」

バルカディアス<仕方ないだろ、なにせ父親の補佐なんだからな。  
オーリスの姉さんも、お前を頼ってるんだよ>

優斗「ホントか・・・？俺には、姉さんが意地悪で俺に大量の書類を書かせてるとしか思えないんだが・・・」

普段は六課に係する資料などのデスクワークをこなす優斗だが、今日は別の仕事をしていた

それはオーリス・ゲイズ、レジアス中将の補佐にして実の娘から送られた大量の書類仕事であった

優斗「まあ・・・姉さんには今度言うつとするか」

バルカディアスくああ>

そして、自室の部屋の前に着く優斗

なのは「優斗君、ちょっと私の部屋まで来てくれるかな？」

優斗「え？今からですか？」

なのはから念話が来た

こんな時間に、何の用なのか……

なのは「うん、じゃあ待ってるよ」

優斗「……………何か、嫌な予感がする……………」

優斗はさっき歩いてきた道をまた歩いてなのはの部屋に向かった

優斗「え」と……………」

ヴィヴィオ「……………」

なのはの部屋に着き、中に入った途端ヴィヴィオが抱きついてきた  
それはいい、それは別に良いんだ……………」

優斗「えっと、お二人の言葉が良く理解出来ないのですが……………」

パジャマ姿でベッドに腰掛けているのはとフェイトに言う優斗

なのは「そのままだよ、優斗君」

フェイト「う、うん／＼／」

なのはは笑顔で言い、フェイトに至っては頬を赤く染めている

なのは「ヴィヴィオがね、私とフェイトちゃん。それに優斗君と一緒に寝たいって言ってるんだよ」

優斗「だからそれが理解出来ないんですよ！？なのはさんやフェイトさんは分かりますけど、俺がヴィヴィオと一緒に言うのが理解出来ませんから！！」

フェイト「……そうは、言ってもらえないよ、優斗／／」

優斗「はい………？」

そう言われて、優斗は自分の手を引っ張ってベッドに歩き始めたヴィヴィオを見る

ヴィヴィオ「？」

優斗「えっと、ヴィヴィオ？なんで俺と一緒に寝たいんだ？」

しゃがんで、ヴィヴィオの視点に合わせる優斗

そして、ヴィヴィオから衝撃の1言が発せられた

ヴィヴィオ「優斗パパとなのはママ、フェイトママと一緒に寝たいの！..」

優斗「.....え？」

ヴィヴィオの言葉にはてなマークを浮かべる優斗であった

優斗 side out



### 第13話 ギンガ、動く……（前書き）

どうも、天照大神です！

大学生活が始まって、なかなか書ける時間が少なくなってきました

でも、そこは頑張って書いていこうと思っています！

そして、今話のタイトル……

詳細は、本編を読めば分かりますw

では……どうぞ！

### 第13話 ギンガ、動く……

優斗 side

えーと、つまりヴィヴィオが言っているのは

俺が父親　なのはさんとフェイトさんが母親　つまり、パパとママ  
と一緒に寝たい……

なるほど………っておい!?

優斗「なんで俺がパパなんだよ!？」

ヴィヴィオ「パパはパパだよ」

優斗「昼までお兄ちゃんって呼んでたよな!？何処でそうなった!？」

バルカディアス<優斗、諦める。こうなったら仕方ないだろ>

優斗「バルまで俺を見捨てた!？」

ヴィヴィオ「~~~~~」

その間にもヴィヴィオに手を引かれ、ベッドの前に着いてしまう

なのは「やはは、優斗君。寝ようか」

優斗「……………はい」

もう逃げられない、その事実を受け入れ俺はベッドに横になった

ヴィヴィオ「ヴィヴィオはパパとなのはママの間」

俺の右側にいたなのはさんとの間にヴィヴィオが入り込んでくる

なのは「じゃあ、電気消すよ」

ヴィヴィオ「はい」

そして、部屋の電気が消え皆眠りに落ちていった

1時間後・・・・・・・・

優斗（寝れる訳ないだろ！？この2人は何考えてるんだ！？）

目は閉じているが一向に眠気が来ていない優斗

優斗（17で年下とはいえ、俺は男だぞ！？2人とも分かってないのか！？男と一緒のベッドで寝る事に何も抵抗がないのか！？）

優斗も魔導士という事を外せば普通の男子、だからこそこの状況は落ち着いていられなかった

ヴィヴィオ「ん・・・・・・・・パパ・・・・・・・・」

優斗となのはの間で寝ているヴィヴィオが優斗の腰に抱きつく

優斗（けど……ヴィヴィオを、悲しませる位なら……  
いいか）

優斗は自身に抱きついていてヴィヴィオの身体を優しく両手で抱き  
しめた

ヴィヴィオ「ん……すう……」

しかし

むにゅ……

なのは「くう……すう……」

優斗（な、なのはさん!?!）

反対側のなのはがヴィヴィオが離れたのを感じたのか、手を伸ばし  
優斗の顔を自身の胸に抱き寄せた

なのは「ん・・・・・・・・」

優斗（やばい・・・・・・・・この状況はまずい！？）

なんとか息は出来るものの、完全になのはの胸に顔が挟まっている

今の優斗はただ顔を赤くする事しか出来ずにいた

そして、それだけでは終わらなかった

むにゅ・・・・・・・・

優斗（な、今度は背中に・・・・・・・・まさか！？）

背中にも柔らかい感触を感じ、動揺する優斗

フェイト「ん……………ゆう、と……………すう……………」

優斗（やっぱりかああああ！というより何でフェイトさんが！？  
なのはさんの隣で寝てたはずだろ！？）

電気を消す前、ベッドの横になっている順番は優斗、ヴィヴィオ、  
なのは、フェイトであった

しかし、現にフェイトは優斗の身体を後ろから抱きしめている

むにゅ

むにゅ

背中と顔、2つの柔らかい感触は優斗に寝るといふ選択肢を奪って  
いた

優斗（誰か……………助けてくれ……………）



優斗の願いは誰にも届いてはいなかった・・・

優斗    s i d e    o u t

スカリエッティ    s i d e

スカリエッティのアジト、その自室でスカリエッティは1つの映像を見ていた

スカリエッツィ「ふむ……………これは」

スカリエッツィが声を漏らすと同時に、部屋のドアが開き女性が入ってくる

？「ドクター、どうかしましたか？」

女性はスカリエッツィの声が聞こえていたのか、スカリエッツィに尋ねる

スカリエッツィ「ああ、ウーノ。この少年が少し気になってね」

画面には1人の人物が戦ってる映像が流れていた

ウーノ「この人物は……………先日、ディエチの砲撃を防いだ……………」

スカリエッティ「ああ……だが、私が気になっているのはそれではない」

ウーノ「では……何を？」

人物が戦闘を行っていた画面が止まり、さらに2つの画面が現れる

スカリエッティ「この少年が使っている『アルカディアス』と『バロム』。この2つを私は知っているのだ……僅かだがね」

ウーノ「はあ……」

スカリエッティ「ル……ドに保管されているはずのこの力、非常に興味深い」

ウーノ「では、この少年も捕獲対象に？」

スカリエッティ「いや……彼には、私の作品の相手をしてもらう……」

そして、開いていた画面が全て閉じ、さらに1つの画面が現れる

スカリエッティ「私を楽しませてくれよ……蒼波、優斗君……」

・ 画面には「機体コード extra 魔聖」と書かれていた……

スカリエッティ side out

優斗 side

優斗「ん……………」

ふと朝日の光に気がついた優斗は、少しずつ意識を回復させていた

優斗（ああ……………結局、寝ちゃったのか……………）

どうやら、知らない間にぐっすりと寝ていたようだ

むにゅ

なのは「あ……………うん」

優斗「……………」

顔を動かすと、すぐ側からなのはの甘い声が聞こえた優斗は目を開ける

なのは「ん……………あん」

むにゅ、むにゅ

優斗が少し動いたびになのはから甘い声が漏れる

それもその筈、今の優斗は完全に顔をなのはの胸に埋めているからだ

優斗「・・・・・・・・・・！？／／／／／」

一瞬で恥ずかしさが蘇えり、すぐに胸から顔を離そうとする  
しかし

なのは「駄目え・・・・・・・・んにゃ」

ぎゅっ、むにゅ

優斗「なっ・・・・・・・・！？／／／／／」

なのはは優斗の背中に回していた両手を、さらに強くして外れないようにしていた

そのため、さらに優斗の顔がなのはの胸に埋まる

フェイト「うにゅ・・・・・・・・」

むぎゅー……

さらに、背中に抱きついていたフェイトも優斗を抱きしめる力を強くしだした

優斗（誰か……）

優斗はそのまま、2人が起きるまで柔らかい感触を顔を背中に感じ続けていた



そして、午前の訓練の時間

なのは「さて、訓練を始める前に1つ連絡事項だよ」

フェイト「陸士108部隊のギンガ・ナカジマ陸曹が今日から暫く六課に」

ギンガ「108部隊、ギンガ・ナカジマです。よろしく願いします」

なのは「それからもう1人」

マリエル「本局技術部のマリエル・アデンザです。よろしくね」

そして紹介が終わり、なのはが訓練内容を言う

なのは「まずはスバルとギンガの模擬戦、いいかな2人とも」

スバル・ギンガ「はいっ！」

なのは「うん、良い返事だ」

スバル「はあああああああ！！！！」

ギンガ「はあああああ！！！！」

ウイングロード上で戦う2人

交差を繰り返し、何度もぶつかり合っている

優斗「・・・・・・・・・・」

フェイト「どう、優斗？」

それを見ていた優斗にフェイトが話しかける

優斗「凄いですね・・・・・・・・俺では、あんな事は無理ですよ」

フェイト「へえ・・・・・・・・でもそれは、リミッター解除してない場合でしょ？」

優斗「いや…………リミッター解除してもあんな殴り合いは出来ませんって…………」

フェイト「あはは、そうだね……………優斗」

優斗「はい？」

フェイト「あの時…………あなたが助けてくれたから、ギンガはああやって戦えてるんだよ」

優斗「……………」

フェイト「優斗のあの力は化け物なんかじゃない……………少ないくとも、私とギンガにとっては……………ね」

優斗「……………そう、ですか」

そして、話している間に模擬戦はギンガの勝利で終わっていた

なのは「うん、じゃあ次はギンガを加えたFW陣対隊長陣でやろうか」

ギンガ「・・・・・・・・はい？」

いきなりの隊長戦に戸惑うギンガ

スバル「あのね、ギン姉。これたまにやるんだ」

エリオ「隊長達、結構本気できますから」

ティアナ「幻術や地形を利用して逃げないと・・・・・・・・後は、優斗さんの力も借りれば何とかかなりですよ」

ギンガ「う、うん。そうだね……………」

ギンガはそう言われて優斗の顔を見る

優斗「なにか……？」

ギンガ「う、ううん！なんでも無いよ！！」

優斗がギンガの視線に気づき、問うがギンガは慌てて視線を戻した

なのは「じゃあ、模擬戦……………スタート！」

なのはの合図で、過酷な隊長戦が始まった

優斗「あー・・・・・・・・・・疲れた」

バルカディアス<災難だったな>

時間が進み、既に夕刻

夕日で綺麗に空が染まっている時間帯に、優斗は隊舎の屋上にいた

優斗「シグナム副隊長・・・・・・・・そこまで俺と斬り合いたいのか・  
・？」

バルカディアス<いや、単にリミッターを解除したお前の本気が知りたいんだろ>

優斗「勘弁してくれ……………」

模擬戦が始まってすぐ、シグナムが突撃してきて優斗はひたすら追いかけまわされていたのだ

ガチャ……………

優斗「ん……………」

屋上の扉が開く音が聞こえ、後ろを向く優斗

優斗「ギンガ……………陸曹？」



ギンガ「はい……………」

そこには、六課の制服を来ているギンガが立っていた

優斗「何か……………ようでも？」

ギンガ「……………フェイトさんから、聞きました」

優斗（ああ……………そういう、事か）

ギンガ「あなたが……………白黒のアサルトだと……………4年前、私とフェイトさんを助けてくれた人だと……………」

優斗「……………ああ、確かにあれは俺だ」

ギンガ「・・・・・・・・・・」

肯定した俺の言葉を聞いたギンガの瞳は、フェイトと同じ様に揺れていた

ギンガ「あの時・・・・・・・・私を助けてくれて、ありがとう」

優斗「ああ・・・・・・・・・・で、それだけか？」

ギンガ「えつと・・・・・・・・まだ、あるの」

ギンガはそう言って、身体をモジモジし始める

ギンガ「その・・・・・・・・私の事は、呼び捨てで呼んで欲しいんです・・・・・・・・／／／」

優斗「まあ……それなら」

案外、普通なお願いだっただため了承する優斗

優斗「で、ギンガ……話は、終わりか？」

ギンガ「えっと……その……まだ、最後に言いたい事が／＼／」

どこかもどかしそうに言うギンガ

優斗は気づいてはいなかったが彼女の頬は赤く染まっていた

ギンガ「その……あの……ゆ、優斗さん!!」

優斗「あ、ああ」

いきなり、大声で名前を呼ばれ驚く優斗

ギンガ「わ、私！！ゆ、優斗さんの事が・・・・・・・・好きです！  
」

優斗「・・・・・・・・はい！？」

ギンガの告白にただ、驚く優斗であった

優斗 side out

## 第14話 嵐の前の親睦会

優斗 side

ギンガ「わ、私!! 優斗さんの事が……好きです!!」

優斗「……………はい!？」

ギンガが……………俺、を？

ギンガ「あの日……………私を助けてくれた日から……………ずっと、好きだったんです!」

優斗「……………そうか」

だけど……………俺は

ギンガ「その……気持ち传达了かったです」

優斗「ああ……」

ギンガ「それに……ライバル多いです」

優斗「へ？」

ギンガ「な、何でもないです!!じゃあ私、これで失礼します!!」

優斗「あ、ああ……」

ギンガはそう言って、屋上から去っていった

優斗「……………」

優斗は、何かを考えるように空を見上げていた

優斗 side out

はやて side

はやて「と、いう訳で今日は楽しくするでー!!」

なのは・フェイト「いきなり言われても分からないよ!？」

部隊長室で急にはやてが言いだした

はやて「だから、優斗君の時に忘れてた親睦会と今回のギンガの分を纏めてやるって事や!！」

なのは「いいのかな、はやてちゃん。もうすぐ公開意見陳述会なのに……」

フェイト「スカリエッティも狙ってくるはずだよ……」

はやて「わかつとる。まあ、最終決戦前に騒いでも問題あらへんよ」

なのは「でも……」



フェイト「うん・・・・・・・・」

まだ、納得がいかない2人

はやて「それに・・・・・・・・このままだと、2人ともギンガに負けるで？」

なのは「どういう意味かな、はやてちゃん？」

はやて「ふっふっふ・・・・・・・・これを見てや」

はやては2人の前に画面を開く

ギンガ《私・・・・・・・・優斗さんの事が好きです!!》

優斗《・・・・・・・・はい!?!》

なのは・フェイト「……………」

はやて「これを見ても納得いかん？」

なのは「うん、たまにはそういうのも良いよね」

フェイト「うん、私も賛成だよ」

あっさりと親睦会を認めた2人だった

はやて side out

優斗 side

急ぎよ決まった親睦会により、俺は・・・いや、六課の局員は食堂に集まっていた

みんな、それぞれ楽しく過ごしている

スバル「優斗さん！！早く食べないと私が全部貰っちゃいますよ！！」

ティアナ「こらバカスバル！！少しは遠慮しなさいよ！！」

スバル「だつて～～」

優斗「食ってばかりだと、後が大変だぞ？」

スバル「平気です！！その分身体動かしてますから！！」

どうやら、何を行っても無駄みたいだ

現在、俺はスバルとティアナの2人と一緒にテーブル席で食事をしている

そ、いうより俺は動けないんだ……

ヴィヴィオ「~~~~」

膝の上に座っているヴィヴィオがいるせいでな……

ヴィヴィオは俺が選んで皿に乗つけた物を食べている

スバル「おいし〜〜〜!!」

ティアナ「ああもう!!すみません優斗さん!!このバカは後でちゃんと説教してますから!!」

優斗「はは……まあ、俺は気にしないよ」

ヴィヴィオ「パパ……眠い」

お腹一杯になったヴィヴィオが目を擦りながら話しかけてきた

優斗「ああ……もう、寝るか?」

ヴィヴィオ「うん……」

席を立ってヴィヴィオの手をとる優斗

シャル「あ、優斗君。はやてちゃん達が呼んでたわよ」

そこにシャルが通りかかり、優斗に告げる

優斗「そうですか・・・じゃあ、ヴィヴィオを部屋に寝かせてから行くと伝えておいて下さい」

シャル「分かったわ」

シャルに伝言を頼み、優斗は部屋に向かった

優斗「えっと……………」

戻ってきた優斗は人ごみの中にいるはやてを探していた

優斗「何処だ……………」

はやて「おゝ、こっちやで優斗君！」

はやてが座っている席から声を出し、その方向に向かう優斗

優斗「すみません、遅くなりました」

なのは「いいんだよ、ヴィヴィオが一緒だったんだし」

優斗「それで……なにか？」

はやて「うん、今度の公開意見陳述会でのことなんやけど……」

フェイト「優斗に私達の誰かと組んで警備してもらいたいんだ」

優斗「はあ……」

はやて「勿論わたしやよな？」

なのは「違うよはやてちゃん、優斗君は私と組むんだよ」

優斗「いや……俺は」



フェイト「違うよ、優斗は私と組むの」

3人があ言い合い、火花が散る

優斗「その……俺は中將の護衛をしないといけないんですが」

なのは・フェイト・はやて「そんな!？」

優斗「決定事項です……」

俺はそう言っで、オーリス姉さんからこの前渡された紙を見せる

はやて「……こんな時にうちの邪魔しおって……」

そう言ったはやてからは黒いオーラが吹き出していた

優斗「はあ………って、なのはさんとフェイトさん？」

なのは・フェイト「ほえ？」

優斗「その………顔が赤いですよ？」

なのはとフェイトの顔はほんのりと赤く染まっていた

はやて「2人とも………もしかして、酒飲んだん？」

なのは「え〜？わらし、お酒はなんでないの？」

フェイト「そうだよ、私だって………」

優斗・はやて「……………誰だ（や）この2人の飲みものに酒いれたのは!？」

明らかに酔いの象徴が出ている2人

その2人の飲み物からはお酒のアルコールの匂いが漂っていた

はやて「ってうちのにもお酒はいつとる!？」

訂正、はやてのにも入っていたようだ

優斗「ってなのはさん、フェイトさん!？」

なのは・フェイト「ふにゆう……………」

2人はテーブルに倒れていた

はやて「あちゃゝ・・・・・・・・完全に酔いつぶれてるで」

優斗「はあ・・・・・・・・俺が2人を部屋に連れて行くんではやてさんは犯人を探しといて下さい」

はやて「了解や」

そう言つて俺は、なのはさんを背中に、フェイトさんをお姫様だっこで部屋に連れて行った

なのは「うん……………」

フェイト「すう……………」

優斗（……………どうしてこうなった!?!）

現在、深夜

俺は今、ベッドの上で2人に挟まれている

六課の制服ではなく、下着姿の2人にだ

部屋のベッドに2人を寝かせると、その場で手を引っ張られ俺は2人に抱きつかれた

どうにも逃げ出せず、仕方なく眠ろうとしていたんだが……………

優斗（くそ．．．両腕が塞がってるだけじゃなく、ヴィヴィオが乗っかって寝ているし．．．）

もはや、完全に動けない優斗は、そのまま長い夜を起きて過ごしていた．．．

優斗   s i d e   o u t

## 第15話 敗北と決意（前書き）

お久しぶりです、天照大神です

更新をさぼっていてすみませんでした・・・

石を投げてもらっても構いません・・・

そして、短いです

では、どうぞ・・・

## 第15話 敗北と決意

優斗 side

公開意見陳述会当日、俺は予定通り中将の護衛についていた  
始まってから数時間が経過し、問題も起きずに順調に進んでいた

優斗「バル、何か以上は？」

バルカディアス「いや、サーチにも以上はない」

本来、中で護衛を行う局員はデバイスの持ちこみ不可はなっている  
のだが、俺は中将に許可をもらって唯一所持させてもらっていた

優斗「このまま、終わればいいんだがな……」

俺がそう思った時、会議室の電気が急に落ちた



レジアス「何事だ!？」

「シ、システムがハッキングを受けて乗っ取られました!！」

「駄目だ!！此方からの操作を受け付けない!！」

突然の出来ごとに慌てる局員達

レジアス「ええい!！早く外と連絡を・・・」

「ちゅ、中将!！外にガジェットが!！」

レジアス「くっ・・・・・・・・」

地上本部は魔力障壁によって頑丈な守りが強いられている、しかし

ガジェットにはそれも無意味に等しい

優斗「中将、今は避難を……」

レジアス「わしの事はいい！！それよりもお前は外を片付けろ！！」

優斗「しかし……！！」

レジアス「いいから行け！！」

優斗「……分りました」

俺は会議室の扉を壊して、外に向かった

優斗「くっ・・・・・・・・」

移動中、優斗は出会ったガジェットを破壊しながら進んでいた  
しかし、数が多かった為消耗が激しかった

ドガーーーーーン！！

突然、前の通路の壁が崩れ、誰かが吹き飛ばされてくる

優斗「ス、スバル！？」

それがスバルだった事に気付いた優斗はスバルに駆け寄る

スバル「ギ……ギン、姉……」

優斗「スバル！？一体何が……」

スバルが飛ばされてきた方向を向いた優斗だったが、そこには誰もいなかった

スバル「ギン姉が……ギン姉が、連れて行かれた……」

優斗「なっ……」

スバルが言った言葉に固まる優斗

ティアナ「はあっ……はあっ……スバル！！優斗さん！！」

別の通路からティアナが息を切らしながら近づいてくる

スバル「ティア……ギン姉が……ギン姉があ……」

ティアナ「今はあんたの方が優先よ！！その怪我じゃ……」

優斗はティアナの言葉で改めてスバルを見ると、所々からの出血が酷いのが目に入った

そして

優斗「ス……バル？その……身体は」

肩が切れている所からは、壊れている機械の部分と火花が散っていた

ティアナ「優斗さん……今は」

優斗「あ、ああ……」

その後、なのは達とも合流した優斗達だったが地上本部だけではなく、六課も攻撃され事実上の敗北になった

優斗「……………」

地上本部、機動六課隊舎壊滅の次の日

優斗は崩れたさった機動六課の隊舎に来ていた

優斗「・・・・・・・・俺は」

なのはから言い渡された事実

「ヴィヴィオが連れ去られた」

地上本部襲撃時、襲撃していた戦闘機人ではなく、別の戦闘機人が六課を襲撃しヴィヴィオを連れ去った

優斗は、悲しい表情のなのはからそう聞いた

優斗「・・・・・・・・」

優斗は崩れ落ち、瓦礫と化した隊舎を見続けた・・・・・・・・

その夜、優斗はなのはとフェイトの元を訪れた

なのは「あ．．．優斗、君」

なのはは焦げてしまったウサギのぬいぐるみを持っていた

優斗「それは．．．」

なのは「うん．．．私が、ヴィヴィオの為に買ったぬいぐるみ．．．」

そう言ったなのはの表情は今にも泣きだしそうだった



なのは「私……守れなかった」

優斗「……………」

なのは「帰ってくるって……守ってあげるって……あの子と、約束したのに……」

涙がこぼれ、ぬいぐるみに落ちて行く

フェイト「なのは……………」

優斗「……………駄目ですよ」

優斗はそう言うと、なのはの横に座る

優斗「なのはさんが、諦めたら・・・・・・・・それこそヴィヴィオを助けられなくなる」

なのは「でも・・・・・・・・私は」

優斗「助けるんですよ・・・・・・・・俺達の手で」

なのは「っ!!」

フェイト「そうだなのは・・・・・・・・助けよう、私達の力で!!!!」

なのは「うん・・・・・・・・うんっ!!!!」

なのはは目に涙をためながらも、笑顔で2人の言葉に頷いた

優斗

s  
i  
d  
e  
  
o  
u  
t

## 第16話 自分の意思

優斗 side

俺達は今、切り札を出してきたスカリエッティを止める為に準備をしていた

なのはさんとヴィータ副隊長は、スカリエッティが出した切り札「聖王のゆりかご」の破壊と、中に捕らわれているヴィヴィオの救出  
スバル達FW陣はスカリエッティが作った戦闘機人への対応

はやて部隊長はゆりかご周辺で局員たちの指揮官を

そして、俺とフェイトさんはスカリエッティのアジトへ……

レジラス《わしの事など心配するな》

優斗「ですが……」

そして、今現在俺は中將と回線で話をしている

内容は、俺が本当に中將の護衛をせずにスカリエッティのアジトに  
いってもいいのかという事についてだ

レジアス《もともと、奴を捕まえるのがお前の目的だったんだろう  
が。なら、わしの事など気にせず目的を済まして来い》

優斗「・・・・・・・・分かりました」

そして、俺は回線を切った

優斗「頼まれたんだから、守らないとな・・・・・・・・・・」

そう言って、俺は準備を急いだ

はやて「いくでみんな……」

なのは・フェイト「うん」

ヴィータ「おう」

カリム《皆さん……どうか、お気をつけて……》

聖王協会のカリム・グラシアさんが通信で隊長陣に願う

はやて「安心してやカリム。必ず、終わらせるから」

カリム《分かったわ……隊長及び副隊長、能力限定解除》

その言葉で、なのは達の魔力反応が大きくなる

カリム《リミット……リリース……皆さん……どうか、無事に帰ってきて下さい》

そう言ってカリムは通信を切った

なのは「レイジングハート、エクシード!」

レイジングハート<Exceed Mode.>

フェイト「なのは……無茶、しないでね」

飛んでいるなのは横に、フェイトが来て不安そうになのはに言う

なのは「大丈夫だよ、いざとなったら……」

フェイト「うん、でも……」

はやて「大丈夫やでフェイトちゃん。なのはちゃんだってその位わかつとるよ」

フェイト「……うん」

暫く飛んでいると、俺とフェイトさんがなのはさん達と別れる地点に着いた

なのは「じゃあ、私達は……」



フェイト「うん」

言葉を交わさず、視線だけ交わせるとなのは達はゆりかごに向かつて行った

優斗「行きましようか、フェイトさん……」

フェイト「うん」

俺とフェイトさんはスピードを上げてスカリエッティのアジトに向かった

優斗 side out

フエイト side

アジトの入り口でシスターシャツハと合流した私達は、アジト内を  
進んでいた

所々でガジェットを破壊し、奥へと進んでいく

シャツハ「しかし……スカリエッティは、悪趣味ですね」

今進んでいる通路の両側には様々なポッドが置かれていた

中には何も入っていないが、正直見てもらえない

フェイト「ねえ、優斗」

私は後ろにいる優斗に話しかけた

フェイト「優斗は……どうして、此処に？レジアス中将の護衛は……」

内容は私が考えていた疑問、陳述会で中将の護衛をしていたのだから、今回もそうじゃないのか

なら、何で私と同じスカリエッツィのアジトに来たのか

それを聞きたかった

優斗「俺の目的も……スカリエッツィを捕まえる事なんですよ……ある人に、頼まれましてね」

フェイト「ある人って……？」

私が追求しようとした時、突然シスターシャッハの姿が地中に消えてしまった

フェイト「シスターシャッハ!？」

驚いていると同時に、通路の奥から足音が聞こえてくる

？「ふっふっふ………ようこそ、私のアジトに」

奥からはあの男、スカリエッティが2人の戦闘機人を横に連れて歩いてきていた

フェイト「スカリ………エッティ!!」

姿を確認すると同時に、私の心から怒りが湧きあがってくる

スカリエツティ「ふふふ．．．．．どうした、フェイト・テストロツサ？そんな顔をして」

フェイト「貴様には関係ない！！！」

自然とバルディツシュを握る力も強くなり、怒りも強くなっていく

スカリエツティ「やはり実に似ているよ．．．．．君と、君の母親、プレシア・テストロツサは！」

スカリエツティは嬉々とした表情で話し始める

スカリエツティ「君を生みだしたプロジェクト、あれは私も関わっていてね．．．．．プレシア・テストロツサともよく話していたよ！！」

フェイト「黙れ!!」

フェイトはバルディッシュをザンバーモードにし、スカリエッティに斬りかかろうとするが、地面から赤い紐が幾つも現れ、身動きを封じた

優斗「フェイトさん!!」

優斗は剣状態のバルカディアスでそれを斬ろうとする

スカリエッティ「やあ、蒼波優斗君……会いたかったよ」

優斗「何……?」

スカリエッティの言葉に、動作を止めてしまう

スカリエツティ「君のデバイスと、君の力……私にはこれと  
ない研究対象と感じてね……」

優斗「……………」

スカリエツティ「失われし力……実に興味深い!!」

優斗「!? 貴様……………」

フェイト「失われし……………」

スカリエツティ「フェイト・テストロッサ……私もね、クロ  
ーンなのだよ!! 時空管理局最高評議会によって……アルハ  
ザードの技術によって作られた、人造生命体なのだよ!!!!」

フェイト「なっ……………!?!」

スカリエッティの言葉に驚愕するフェイト

スカリエッティ「クローン……君も良く分かるだろう？何せ・  
……」

フェイト「やめる………」

スカリエッティが何を言いかかった私は必死に声を出す

スカリエッティ「君はプレシア・テストロッサの……」

駄目……優斗の前で、言わないで……!!

フェイト「やめる………やめる……!!」



スカリエッティ「事故死した娘、アリシア・テストロッサのクローンなのだから！！！！！」

高揚としたスカリエッティの言葉がアジト内に響きわたり、フェイトは愕然としてしまう

フェイト（知られた・・・・・・優斗に、私が・・・・クローン、だって・・・・・・）

その事実には、ただ絶望してしまうフェイト

スカリエッティ「蒼波優斗君？分かるかい？私も、フェイト・テストロッサも、普通の人間ではないのだよ！！！！！」

スカリエッティは黙っている優斗にそう言う

優斗「・・・・・・それが」

フェイト「えっ……」

優斗「それが……どうした？」

フェイト side out

優斗 side

優斗「それが……どうした？」

スカリエッティ「何……？」

優斗「クローン……それがどうした？生まれが……人間とは違う？そんなのは関係ない！！」

力強く……何処か、怒りも感じるような声で優斗が言い始める

優斗「例え生まれ方が違って……大事なのはそこじゃない！！！！大事なのは……心だ！！意思だ！！」

スカリエッティ「ほう……」

優斗「自分の意思で行動して……生活して……精一杯生きる……それが同じなら！！クローンだろうと関係ない！！！！」

フェイト「ゆう・・・・・・・・と・・・・・・・・」

スカリエツティ「ふつ・・・・・・・・なら、彼女が引き取ったあの2人はなんだ？片方はプロジェクトFによって生み出され・・・・・・・・片方は部族から追い出され・・・・・・・・彼女は、そんな2人を傷ついた自分の心を満足させるために・・・・・・・・自分の言う事を守るように教育しているではないか！！まるで人形だよ！！過去の君・・・・・・・・・プレシア・テストロッサに踊らされていた時のようなね！！！」

？《違う！！》

？？《私達は、人形なんかじゃない！！》

突如、通路に通信画面が現れる

そこには、フリードに乗ったエリオとキャラが映っていた

エリオ《フェイトさんは、僕達にくれたんだ！！家族の暖かさを！！》

キャラ《人形なんかじゃない．．．．私達は、家族なんです！！》

エリオ《今の僕達は自分の意思でここにいる！！》

キャラ《だから．．．．迷わないで！！フェイトさん．．．．！！》

2人の言葉に反応するように、フェイトが動き始める

フェイト「ごめんね．．．．ありがとうね．．．．エリオ、キャラ．．．．．」

自身の身体の身動きを封じている赤い紐をザンバーで斬り裂くフェイト

フェイト「バルディッシュ……オーバードライブ」

バルディッシュ<Get Set.>

フェイトの魔力が増大し、バリアジャケットが変わっていく

フェイト「真……ソニックフォーム」

ザンバーだったバルディッシュの刃はさらに鋭くなり、バリアジャケットはほとんど装甲をつけていない姿になった

フェイト「クローンでも……エリオとキャロの保護者であっても……すぐに壊れそうにんるほど心が弱くても…….それも全部、私なんだ…….」

バルディッシュ<Riot Zumber.>

フェイト（そうだ……もう、迷わなくていいんだ。私には、なのは達が……優斗がいる！）

優斗「フェイトさん……」

フェイト「行くよ優斗……」

優斗「はい……バル!!」

バルカディアス<Alkadias transform>

優斗は背中に2対の白翼を出現させ、アルカディアスフォームになった

スカリエッティ「トーレ、セッテ……」

トーレ「はい、ドクター」

セツテ「分かっています」

トーレはフェイト、セツテは優斗に突撃してくる

優斗「!!!」

セツテ「くっ!!」

優斗は最小限の回避でセツテの攻撃を避け、セツテを斬っていく

セツテ「!?!?!?!?!」



そして、ほんの少しだけ大振りになったセツテの懷に入り込む優斗

セツテ「しまっ……………」

優斗「光輝……………一閃!!!」

白く輝いた剣がセツテを一閃し、セツテは床に倒れた

フェイト「スカリエッティ……………あなたを、逮捕します……………」

フェイトの方も、トーレが既に倒れておりスカリエッティも気絶していた

優斗 side out

## 第16話 自分の意思（後書き）

活動報告にも書きましたが

この作品はStS編とオリジナル編の2つで完結を目的としています

ですが、最近Vivid編の構想が浮かび上がってきているのがVivid編も書いてほしい方はいますでしょうか？

要はVivid編まで書いてほしいかどうかのアンケートです

感想にその点について書いてもらえれば大丈夫です

なお、活動報告にてサイバスターさん、Jamさん、eagleさんの3人には既に意見をもらっているので上記については大丈夫です

では、お待ちしております

## 第17話 デス・アルカディア

なのは side

優斗とフェイトがアジトで戦っていた頃

なのはは、ゆりかご内 聖王の間でレリックとスカリエッツィの戦闘機人No.4クアットロに洗脳されたヴィヴィオと戦っていた

なのはは、ヴィヴィオの攻撃に対して反撃をせず、洗脳をしているクアットロをサーチャー「WAS」で探し続けたいた

ワイドエリアサーチ

そして……

なのは「……見つけた!!」

聖王のゆりかご、最深部でなのはとヴィヴィオの戦いを見ていたクアットロを見つけた

それと同時に、ヴィヴィオをブラスター2によって出していたブラ

スタービットを使って、ヴィヴィオにバインドをかけ動きを封じる

ヴィヴィオ「このっ…………外せ!」

クアットロ《いつの間に!?で、でもお…………此処は最深部ですよ?場所が特定出来たからってどうする事も出来ませんよお?》

クアットロはそれが無意味だという口調でなのはに言う

なのは「待っててねヴィヴィオ…………今」

レイジングハート<B u r s t e r 3 . >

なのはは、最後のプラスターを外す…………

なのは「ママが…………助けてあげるから!!!」

レイジングハートの砲口をクアットロがいる最深部の壁の方向に向ける

レイジングハート<Divine Buster Extensi  
on.>

クアットロ《砲撃！？で、でも……此処は最深部……  
・はっ！！》

クアットロは4年前、なのはがスバルを助けた時に見せた壁抜きを  
思い出した

なのは「デイベイン……バスタアアアアアアアアア！  
！！！！！」

残っていたカートリッジだけではなく、なのはは新たにカートリッ  
ジをリロードし、計7発のカートリッジを使ったデイベインバスタ



ヴィヴィオ「駄目……来ないでえええ!!!」

なのは「っ!？」

ヴィヴィオの放った拳をレイジングハートの柄で受け止め、飛ばされるのは

なのは「ヴィヴィオ……?」

ヴィヴィオ「分かったの……私は、聖王さんのクローンで……  
……なのはママも……フェイトママも……優斗パ  
パも、みんな……ヴィヴィオのママとパパじゃないって……」

悲しく、辛そうな声で話し始めるヴィヴィオ

なのは「違う……違うよヴィヴィオ!!」

ヴィヴィオ「違う!!!!だって……私は、ゆりかごの鍵で……普通の人間じゃ……ないんだよ……」

なのは「……………」

ヴィヴィオ「だからもう……ヴィヴィオの事は放っておいて!!!!」

なのは「…………じゃあ、どうして……泣いてるの?」

ヴィヴィオ「!!!?!」

なのはの言つとおり、ヴィヴィオは涙を零していた



なのは「お願いヴィヴィオ．．．．．ヴィヴィオは、どうしたいの．．．．．？」

ヴィヴィオ「わ、私は．．．．．」

なのは「ヴィヴィオ．．．．．」

ヴィヴィオ「．．．．．たい」

なのは「！！」

ヴィヴィオ「なのはママと．．．．．フェイトママと．．．．．優斗パパと、ずっと．．．．．ずっと一緒にいたいよ．．．．．！！！」

ヴィヴィオはさっきよりも多い涙を零しながらなのはに思いを伝えていく

ヴィヴィオ「ママ．．．．助けて」

なのは「助けるよ  
いつだって．．．．どんな時だって  
！！！！！」

ヴィヴィオの言葉に、なのはは強く答えた

なのは「ヴィヴィオ．．．．ちょっと、痛い我慢できる．．．？」

ヴィヴィオ「うん．．．．」

ヴィヴィオが返事をする、なのははヴィヴィオの身体にバインドをかける

なのは「聖王の鎧の防御．．．．撃ち抜いて魔力ダメージでノックダウン．．．．いけるね、レイジングハート？」

レイジングハート<Yes!!>

レイジングハートが応えると同時に、4基のプラスタビットと、レイジングハートの砲身に桃色の魔力が集まっていく

なのは「全力……全開!!!!!!」

レイジングハート<Starlight Breaker.>

放つのは彼女の最大の砲撃

星の光の名を持つ一撃必殺の収束砲

なのは「スターライト……ブレイカアアアアアアアアアアアア！」

放たれた砲撃はヴィヴィオに直撃する

なのは「ブレイク………シュウウウト!!!!!!」

砲撃の衝撃によってヴィヴィオの体内にあったレリックがヴィヴィオの身体から分離し、砕け散った

ドゴオオオオオオン!!!!!!

なのは side

優斗 side

スカリエッティを逮捕し、アジトを後にした俺達はゆりかごから脱出したのはさん達とヘリ内で合流した

ヴィヴィオ「優斗……パパ」

なのはにだっこされていたヴィヴィオが、優斗の方を向く

優斗「ヴィヴィオ……」

優斗がヴィヴィオの頭を撫でると、ヴィヴィオは気持ちよさそうに眠り始めた

フェイト「後は……ゆりかごを次元航空艦部隊が破壊すれば、

終わりだね……」

なのは「うん……でも、4番の子が見つからなかったんだ」

最深部でなのはデイベインバスターを喰らったはずのクアットロは、なのは達がそこに行ったときには姿を消していた

優斗「一体何処に……」

！

優斗「!？」

突然、俺の身体が何かに反応し思わず立ち上がってしまう

なのは「優斗君？」

ティアナ「どうしたんですか？」

2人が突然立ち上がった優斗に問う

優斗（なんだ……この、胸騒ぎ……いや、これは……  
・・）

何処かで知っているような感覚、それを思い出そうと優斗は思考を巡らせる

バルカディアス<ちい……奴ら、まさか……>

フェイト「バルカディアス？どうしたの？」

それを知っているように話すバルカディアスにフェイトが尋ねる

優斗「バル……まさか」

その時

ドオオオオオオオオオオ！！！！！！！

上空で激しい音が聞こえ、振動によってヘリが揺れる

はやて「な、なんや!？」

スバル「爆発!？」

ヴィータ「ゆ、ゆりかごの破壊はまだだろ!？」



バルくあいつら・・・・・・・・アレを作ったのか・・・・・・・・!!>

ヘリのハッチを開き、上空を見上げる優斗達

なのは「何・・・・・・・・あれ？」

ヘリから見上げたそこには、禍々しい何かを感じさせる黒いロボットが浮いていた

？《フ・・・・・・・・フフフ、これで・・・・・・・・ドクターの……私達の夢を叶えるのよ……!!》

辺り一帯に、女の声が響く

なのは「この声・・・・・・・・4番の子のだよ……!!」

フェイト「じゃ、じゃああの中に……………」

スバル「ティアー!!ど、どうしよう……………」

ティアナ「とにかく、あれを止めないと……………」

優斗「やっぱりあれか……………いくぞバル!!」

フェイト「ゆ、優斗!？」

バルカディアスをセットアップして、ヘリから飛び出す優斗

はやて「フェイトちゃん、スバル、ティアナ!!うちらもいくで!!」

フェイト「うん!!」

スバル・ティアナ「はい!!」

なのは「私も!!」

はやて「なのはちゃんは駄目や!! いくらなんでも、プラスターの使い過ぎや」

なのは「でも……」

なのはの反論を聞く前に、4人はセツトアップしてヘリから飛び出した

クアットロ《あらあ？蒼波優斗、何をしにきたのかしら？》

優斗「貴様・・・・・・・・貴様が何故これを！！！」

クアットロ《フッフ・・・・・・・・ドクターはアルハザードの科学者のクローンですよ？それだけで分かりますよねえ？》

バルカディアス<ちい・・・・・・・・>

フェイト「優斗！！！」

後ろからフェイト達が合流してくる

はやて「優斗君！！あれは一体……」

優斗「あれは……」「魔聖デス・アルカディア」

フェイト「デス……アルカディア？」

クアットロ「せいかい、これがドクターが作った最後の切り札。  
私達の夢を叶える力ですよ！！」

はやて「そうはさませんで……スバル！！ティアナ！！」

ティアナ「はい……」

スバル「うおおおおお……」

スバルは出していたウイングロードを使って、デス・アルカディアに向かつて行く

優斗「待てスバル！！そいつは！！」

スバル「はあああああ！！！！！！」

右手のリボルバーナックルでデス・アルカディアのボディを殴る

バキイイイイイン！！！！

スバル「え？」

しかし、デス・アルカディアが吹き飛んだと同時に、リボルバーナックルが砕けてしまう

ティアナ「スバル！！！」

スバル「だ、大丈夫！！」

ウイングロードを使って、ティアナの横に戻るスバル

クアットロ《どうですか？このデス・アルカディアの力！！触れた物を破壊する驚異の力は！！》

そして、背中 of 機械の翼から幾つもの砲弾を飛ばし始めるクアットロ

はやて「みんな！！魔力攻撃でダメージを与えるんや！！！」

フェイト「りょうか

」

クアットロ《させると思ってるんですかぁ？》

はやて「なっ！？きゃあああああ！？」

優斗「はやてさん！！」

急接近していたデス・アルカディアの腕に叩き落とされるはやて

ティアナ「このっ……ファントムブレイ」

クアットロ《遅いですよぉ！！》

ティアナ「え！？きゃあああああ！？」

砲撃を放とうとしたティアナの後ろに瞬時に移動したデス・アルカ



ディアがはやと同じ様にティアナを叩き落とす

スバル「ティアー!!」

スバルはウイングロードを伸ばし、ティアナ達を助けに下降していった

フェイト「よくも……よくもみんなを!!」

クアットロ《あらあ？仲間が一瞬でやられて、フェイトお嬢様はただ傍観しているだけですかあ？》

フェイト「そんな事ない!!バルディッシュ!!」

フェイトはソニックムーブを使って、デス・アルカディアの周りを移動する

優斗「駄目だフェイトさん！！！！そいつに触れたら！！！」

フェイト「はああああああ！！！！」

ハーケンフォームのバルディッシュで何度もデス・アルカディアに斬りかかるフェイト

しかし、1回1回斬るたびに、バルディッシュに罅が入っていく

優斗「バル！！」

バルカディアス<駄目だ優斗！！！！今のお前では、帰り撃ちに・・・>

優斗「そんなのは関係ない！！！！俺は・・・約束してるんだ！！！！あいつに・・・フェイトさんを守ってくれと！！！！」

バルカディアスくだが・・・>

フエイト「きゃあああああ！？」

優斗「フエイトさん！？」

フエイトはボロボロになったバルディッシュを持ってデス・アルカディアに吹き飛ばされていた

優斗 side out

フエイト side

バルディッシュにとうとう限界が来て、私は殆ど壊れているバルディッシュを握りしめたがその隙に吹き飛ばされる

クアットロ《アハハハハハ！！！！終わりですね、フエイトお嬢様あ！！！！》

クアットロが高らかに叫び、デス・アルカディアの両手に黒い光が集まっていく

フエイト「くっ……………」

私は悔しくて唇をかむ

クアットロ《消えて下さい、フェイトお嬢様あ！！！！》

そして、その黒い光が私に向かって放たれた

フェイト（終わり……なの？いやだ……まだ、私は……  
・・）

ばさあ………

フェイト「……………え？」

何かが羽ばたく音が聞こえ、閉じていた目を開けるフェイト

フェイト「あ……………」

クアットロ《そ、蒼波優斗！？》

優斗「俺は……約束したんだ!!!」

3対の翼を、黒と白のラインの入った剣を、デス・アルカディアに構える優斗

優斗「フェイトさんを……必ず……守ってみせると!!!」

そこには4年前、私を助けてくれたあの白と黒の3対の翼があった

フェイト side out

## 第18話 終結する事件（前書き）

大学からの投稿です

優斗 vs デス・アルカディア

その結末はいかに？

では、どうぞ！！

## 第18話 終結する事件

デス・アルカディアから黒い光が放たれる寸前

優斗「バル……リミッター解除だ」

バルカディアス<待て！？あれを使ったら奴らに……>

優斗「ああ……」

バルカディアスの忠告に、言葉を止める優斗

優斗「でもな、バル……俺は、決めたんだ」

バルカディアス<優斗……>



優斗「フェイトさんを…………必ず守るって……!!」

バルカディアス<……………そうか>

優斗の言葉にバルカディアスが答える

優斗「いくぞ…………バル!!」

バルカディアス<ああ!!>

その瞬間、優斗の身体から白い魔力が溢れ出す

優斗「リミット…………ブレイク!!」

バルカディアス<R i m i t   b r e k e ・B a l k a d e x i a  
s u f o r m ・>

バルカディアスの言葉と同時に、優斗の背中に左右3対の黒と白の翼が現れ、バリアジャケットも白のバリアジャケットに黒いラインが入り、マントには2つの文様が現れた

優斗「……………!!」

一瞬で、フェイトの前に移動した優斗は、デス・アルカディアが放った砲撃を剣で一閃し、消滅させた

優斗 side

優斗「大丈夫ですか、フェイトさん？」

フェイト「う、うん……」

後ろを見ながら俺は剣状態のバルカディアスをデス・アルカディアに向ける

クアットロ《このデス・アルカディアの砲撃を斬ったですって……？》

クアットロはフェイトに放った砲撃がいとも簡単に斬られたことに驚いていた

優斗「クアットロ……貴様は、俺が倒す」

俺は剣を両手で握り、デス・アルカディアに構える

クアットロ《倒す？アハハハハハ！！！！何を言っているか分かりませんねえ？この触れたもの総てを破壊尽くすデス・アルカディアの力を倒す？無理ですわぁ！！》

高らかに、自身があるように大声で笑うクアットロ

フェイト「そうだよ優斗……現にスバルのリボルバーナックルや私のバルディッシュが……」

フェイトがひび割れたバルディッシュを握りしめながら優斗に言う

優斗「平気です……あれは、所詮紛い物ですから……」

フェイト「え・・・？」

優斗「いくぞ、バル！！！」

バルカディアス<ああ>

俺はそう言っで、一気にデス・アルカディアに斬りかかった

クアットロ《馬鹿ですねえ、これでも喰らいなさい！！》

背中にある機械の翼から砲弾を優斗に放ち始めるクアットロ

優斗「はっ！！」

それを優斗は、自身の背中の翼を羽ばたかせる事で軌道を変え、砲弾は逸れていった

クアットロ《なんですって!?!?》

優斗「はああああああ!!!!!!!!」

クアットロが驚いている隙に、懐に入り込んでデス・アルカディアを一閃する

デス・アルカディアはその衝撃で吹き飛ばされる

クアットロ《くう……!でもお、このデス・アルカディアを斬りましたねえ?これであなたの剣はボロボロ……に……》

クアットロがデス・アルカディアの中から優斗を見る

そこには傷一つ付いていない剣を再び構えている優斗の姿があった

クアットロ《馬鹿な・・・！？デス・アルカディアを斬った物が壊れないはずが！！》

優斗「クアットロ、お前は勘違いをしている・・・」

優斗はそう言っていると足元に白い魔法陣を出現させた

それはミッド式でも、近代ベルカ式でも、古代ベルカ式とも違う、見たこともない魔法陣だった

クアットロ《勘違い・・・ですって？》

優斗「確かにスカリエッティはアルハザードで存在していた科学者のクローンだ。奴のその科学者の記憶からデス・アルカディアを造ったのも納得がいく・・・だが、それだけだ」

背中の中2色3対の翼を広げ、翼の先にそれぞれ魔力が集まってい

優斗「今、貴様が乗っているデス・アルカディアは、「本当」のデス・アルカディアではないんだからな……」

クアットロ「な、なんですって……？」

優斗の言葉が信じられないのか、クアットロは顔を強張らせる

優斗「ある文明の王がいた。王は長年数々の敵と仲間たちと共に戦い続けてきた」

魔力を集めながら、優斗は何かを話し始める

優斗「倒れ行く仲間たち、王はそれを幾度となく見てきた。王はどつすれば仲間たちにそんな思いをしなくてすむか、それを考えていた」

翼に集まっていた魔力が翼の先から離れ、6つの球体となって優斗の周りに浮く



優斗「そんな時、死を司る他の文明が巧みな言葉で王を説得し、王は闇……死の力を受け入れることで仲間たちを守るうとした」

魔力球は形を変え、白と黒の魔力剣の形に変わる

優斗「しかし、王の持っていた力と死の力は元々表と裏とも言える物だった。王の体はだんだんと崩壊し始め、王は死の力に飲み込まれた」

優斗の右手にある剣も白と黒の光が混じるように光り始め、優斗は切っ先をデス・アルカディアに向ける

優斗「それが「デス・アルカディア」。光の王、アルカディアスの死の姿」

フェイト「アルカディアスって……」

いつの間にか優斗の隣に来ていたフェイトがまさか、という表情になっている

優斗「貴様のそれは、デス・アルカディアの姿を持った只の機械。少しはデス・アルカディアの能力を持つてはいるみたいだが、それではバルの剣は砕けない」

クアットロ「な、何故！？そいつはただのインテリジェントデバイスのはず！！その程度、このデス・アルカディアなら壊せる筈ですわぁ！！！！」

優斗「これ以上、貴様に話す必要はない……貴様は、俺を怒らせた」

準備が整ったのか、いつの間にかデス・アルカディアの動きを封じように白と黒のバインドが何重にも巻きついていった

優斗「俺の大切な人たちを……仲間を傷つけた！！貴様

たちの計画は……これで終わりだ……！」

クアットロ《まだよ……！まだ終わらないわ……！デス・アルカディア……！早くこのバインドを外して……！》

デス・アルカディアはバインドを力づくで外そうとするが外れる気配がまるでない

優斗「終わりだ………」

魔力剣が動き、デス・アルカディアの体に刺さってそこから白と黒の光に包まれていく

優斗「光と闇の……力の渦に消え去れ……！」

優斗は右手の剣を握りしめデス・アルカディアに突っ込んでいく

クアットロ《い、いやあああああああ！！！！！！！》

優斗「ストレイド……ブレイド！！！」

白と黒に光る剣がデス・アルカディアを貫き、体に大きな穴を開けた

デス・アルカディアの体を貫通した優斗の手の中には、気絶をしているクアットロの姿があった

グオオオオオオオオ……

破壊されたデス・アルカディアから、そんなうめき声が聞こえた気がした

優斗「……………」

バルカディアス<終わった、な…….>

優斗「ああ……」

次元世界を危機に追い込む事になりかけたこの事件、のちに「S事件」と呼ばれる戦いが今終わった……

優斗 side out

## 第18話 終結する事件（後書き）

なんだか納得しない終わり方かもしれませんが、こんなダメ作者をお許してください

感想、誤字報告をお待ちしています

ではでは!!

## 第19話 交した約束（前書き）

二日連続、大学で書いてからの投稿です

水曜は2限にしか授業がなく、バイトも夕方からなので・・・

今後は、空いている水曜の時間帯は学校で書いていこうと思っています  
ますw

では、第19話どうぞ！

## 第19話 交した約束

はやて side

聖王のゆりかご浮上、JS事件終了から1ヶ月が過ぎ、事後処理に追われていた機動六課の局員達は少しずつ、少しずつだが忙しさが緩和されてきていた

はやて「ふう・・・・・・・・」

そんな中、部隊長室の自身のデスクで大量の資料に目を通し終わったはやてがお茶を飲みながら休憩をしていた

リン「はやてちゃん、どうかしたですか？」

愛機のユニゾンデバイス、リンフォース？空曹長がふよふよと浮きながらはやてに話しかける



はやて「せやな、今回は色々大変やったなあって思ってたな」

カリムのレアスキルによって徐々に判明していた「S事件の予言

ロストロギアレリックと聖王のゆりかご、スカリエッティが作り出した戦闘機人

時空管理局最高評議会の死亡、地上本部レジアス中將の死、隠されていた管理局の闇……

はやて「事件が終わっても、やることはいっぱいやなあ……」

お茶をすすりながら、この先の辛さを感じるはやてだった

はやて side out

フェイト side

ゆりかごの破壊から1ヶ月、私はレリックやスカリエッティの事ではなく、別の事を気にしていた

フェイト（あの時の優斗の言葉……）

最終決戦の際、優斗は4年前私を助けてくれた力を使って、スカリエッティが作りだした機械「デス・アルカディア」を倒した

その際に優斗は、それを「紛い物」と称し圧倒的な力で破壊した

フェイト（優斗、あなたは一体……）

フェイトが今操作している画面には、優斗の管理局員の情報が載っていた

しかし、そこには特に異常はなく普通の局員の情報が載っているだけであった

フェイト（優斗は言ってた。私を、必ず守ってみせると・・・それを、誰かと約束したって・・・）

今思い出すと、その言葉に顔が赤くなってしまい何も考えられなくなる

フェイト（・・・・・・・・優斗）

気が付くと心の中でも、口からも優斗の名を呟いてしまう

それが指し示す答えに、フェイトはまだはつきりと気づいてはいなかった

フェイト     s i d e     o u t

優斗 side

俺は今、ギンガが入院している病院の廊下を歩いている

まあ、入院って言ってもそろそろ退院して平気らしいがな

優斗「ここか・・・」

廊下の標識に「ギンガ・ナカジマ」と書かれたネームプレートを見つけた俺はそのまま扉を開けて中に入った

優斗「ギンガ、蒼波・・・優斗・・・だが・・・」

ギンガ「あ……………」

病室の扉を開けると、中にはベッドの上で上着を脱いで体の汚れを拭いているギンガの姿があった

優斗「……………」

ギンガ「……………き」

優斗（まずい！！！！）

ギンガが何をしようとしたのが分かり、俺はギンガの口を塞ぐ

ギンガ「ん……………！？／／／」

優斗「ギ、ギンガ。此処は病院だぞ!!」

ギンガ「ん……………」

俺の言葉で思い出したのか、落ち着くギンガ

優斗「とにかく、俺は後ろを向いてるから服を着てくれ……………」

ギンガの体から視線を外し、ギンガは顔を赤くしながら服を着始めた

ギンガ「酷いですよ優斗さん……………ノックもせずに入るなんて……………」

優斗「……………すまん」

ギンガ「体も見られて……………／／／」

優斗「……………本当に、すまん」

ギンガ「でも……………優斗さんにだったら、嫌じゃなかったですけど……………／／／」

ギンガが小さい声で何かを言っていたが聞こえなかった

ギンガ「あ、もういいですよ」

優斗「ああ、体はどうだ？」

服を着たギンガと向き合って話し始める

ギンガ「はい、先生の予想よりも早く退院出来そうです」

優斗「そうか、それはよかった」

ギンガ「全部……優斗さんのおかげです」

優斗「俺の……?」

ギンガ「これです」

ギンガは胸にかけていた紐を取り出した

そこには、フェイトも持っている白と黒の羽がついていた

ギンガ「これを付けてると、体が良くなった気がして……現に、体の治りも早くなってるんです」



優斗「そうか……………」

ギンガ「もう……優斗さんの能力なんですよね？もっと嬉しい顔してもいいんですよ？」

優斗「そう……だな」

俺は表情を柔くし、ギンガに微笑む

ギンガ「……………優斗さん」

ギンガは俺の目をじっと見つめる

ギンガ「あの時の返事……………私、待ってますから」

優斗「……………」

優斗は無言で立ち上がり、扉の前まで歩く

優斗「じゃあ、また来るからな……………」

ギンガ「……………はい」

俺はそう言つと扉を開けて廊下に出た

バルカディアス<何故彼女の思いに答えない、優斗>

ポケットにしまっていたバルが俺に話しかける

優斗「……………俺と、俺と親密になれば……………きっと、あの時と同じようにまた傷つく事になる」

どこか遠いものを見ているかの様に、優斗は廊下の窓から外を見る

バルカディアスく・・・・・・・・あの時の事が>

優斗「友人や、仲間とかならまだ大丈夫だろうな・・・・・・・・でも、ギンガが望んでいる関係になったら・・・・・・・・あいつを、傷つける」

バルカディアスくだが優斗、あいつは違っただろ？お前のあれを見ても変わらなかった>

優斗「あいつはあいつ、ギンガはギンガだ・・・・・・・・」

病院のロビーから外に出て、優斗は空を見上げる

優斗「あいつとの約束は守るさ……それが、俺との関係を変えようとしなかった……あいつへの感謝の証だからな……」

優斗は目を閉じてその人物の言葉を呟く

優斗「『フェイトが危険な時……どんな時でも、助けてあげて。私の……だから』だったな……」

優斗は目を開けて、再び空を見つめる

優斗「守るさ、たとえ……俺がどうなってもな」

優斗 side out

## 第19話 交した約束（後書き）

優斗「『フェイトが危険な時・・・どんな時でも、助けてあげて。私の　　だから』だったな・・・」

この　　の部分にはある言葉が入ります

漢字・ひらがな等を含めて5文字です

感じが良い方はすぐに分かると思います

ではです

## 番外編 雑談回という別のもの？

天照大神「祝、感想100件到達！魔法少女リリカルなのはSt r i k e r s ！相反する二色の翼！番外雑談会！！！」

パチパチパチパチパチパチ………

優斗「いきなりだな」

天照大神「まあな、転生せし物語ではそんな余裕無かったし」

なのは「でも、雑談会ってなにをするの？」

フェイト「作者の事だからまたなんも計画なしなんじゃ……」

天照大神「ふっふっふ……それは後のお楽しみ」

優斗「嫌な予感が……」

天照大神「ではここで、今回登場してもらうゲストの方々を紹介し

ます!!」

なのは・フェイト「ゲスト？」

天照大神「夕さんが書かれている「魔法少女リリカルなのはStS  
syo」守りたいモノ」の主人公とその愛機、浅儀昶君とレ  
インです!!!」

?「どうも、浅儀昶です」

?「レインだよ」

なのは「えっと、なんでこの2人が？」

天照大神「この作品の感想100件目を書かれた夕さんに頼まれて、  
今回の番外雑談会に出てもらうことになった」

昶「えっと、そういうわけです」

レイン「よろしくね」

フェイト「よろしく、翔」

翔「あ、ああ・・・」

天照大神（自分の知ってるフェイトじゃないからやっぱり戸惑うか？）

優斗「・・・で、なにをするんだ？」

天照大神「ああ、実は夕さんから何をして欲しいかお願いが来ているんだ」

翔「なんだろう、嫌な予感しかない・・・」

天照大神「えつとだな・・・」内容は天照大神さんにお任せしますよ？

弄るもよし、痛めつけるもよし、どんな事でも翔ならバチこいですし（笑）

『だと』

翔「逃げる！！！！」



昶、一瞬でこの場から消える

なのは「にやはは・・・これっていつもの事？」

レイン「そうだね、昶ちゃんはあるがデフォになってるし」

フェイト「作者さんどうするの？昶がいないと・・・」

天照大神「ふっふっふ・・・この場に何故優斗になのは、フェイトの3人しか相反のメンバーがいらないか分かるか？」

優斗「・・・まさか」

天照大神「はやてにスバル、ティアナにエリキヤロには昶が逃げた時のための包囲網を頼んでいるのだよ！！！」

ずどーーーーーん！！！！

その時、天照大神達がいる部屋の空いているスペースに何かが落ちてきた

昶「むーーーー！！んーーーー！！？」

それは紐、縄、テープなどで雁字搦めに縛られている昶の姿であった

はやて「やれやれやで、結構しぶとく逃げまわったで」

スバル「昶さん速すぎですよ」

ティアナ「ほんと・・・幻影も見破られてたし」

エリキヤロ「疲れました・・・」

優斗「昶さん、あっけなく捕まってるし・・・」

レイン「昶ちゃん、こっちでも捕まったか」

なのは「こっちでも？」

レイン「うん、本編でも最近六課中を走り回ったんだけど捕まっち

やって」

フェイト「あはは・・・」

昴「んーーーーー！？んーーーーー！！」

天照大神「はいはい、静かに。これから当初の予定をするんだから」

優斗「予定・・・雑談会か？」

天照大神「いいや・・・相反のはやての私物による昴の女装コンテストだ！！」

優斗「・・・バル」

バルカディアス<Heaven Buster>

ちゅどーーーーん！！！！

天照大神は退場した

なのは「・・・優斗君」

優斗「はい？」

なのは「作者さん吹っ飛ばしたらそれこそ何すればいいのかな・・・？」

優斗「・・・何とかありますよ」

翔「というわけで、今現在主人公の優斗について分かってる事を挙げていこうと思う」

レイン「そんなのでいいのかな？」

翔「さあ・・・てか俺が進行役する事態おかしいんじゃない？」

レイン「翔ちゃんはいつもへたれなんだからこういう所で頑張らな

きゃ  
「

翔「お前の言葉で俺の心が傷ついていくよ・・・」

なのは「にやは・・・」

レイン「せっかくだしユニゾンする?」

翔「断固拒否する!!」

フェイト「ユニゾンするとうなるの?」

レイン「えつとね・・・これ見れば分かるよ」

レインが一枚の映像を2人に見せる

なのは・フェイト「・・・誰!？」

翔「ぐすん・・・」(泣)

レイン「翔ちゃんはすぐ泣くんだから・・・」

翔「うるさい！！・・・とにかく、今優斗について分かっていることは

・空戦 A （リミッター解除）空戦 S S

・最後に出てきた「デス・アルカディア」の存在を知っていた

・存在を知るだけではなく、紛い物だと断言

・誰かにフェイトを守るように頼まれてる

・・・こんな感じか？」

レイン「だろうね。でも、翔ちゃんがここで言って大丈夫なのかな？」

なのは「うーん・・・なんかあったら作者さんが責任取ると思うけど」

フェイト「それより、作者さんは何処に飛ばされたんだろ・・・」

翔「それよりも優斗の姿がないのが気になるんだが・・・」

天照大神《ふははははは！！！！》

その時、部屋にあるモニターに高笑いしている天照大神の姿が映る

なのは「作者さん！？」

天照大神《昴、君がそこにいる間にこれが完成したよ！！》

そう言つて天照大神が数枚の写真を取り出す

昴「なっ・・・！？」

それはユニゾンをしている状態の昴が女装をしている写真だった

天照大神《この写真を焼き増しして君の世界の六課の隊員達に送る！！》

昴「や、やめろ！！俺のライフは・・・」

天照大神《だが断る》

そう言って天照大神は写真を転送した

朔「ちつくしよおおおおおおお！！！！！！！！」

朔は涙を流しながら走り去っていった

レイン「あらら・・・ 翔ちゃんドンマイ」

天照大神「ふはははは！！さて、これくらい弄れば夕さんも満足して」

？《いい加減にしろ、この駄目作者！！！》

天照大神《な！？やめ》

そこで画面は切れてしまった

なのは「  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
」



フェイト「なんだか何してたのか分からなかったね」

レイン「雑談なんてしてないしね・・・」

なのは「そうだね・・・」

終わり

**番外編 雑談回という別のもの？（後書き）**

自分にはこれが雑談回を書くにあたって限界でした・・・

夕さん、不満がありましたらこれは直ぐに消します（汗）

次回は普通のコラボ

お楽しみに

番外編 紛い物の神／墮天使との共闘（前書き）

今回はこの作品の感想1件目を書いて下さった鮮血の刻印さんの作品、魔法少女リリカルなのはStrikerS-JIHAD 1  
2 神と墮天使の戦いゝとのコラボです

では、どうぞ！！！

番外編 紛い物の神／墮天使との共闘

? side

俺はふと目が覚めたので外に出て風をあびていた

そらには綺麗な満月が光り輝いている

? 「平和・・・だな」

数か月前、世界の危機となる戦いに参加していた彼としては今、この瞬間が平和そのものだった

? 「・・・ん？」

ふと、近くの草木から魔力反応を感じる

? 「なんだ・・・？」

俺はその場所に行くと草の上に白く光る小さな球体を見つけた

？」・・・・・・・・」

俺がそれに触れると、俺の体を包み込むように白い光が俺を覆った

？ side out

優斗 side

俺は今日、軌道六課ではなく別のところで仕事を受けている

内容は、オーリス姉が残した書類の中にあつた施設潰しだ

スカリエツティも捕まつたし、最高評議会も死んだ

でも、作られた施設の中にはまだそれらの関係するものが残っている

だから、俺はそれを消すために今その施設の1つに来ているわけだ

優斗「さて・・・あまり派手には出来ないからな。少しづつやってくか」

バルカディアス<ああ、しかしオーリスの姉さんもうつかりというか、この前送った書類の中に入れ忘れるとは>

優斗「まあ、姐さんも忙しかったんだよ」

俺はバルと話しながら施設の奥に進んでいく

バルカディアス<・・・優斗>

優斗「・・・ああ」

俺は足を止めて通路の先を見る

ウオオオオオオ・・・

通路の奥からは何かの鳴き声が聞こえてきた

バルカディアス<・・・・・・・・>

優斗「はぁ・・・スカリエッティめ、まだ他にも作ってたのか」

バルカディアス<気をつけろよ、優斗>

優斗「ああ」

俺は剣状態のバルを握りしめて奥に進んでいった

おそらく、最奥部だと思われる広い空間に俺は出た  
そこには3つのある物があった

優斗「なん・・・だと」

バルカディアス<おいおい・・・スカリエツティの奴、紛い物とはいえ何てものを・・・>

優斗から見て右側には紅い色をした竜、左側には黒を主体とした竜、そして真ん中にはとてつもない威圧感を放つ存在が姿をくつつけるように存在していた

優斗「破壊竜神・・・ヘヴィ・デス・メタル・・・!!!!」

ヘヴィ・デス・メタル（以降HDM）「ぐぎやあああああああ  
ああ!!!!!!」

優斗がそう呟くと、優斗の存在に気が付いた合計3つの頭から凄まじい咆哮が放たれた

優斗「くっ・・・」

優斗が咆哮に怯んでいると右側　メタルの口からの炎が放たれる



優斗「!!」

優斗はそれをギリギリで避けるがバリアジャケットが少し焦げてしまふ

避けた先に左側　ヘヴィの口から雷が優斗めがけて向かってくる

優斗「くっ!」

雷を剣で斬り裂くがバリアジャケットを掠ってしまふ

掠った部分から火花が散り、黒く焦げあがる

優斗「紛い物とはいえさすがは「神」だな・・・」

バルカディアス<これが本物だったらもう手遅れだったな>

優斗「そう・・・だな!!」

ヘヴィの雷とメタルの炎を避けながらHDMに近づく優斗

優斗「光輝・・・一閃!!」

剣に魔力を付加させて、HDMの体を斬る優斗

しかし

HDM「ぐう・・・ぐおおおおお!!!!!!」

3体の口からとてつもない咆哮が放たれ、優斗は壁に吹き飛ばされる

優斗「ぐう・・・!?!」

そして、HDMの攻撃はそれで終わりではなかった

ヘヴィの口には雷の塊が

メタルの口には炎の球体が

そして、中心のデスの正面には赤と黒の混じった球体がそれぞれ出  
来上がっていた

優斗「しまっ・・・」

優斗は一瞬で何重ものシールドを展開する

HDM「ぐぎゃあああああああ！……！！！」

HDMが叫ぶと同時に3つの物体が融合、そして雷、炎、赤黒い閃光がその空間をがむしやらに襲い始めた

優斗「がはっ……はぁ……はぁ……」

攻撃が止み、何とか持ちこたえた優斗はシールドを消す

優斗（まさか……紛い物とはいえ、何重ものシールドを張っても

ダメージが来るなんてな)

優斗は剣を支えにして立ち上がったが、HDMはまだ無傷であった  
そして、デスの前方に先ほどの赤黒い球体が現れる

優斗「くっ・・・」

優斗は剣を構えて、防御の体勢になるが

優斗「・・・・・・・・？」

ふと、球体とデスの間の空間が歪み始めたのに気が付く優斗  
空間の歪みは次第に大きくなっていき、黒い何かが見えてくる

HDM「あああああああ！！！！！！」

HDMが叫ぶと、歪みが消え1人の男がそこに浮いていた

？「・・・やれやれ、また厄介ごとか」

男は持っている太刀を振るい、デスを斬りつける

デスは斬られたことに怯み、攻撃を止める

優斗がそれを見ていると男は優斗の傍まで降りてきていた

？「あいつはなんだ？」

優斗「あれはヘヴィ・デス・メタル・・・ある世界で存在していた、伝説の破壊神」

？「破壊神か・・・大層なものだな」

優斗「あれは紛い物・・・本物は、既に存在はしていない」

？「何故わかる？」

優斗「・・・・・・・・」

男の問いかけに優斗は黙る

？「・・・まあいい、俺はどうすればいい？」

優斗「え・・・？」

？「俺はあいつのせいで此处に来たらしいからな。あいつを倒せば、帰れる可能性が一番高い」

優斗「・・・手伝って、くれるんですか？」

？「お前が駄目だと言っても、俺は自分でやるけどな」

男はそう言ってHDMを見上げる

優斗「・・・分かりました、お願いします」

？「ああ」

男は浮き上がり、太刀を構える

優斗もそれに続いて剣を構えた

優斗「俺は蒼波優斗です、あなたは・・・？」

？「俺か・・・ヴィレイサー。ヴィレイサー・セウリオンだ」

男　ヴィレイサーは自分の名前を言い、優斗を見た

ヴィレイサー「行くぞ優斗・・・奴を、斬り伏せる！！」

優斗「・・・はい！！」

ヴィレイサーと優斗は同時にHDMに突撃した

ヴィレイサー「はあ!!」

太刀でメタルの顔を斬るヴィレイサー

メタルはそれに怯むがすぐに炎を口から放つ

ヴィレイサー「ちい!!」

ヴィレイサーはそれをぎりぎりでかわすが、炎が掠ったバリアジャケットの一部が焦げてしまう

優斗「はっ!!」

優斗はヘヴィの顔と目を斬りかろうとするが、ヘヴィが放つ雷を避けているためなかなか攻撃できずにいた

ヴィレイサー「おい、本当に効いているのかよ!? さっきから全然怯まないぞ!!」

優斗「これで・・・いいんです! 本体のデスは、横の2体によって守られています!! 先に横の2体を倒せば・・・後はデスを倒すだけなんです!!」



ヴィレイサー「簡単に言われても・・・!!」

メタルの炎を避けながら一撃を確かに入れていくヴィレイサー

ヴィレイサー「きりがねえぞ!!」

優斗「・・・分かってます!!バル!!」

バルカディアス<Alkadias uniform>

優斗の背中に白い2対の翼が現れる

優斗「これでも・・・喰らってろ!!」

バルカディアス<Holy Saber>

白く輝いた剣がヘヴィの頭を両断する

HDM「ぐあああああ!!!!!!!!」

優斗「ヴィレイサーさん!!」

ヴィレイサー「ああ!! 雷煌滅閃斬!!」

雷を纏った太刀がメタルの頭を両断する

HDM「ああああああああああ!!!!!!!!」

残ったデスの口から再び咆哮が放たれ、2人は壁に吹き飛ばされてしまう

ヴィレイサー「ぐう・・・大丈夫か、優斗?」

優斗「っ・・・はい」

2人が立ち上がると、デスが口を大きく開けて赤黒い光が集まるのが見えた

優斗「!? ヴィレイサーさん、あれは避けて下さい!!」

ヴィレイサー「分かった!!」

そして、デスの口からそれが凄まじい速さで放たれた

どごおおおおおん!!!

壁にぶつかったそれは壁をえぐり、巨大な穴を作り上げていた

ヴィレイサー「なんつう威力だよ・・・」

優斗「まずい・・・あいつ、あれを撃とうとしてる」

ヴィレイサー「あれ・・・?」

優斗の言葉にヴィレイサーは疑問を抱く

優斗「HDMが持つ最後の切り札・・・神以外を滅ぼす一撃」バイ  
オレンス・ヘブン」

ヴィレイサー「なっ・・・」

優斗「さっきのあれは、威力を集める際に残ってしまう力を吐き出しているだけ・・・バイオレンス・ヘブンの一撃は、おそらくこの施設を軽く吹き飛ばすくらい威力があります・・・」

ヴィレイサー「おいおい・・・冗談だろ」

優斗「・・・ヴィレイサーさん、あいつを・・・デスの注意を引き付けてもらえますか？」

ヴィレイサー「・・・どうするつもりだ？」

優斗の頼みにヴィレイサーは逆に質問する

優斗「俺の・・・最大に一撃で、バイオレンス・ヘブンを放つ前に奴を消し去ります」

ヴィレイサー「・・・分かった」

ヴィレイサーは優斗の言葉に頷くとデスの前まで移動し始めた

優斗「行くぞ・・・バル!!」

バルカディアス<ああ・・・R i m i t   b r e k e . B a l k a  
d e x i a s u   f o r m . >

優斗の姿バリアジャケットは白の服に黒のラインが入り、背中にあった2対の白い翼は変わって白と黒の3対の翼になった

優斗「・・・・・・・・」

優斗が剣をデスの体に向けると剣の形が変わり、黒い銃になった

バルカディアス<D a r k n e s s   l o r d   b r e a k e r . >

銃の砲身の大きさに合わない程大きな黒い魔力が収束をし始め、さらに巨大化していく

ヴィレイサー「おい優斗!!まだか!?!」

デスの口から放たれている赤黒い光を避けながらヴィレイサーが優斗の問う

優斗「・・・でき、ました！！離れてください！！！」

ヴィレイサー「分かった！！！」

優斗の合図にヴィレイサーはデスの正面から離れる

それをみたデスは口に黒の光を出現させる

優斗「撃た・・・せるかああああ！！！！喰らえ！！！」

デスが放つよりも先に、優斗のそれは放たれた

優斗「ダークネス・・・ロードブレイカアアアアアア！！！！」

優斗が銃の引き金を引くと、集まっていた黒い光はデスをめがけて放たれた

その大きさはデスの体を容易く飲み込むほど大きかった

優斗「はぁ．．．はぁ．．．」

デスのいたあたりが煙に包まれる中、優斗の右足は地面に膝ついていた

ヴィレイサー「おい、大丈夫か？」

そこに太刀を持ったヴィレイサーが寄ってくる

優斗「はぁ．．．は、い．．．」

優斗は息を切らしながらも答える

ヴィレイサー「．．．あいつは、倒したか？」

優斗「はぁ・・・はぁ・・・その、筈です。バル・・・？」

バルカディアス<・・・ああ、HDMの反応は完全に消えている>

バルカディアスの言葉に安心する優斗

優斗「・・・あ、あれは」

煙が晴れ始めると、そこに先ほどヴィレイサーが現れた時のものと  
同じ空間の歪みがあった

ヴィレイサー「どうやら・・・あれに入れば、俺は戻るようだな」

ヴィレイサーは太刀をしまうと歪みに向かう

優斗「ヴィレイサーさん・・・ありがとうございます」

ヴィレイサー「・・・優斗」



歪みに向かっていたヴィレイサーは一度止まって優斗に向きなおす

ヴィレイサー「さっきの力・・・それを恐れるな」

優斗「・・・・・・・・え？」

ヴィレイサー「お前は、まだどこかでその力を恐れている・・・巨大すぎる、その力が起こす何かを」

優斗「・・・・・・・・」

ヴィレイサー「けどな・・・少しは、頼れよ？お前を・・・大事に思っている奴のことをな」

優斗「!!」

ヴィレイサーはそう言って空間の歪みに入っていく、姿を消した

優斗「・・・・・・・・」

## 第20話 冥界の影が知らず闇の始動（前書き）

お久しぶりです、天照大神です

今回から第2章に入ります!!!

完全オリジナルストーリー・・・

どうぞ期待してください!!!

では・・・本編をどうぞ!!

## 第20話 冥界の影が知らず闇の始動

? side

? 「そうか・・・奴が、姿を現したか」

声を発した人物の声が、空間に響く

?? 「様、どうしますか？」

??? 「奴の力はもともと我らの物・・・ですから」

? 「慌てるな我が同志たちよ」

周りがそれぞれの意見を主張する中、1つの声がそれを収める

? 「今はまだ、扉が「不完全」だ・・・我ら全員が仕掛けることは出来ぬ。せいぜい1人が限界だろう・・・」

???? 「様、私が行きます」

新たな声が、話していた声に言う

？「ラビリンス・ローズか・・・」

ローズ「はい・・・扉の完成と、奴の捕獲・・・わたくしがこなして見せます」

？「いいだろう・・・」

ローズ「では・・・」

ローズはそう言ってその空間から消えた

？「貴様の力は・・・我らの物、それは変わらぬぞ・・・」「悪魔神王」よ」

？ side out

優斗 side

優斗「此処が・・・陸士108部隊か」

スバル「うん！！お父さんとギン姉が所属している舞台だよ」

ティアナ「今はギンさんは六課に出向している形ですけど」

両側にいるスバルとティアナがそれぞれ説明する

3人が108部隊に来ているのは、はやてがスバルとギンガの父「ゲンヤ・ナカジマ」から3人を呼ぶように頼まれたからだ

スバル「でもお父さん・・・何の用だろ？」

ティアナ「さあ・・・それは聞かないと分からないわね」

優斗「いや・・・俺なんか、会ったことすらないんだが」

3人はあれこれ話しながら、108の部隊長室に向かっていった

？「お、来たか。3人とも、入っていいぞ」

部隊長室の扉の前で通信を開くと、中から声がしたので俺たちは入った

スバル「久しぶり、お父さん!!」

ティアナ「こらスバル!!すみません、ゲンヤさん・・・」

中にいた1人の男性に声をかけるスバル

？「なに、ティアナもそう固くするな」

ティアナ「分かりました」

2人の次に、男性は優斗に視線を向ける

優斗「初めまして、時空管理局3等空位。蒼波優斗です」

？「ああ、108部隊長。ゲンヤ・ナカジマだ、よろしくな」

3人はソファーに座るよう促され。スバルはゲンヤの横に、その反対側にティアナ、横に優斗の形で座った

スバル「でお父さん、何で私たちを呼んだの？」

ゲンヤ「なに・・・ギンガが六課に行つてからうちの捜査が行き詰まり始めてな・・・ギンガは今入院中、ハラオウンの嬢ちゃんは何の件で忙しそうだし・・・だから、お前たちを呼んだのさ」

優斗「えつと・・・それは2人なら分かりますが、自分は・・・？」

スバルとティアナが呼ばれるのは、昔からの付き合いだと言つこと

で理解した優斗だが自分が呼ばれたことが分らない

ゲンヤ「なに・・・ギンガが随分とお世話になっていたみたいだかな・・・親としても、一度会いたかったんだよ」

優斗「はあ・・・」

ゲンヤ「何せ、ギンガの思い人だからな。未来の息子かもしれないだろ？」

優斗「な、何言ってるんですか!？」

ゲンヤが言った言葉に慌てる優斗

スバル「そっかぁ・・・ギン姉と優斗が結婚したら、優斗は私のお兄さんになるんだねー」

ティアナ「あんだねえ・・・」

スバルの言葉に、若干呆れるティアナ



ゲンヤ「で、お前さんとしてはギンガの事をどう思ってるんだ？ん  
？」

優斗「お、俺は・・・」

ビー！ビー！ビー！

優斗が言葉を途切れさせた瞬間、部屋内にアラートが鳴り響いた

ゲンヤ「なんだ、一体どうした！？」

すぐさまゲンヤは、部隊の人間に通信を開く

《く、訓練場に謎の黒い物体が出現！！そこから無数の砲撃が放た  
れて局員が数人重症に！！》

ゲンヤ「なっ・・・今すぐ救護班の準備だ！！」

スバル「お父さん！！私たちも！！」

ゲンヤ「すまん！！行ってくれるか？」

ティアナ「もちろんです!!」

優斗「俺も・・・っ!？」

俺がソファーから立ち上がると、急に何かが体を通り過ぎて行った感じがした

優斗（これは・・・まさか!？）

俺は2人を置き去りにして訓練場に向かった

優斗「はぁ・・・はぁ・・・」

暫らく走ると訓練場につき、現場の状況を見る

床は所々破壊され、中心には黒い物体が存在していた

バルカディアス<・・・優斗>

スバル「はあ・・・はあ・・・これ・・・!？」

ティアナ「・・・酷い状況ね・・・」

後ろから2人が追い付いてきて、現場の状況に啞然とする

？「ふふふ・・・まだ残っていたか」

優斗・スバル・ティアナ「!!!」

訓練場に声が響くと、黒い物体が割れていく

？「これだけ暴れれば・・・来ると思っていたぞ」

黒い物体が完全に割れ、中から1人の男が現れた

スバル「あなたが・・・これを!？」

？「そうさ・・・私の力であれば、この程度造作でもない」

男はスバルの問いに高らかな声で答える

ティアナ「・・・あなたは、一体」

？「さあ、ね・・・その男なら・・・知っているんじゃないかい？」

スバル「え・・・？」

スバルは横にいる優斗に視線を向ける

優斗「・・・その口調、ラビリンス・ローズか」

？「ご名答・・・私は「冥界の影ラビリンス・ローズ」。以後お見知りおきを・・・」

男　ローズは綺麗にお辞儀をする

ティアナ「優斗・・・あんだ、何か知ってるの？」

優斗「・・・」

ティアナの問いに、優斗は答えず剣状態のバルカディアスを出現させ構える

ティアナ「ちょっと！！答えなさ　」

優斗「ふっ！！」

優斗はそのままローズに踏み込んだ

ローズ「おやおや・・・」

しかしローズは手を優斗にかざし、黒い魔力盾で剣を防ぐ

スバル「はああああああ！！！！」

すると、いつの間にか武装していたスバルがリボルバーナックルで右横から殴ろうとしていた

ティアナ「ちょっとスバル!？」

しかし、ローズはスバルの拳も魔力盾で防いでしまった

スバル「ティア!!!!話は後だよ!!!!今はこの人を捕まえないと!!!!」

ティアナ「ああもうっ!!!!分かったわよ!!!!」

そう言ってティアナもバリアジャケットを展開する

ローズ「ふふふ・・・」

すると、一瞬でローズの姿が消える

優斗「・・・そこっ!!!」

しかし、優斗はすぐさま反応して別のところに現れたローズに一閃を叩き込む

ローズ「ぐっ……」

優斗「ティアナ!!!」

ティアナ「喰らいなさい!!クロスファイヤーシュート!!!」

無数の魔力弾をティアナが撃ち、ローズの体に叩き込まれる

ローズ「ぐっ……まさか、これ程とは」

腹を押さえながらローズが3人をにらむ

ティアナ「意外と歯ごたえないわね……」

ローズ「ほう……そんな事言われては、本気を出さなくてはいいけませんね」

スバル「・・・・・・・・」

スバルはローズの言葉に構える

ローズ「はああああ・・・」

しかし

優斗「させるか・・・光輝一閃!!!!」

ローズの後ろに移動していた優斗が、ローズの体を一閃した

ローズ「があっ・・・き、さま・・・」

男の体が倒れると、体から黒い煙が出てきた

ティアナ「なによ・・・あれ？」

煙はそのまま消え去り、優斗はバルカディアスをしまっていた



優斗「・・・・・・・・」

スバル「優斗・・・？」

その後、現場の後任せを108に任せ3人は六課に帰った

優斗「奴らが・・・動き始めたか」

バルカディアス<優斗・・・>

夜、六課の屋上で空を見上げながら呟く優斗

優斗「Z軍・・・・・・・・一度、帰る必要があるな」

バルカディアス<確かなな・・・スカリエッティを捕まえたことも、報告しないといけないしな>

優斗「ああ・・・・・・・・万が一のことも、考えておかないとな」

2人の会話は、吹きぬく風に流されていた・・・

優斗 side out

## 第21話 訪れた出会い（前書き）

お久しぶりです、天照大神です

・・・忘れてますよね、こんな私の事なんて（汗）

更新遅れてましたし・・・・・・・・大学の期末よ、なんで2週間も続いた

では、どうぞ

## 第21話 訪れた出会い

ギンガ side

医者「・・・はい、これで検査も終了よ」

ギンガ「ありがとうございます」

白衣を纏った女性医師の言葉にお辞儀をして礼を述べるギンガ

医者「それにしても・・・完治まで数カ月はかかるダメージがあった筈なのに・・・」

ギンガ「・・・あの人の、おかげです」

医師の疑問にギンガは頬を赤らめて言う

医者「まあいいわ・・・これで退院だけでも、無理はしないように」

ギンガ「はい」

ギンガはそう言うと、立ちあがって部屋から出た

ギンガ（優斗さん・・・今日は予定があるから来れないって言った・・・ちよっと、寂しいな）

前もって退院日に迎えに来てもらつように優斗にお願いをしていたギンガであつたが、今日は優斗の都合が悪く代わりにフェイトが来てくれる事になっていた

ギンガ（とりあえず、フェイトさんに連絡しよう）

ギンガは外に出てフェイトに通信をかけた

ギンガ    s i d e    o u t

フェイト side

フェイト（此处は　　？）

ふと気が付くと周りは何もない黒い空間だった

その中で、誰かいないかと私は必死に黒い空間を見渡す

フェイト（どうして・・・誰も、いないの・・・？）

たちまち孤独を覚え始めるフェイトは、次第に不安になっていく

？「何　来　の・・・フ　ト」

フェイト（・・・え？）

聞き覚えのある声が聞こえ、後ろを振り向くフェイト

？「・・・母さん」

そこには、10年前・・・それが別れとなった母とその頃の自分の姿があった

フェイト（これは・・・あの時の）

気が付くと、周りの風景は10年前の時の庭園其の物になっており、フェイト自身は幼いころの自分の後ろに立っていた

フェイト（子供）「母さんに笑ってほしい・・・幸せになって欲しいって気持ちだけは、本物です」

プレシア「・・・くだらないわ、貴女が何を言おうと・・・」

それと同時に、時の庭園が激しく揺れ出し始める

プレシア「私の娘はアリシアただ一人・・・」

プレシアは彼女の側に浮かんでいる生体ポッドの中のアリシアを見る

プレシア「・・・でも」

フェイト「・・・え？」

幼いころの自分に背中を向けたプレシアが、ほんの少しだけ後ろを向く

プレシア「いつもそうね・・・私は、大事な事に・・・気づくのが遅すぎる」

そう言った母さんの顔は、何処か寂しげで・・・

フェイト（子供）「母さん！・・・！」

プレシアは足元に出来た虚数空間に落ちて行き、それを見た幼いころのフェイトが手を伸ばす

それをその時傍にいたアルフがその時の私を避難させようと止めさせている

フェイト（・・・・・・）

それを最後に、私がいたその空間は白く染まっていった



フェイト「・・・・・・・・ん」

目を開けると、私は自室のベッドの上で枕に顔をうずませていた

フェイト「夢・・・」

体を起こすと、目から涙が零れているのに気付く

フェイト「母さん・・・アリシア」

助ける事が出来なかった

あの人に何も出来なかった

そんな思いが私の中をずっとめぐり始める

なのは「フェイトちゃん・・・?」

すると、朝の訓練を終わらせたなのはが部屋に入ってきた

フェイト「あ・・・おはよう、なのは」

私は涙を拭ってなのはに声をかける

なのは「おはよう・・・どうか、したの?」

フェイト「何でもないよ・・・」

私がそう言つとなのは何も言わず、ベッドに腰掛けてくる

なのは「そうだフェイトちゃん、今日は予定何かある?」

フェイト「え?特に無いけど・・・」

なのは「良かった・・・はやてちゃんが、前線メンバーや隊長陣は偶には羽を伸ばすべきだって今日に休暇を取らせる事になったんだ」

フェイト「はやてが？」

なのは「うん。それでね、もしよかったら私と」

バルディッシュくSir　ギンガ様からメールが届きました>

フェイト「ギンガから・・・？開いてくれる？」

バルディッシュくはい>

バルディッシュは私の声に応えて、メールの本文を画面に映す

ギンガ『おはようございます、フェイトさん。予定通り本日退院する事になりました。本当は優斗さんが迎えに来てくれる事になっていたんですが、優斗さんに急な用件が入ってしまったらしくて・・・お暇でしたら、フェイトさんに迎えに来て欲しいんですが大丈夫ですか？』

フェイト「そっか・・・なのは、悪いけど私」

なのは「うん、私は大丈夫だよ」

フェイト「ありがとう」

私はギンガにOKの返事を送り、着替え始める

なのは「でも優斗君が用事かぁ・・・せっかく、デートに行こうと思ってたのになぁ・・・」

フェイト「え・・・？さっきなのは、私と」

なのは「うん、私とフェイトちゃん。優斗君の3人で出かけようって言おうとしてたんだよ」

フェイト「そ、そうだったんだ・・・」

デートと3人だという言葉に、頬を赤らめるフェイト

なのは「そう言えばヴァイス君にバイクを借りたいって話してたし・・・何処行くんだろう？」

フェイト「でも、優斗が・・・出かける？」

私は優斗が出かける事に疑問を持っていた

JS事件中、優斗と出かける事になったとき・・・優斗は特に行きたい場所は無いと言ってた

嘘をついていたのか分からないけど・・・私は、疑問を抱いていた

その後、準備を終えた私は車を出してギンガを迎えに向かった

ギンガ「有難うございますフェイトさん」

フェイト「ううん、気にしないで」

ギンガを車に乗せた帰り道、道路を走っていると助手席に座っているギンガがお礼を言ってきた

ギンガ「本当は父さんにも連絡したんですが・・・この前の事後処理が忙しいみたいで」

フェイト「そつか・・・」

数日前、優斗・スバル・ティアナが陸士108に訪れていた時に起きた騒動

「陸士108部隊の局員」が突如暴れ出し、訓練場に被害を及ぼしたという事件

フェイト「確か・・・暴れ出した局員本人は、何も覚えてないんだよね・・・？」

ギンガ「はい・・・しかも、暴れてた際にみた魔力光はその人の魔力光では無かったそうなんです」

暴走していた時、その局員は黒い魔力光を出していたらしい

結局、原因も分からないままその局員は取り調べを受けている

ギンガ「・・・あれ？」

ふと、前を見ていたギンガが声を出す

フェイト「どうしたの・・・？」

ギンガ「向こうから来るの・・・優斗さんですよね？」

フェイト「え・・・本当だ」

反対車線から、バイクに乗っている優斗が見えた

しかし、優斗はそのまま別方向の道に曲がってしまう

フェイト「・・・追いかけてみる？」

ギンガ「ええ！？」

ギンガが驚いている間に、フェイトは車の方向を既に変えていた

ギンガ「フェ、フェイトさん・・・（汗）」

ギンガは困った顔で私をみる

フェイト「大丈夫・・・気づかれないように走ればいいんだから」

そのまま数時間、優斗を尾行する形で私は車を走らせていった

途中、優斗が向かっている場所に私は気が付いた

だって・・・そこは

フェイト side out



優斗 side

ヴァイスさんから借りたバイクに乗って俺は、あいつの に来ていた

豊かな自然が広がる此処は・・・俺があいつに話を聞いていた通りの場所だった

優斗「今まで来る機会が無かったが・・・いい場所だな」

バルカディアス<ああ・・・あいつが自慢する程の場所だな>

綺麗な湖、緑あふれる自然、平和に過ごす動物達

俺が野原に腰を下ろすと、いつの間にか傍に白い兔が何匹かやってきていた

優斗「あいつも・・・本当は、此処で過ごしたいんだろうな」

兔達の頭を撫でながら呟く優斗

兔達は気持ちよさそうに俺の撫でを受け入れ、気持ちよさそうにしていた

バルカディアス<そろそろ・・・行くぞ、優斗>

優斗「・・・ああ」

俺は立ちあがって、バリアジャケットを起動する

優斗「・・・頼む、バル」

バルカディアス<・・・ああ>

普段は出していない鞘にバルをしまい、鞘ごとバルが白く光り出す

バルカディアス<・・・同調率100%、ゲートオープン>

バルの言葉と共に、俺の目の前に白い扉が出来上がっていた

優斗「・・・」

俺は扉を開け、中に入っていた

「帰還ご苦労様です!! 蒼波卿!!」

優斗「ああ」

光が収まると、そこは何処かの部屋

俺は傍に立っていた1人の男に返事をする

「技術部の副主任がお待ちしています、このままそちらに」

優斗「分かつ  
」

「???」  
「きゃあっ!?!」

ドンッー!!

優斗「っと・・・」

後ろから2つの声と同時に、背中に当たった衝撃で俺は立っていた場所から前に押し出された

俺が後ろを向くと、見知った人物が2人床に倒れていた

「何者だ貴様ら!?!どうやって此処に」

優斗「平気だ・・・この2人は、俺の知り合いだ」

男が声を荒げて武器を構えようとしたが、俺はそれを制した

優斗「はぁ・・・なんで此処にいる」

？「いたた・・・あ、あはは・・・」

??「す、すみません・・・」

苦笑いをするフェイトさんと、申し訳なさそうな表情をするギンガを見て、俺はため息を吐いた

優斗「つまり・・・2人は俺を尾行していて、扉の中に入っていった俺に着いていこうとしたわけか・・・」

フェイト・ギンガ「はい・・・」

俺は2人を連れて先程の部屋から出て、廊下を歩いていた

フェイト「あの・・・優斗」

優斗「なんですか？」

フェイト「その・・・ね、なんで「エルトセイム」に・・・？」

フェイトさんは俺が何故、エルトセイムに行ったのかを聞いてきた

優斗「・・・前にエルトセイムが故郷の奴から話を聞いた事があって・・・一度、行きたいと思っていました」

フェイト「へえ・・・その人って？」

優斗「・・・・・・・・」

俺はフェイトさんの追及に応えず、ただ廊下を歩く

数分後、俺達は技術部の部屋の前に到着した

優斗「はぁ・・・失礼します」

扉が開き、俺達の中に入る

？「ゆ~~~~~~~~と~~~~~!~!~!」

中に入ると同時に、俺は1つの人影に抱きつかれ床に押し倒された  
？「やっと帰ってきた〜・・・前に言っただよね？1年に1回は帰っ  
てきてって！」

優斗「あのな・・・こっちはスカリエッティを追うので忙しかった  
んだぞ！？帰ってる暇なんかねえよ！？」

俺に抱きついている金色の髪の女は頬を膨らませながら文句を言う

フェイト「な・・・・・・・・・・んて」

ギンガ「フェイト・・・・・・・・さん？」

フェイトは優斗を押し倒している人物をみて驚愕の表情をしていた

？「っと・・・・・・・・こうやって会っるのは初めてだね」

金色の髪の女は立ちあがってフェイトに向き合う

フェイト「・・・アリシア、姉さん」

アリシア「うん・・・会えてうれしいよ、初めまして・・・フェイト」

優斗 side out



## 第21話 訪れた出会い（後書き）

アリシア「ふっふっふ・・・ついに！！真打ち登場だよ！！」

天照大神「はぁ・・・」

アリシア「例え妹でも、優斗の事は渡さないからね！！！覚悟しておいてよ優斗・・・私がいないと生きていけなくさせてあげるからね！！！」

天照大神「気合い入ってるな・・・」

アリシア「次回も待ってるよ」

## 第22話 失われし都「アルハザード」

優斗 side

フェイト「アリシア・・・姉さん」

アリシア「うん、そうだよフェイト」

フェイトさんは自分の目の前にいるアリシアを見て驚いた表情をしている

フェイトさんの隣にいるギンガはどうすれば良いのか分からなくてオロオロしていた

フェイト「どうして・・・だって、姉さんは」

アリシア「今はその話はなし、優斗。バルを出して」

優斗「ああ」

フェイトさんにそう言うってからアリシアが俺の方を向いて手を出し

てくる

俺はアリシアの手の上に待機状態のバルを置く

アリシア「まったく・・・いくらバルの性能が高いからって、4年もちゃんとした整備しないでいると反応が鈍るよ?」

アリシアは近くの機械にバルを置いて、コンソールを叩きながら俺に愚痴る

優斗「だからなあ・・・スカリエッティを追ってたんだから、戻る暇なんかなかったっての」

アリシア「まあ、こうやって戻ってきたから良いんだけどさ・・・」

コンソールを叩き終えて、アリシアは俺の隣まで戻ってきた

アリシア「後はオートで調整、優斗はこのまま報告に行ってね」

ギンガ「報告・・・?」

ギンガがアリシアの言葉に首を傾げる

優斗「分かった。アリシア、悪いが2人を頼む」

アリシア「オッケー、さあ2人とも！私の部屋にいこいこー！」

フェイト「えっ！？ね、姉さん！？」

ギンガ「わわっ！？ひ、引っ張らないで下さいー！！」

2人はアリシアによって握られた手に引きずられてそのまま部屋から出て行った

俺も、直ぐに部屋を出て俺を待っている人物の元に向かった

優斗 side out

アリシア side

アリシア「2人とも、ゆっくりくつろいでいいからね」

私はフェイトと紫髪の女の子を自分の部屋に案内してベッドに腰掛ける

2人は戸惑いながらも、ベッドの側に置いてあるソファに座った

アリシア「さて・・・何から、話そうか」

私は少し、真剣な表情に変えて2人を見る

フェイト「・・・姉さん、どうして・・・姉さんが「生きて」いるのか」

ギンガ「生きて・・・？フェイトさん、それってどういう・・・」

アリシア「フェイトの行っている通りだよ、私は・・・一度死んでいるんだから」

ギンガ「えっ……………」

疑問顔になっていた紫髪の子の表情が一気に豹変する

何を言っているのか分からない、そんな表情だと私は直ぐに理解できた

フェイト「ギンガ……姉さんはね、幼いころ事故にあって……死んでるんだ」

フェイトが悲しそうに、ただどはつきりと私の詳細をその子に話していく

フェイト「それで、姉さんの体は……………虚数空間に落ちて行っただの」

ギンガ「じゃあ……なんで、その人が今私達の目の前に……………」

アリシア「そこからは説明が必要だね。虚数空間に落ちた私の体と母さんは勿論何も出来なかった」

私は、淡々と言葉を発していく

アリシア「勿論、母さんは何度も魔法を使おうとした。けれど虚数空間ではどうやっても使う事が出来ずに、母さんも体の限界を迎えたの」

あの時、フェイト達が言う所のPT事件の最後にはもう母さんの体は限界寸前だった

それはもう、命すら救う事が出来ないほど

アリシア「けれど、そんな時虚数空間全体に謎の揺れが起きたんだ」

フェイト「揺れ・・・？」

アリシア「うん・・・母さんは、私が入ったポッドをギュッと抱きしめて目を瞑ったの。そのまま揺れが激しくなって母さんは気を失った。気が付いた時には、私のポッドの横で野原に倒れてたんだって」

ギンガ「野原・・・？虚数空間の中に、そんな所が・・・？」

アリシア「違うよ・・・そこは既に虚数空間ではなく、別の世界だったんだ」

フェイト「別の・・・世界？」

私の言葉に、2人とも疑問の表情をまた浮かべる

アリシア「うん。この世界は、失われし都・・・・・・・・数々の技術が眠る世界「アルハザード」なんだよ」

フェイト・ギンガ「!？」

アリシア「しかも、ただたどり着いただけじゃなかった・・・・・・・・母さんの体は、怪我也病氣も無かったかのように健康な状態になっていたんだ」

フェイト「・・・・・・・・」

フェイトは信じられないという表情で私を見る

アリシア「そして・・・母さんが、私のポッドに不具合が無いか見ようとした時・・・私は、目を覚ましたの」



ギンガ「え・・・？でも、あなたは」

アリシア「うん・・・私は、その時は既に死んでから数年は経っていたよ。体だけは、母さんが守ってくれていたけど・・・それでも、死んでいた事に変わりは無い」

ギンガ「なら、どうして・・・」

アリシア「それは」

グオオオオオオオオ！！！！！！

フェイト「！！な、何！？」

突然聞こえてきた何かの音に、フェイトが立ちあがる

ギンガ「フェ、フェイトさん！！外に何かが！！！」

窓から外を見た紫髪の子がフェイトに外を見るように促す

フェイト「な、なに・・・あれ」

私も2人の後ろから窓の外を見る

そこから見えたのは、待ちの中に立ちつくす1体の巨大な  
だった

フェイト「は、早く町の人達を助けに」

アリシア「大丈夫だよフェイト、あれはホログラムだから」

ギンガ「ホロ、グラム・・・？」

アリシア「うん、心配ならあそこに行こうか？多分、2人が心配する程のものではないよ」

私の言葉に、何度目かの疑問を受けべる2人だったが私は2人を連れ出すようにして部屋から出て行った

わーわー!!

おおおおおお!!!!

先程の  
聞こえてくる  
が立つ町の場所に向かうに連れ、歓声が大きく

フェイト「姉さん・・・いったい、何が？」

アリシア「この国ではね、大人子供関係無く楽しめる1つの遊びが存在してるんだ」

今だ疑問顔のフェイトに、私は事情を説明し始める

アリシア「あそこに映ってる怪獣は、その遊びを盛り上げる為にこの国の技術者達で作った立体ホログラム。ああいうふうには怪獣が街中に現れるのは、もう皆慣れてるんだよ」

ギンガ「そ、そうだったんですか・・・」

フェイト「でも・・・遊びで、怪獣を使うの・・・？」

アリシア「あの遊びではね・・・」「ある世界で存在していた  
5つの文明の超獣達の力を借りて、勝敗を決する」んだ」

フェイト「超獣・・・」

アリシア「それが・・・」

そして、私達はさっきから聞こえる歓声の中心に到着した

アリシア     s i d e     o u t

フエイト side

歓声が聞こえる中心に着くと、そこには多くの人達が野次馬を作っていた

「いいぞー！！そのまま押してけー！！」

「まだだー！！まだ終わってないぞ坊主ー！！」

他にも様々な歓声が飛び交う中、姉さんは私とギンガの手を握る

アリシア「さ、2人とも。もっとよく見える場所に移動だよ」

ギンガ「えっ！？移動ってどこに」

すると、一瞬で周りの風景が変わって、人ごみの輪の中心に移動していた

アリシア「っと・・・あゝ、やっぱり」

姉さんが納得したような声をあげて、ある方向を見る

そこには10m程の感覚を開けて、2つの台越しに立っている2人がいた

その間の10m内に、先程みた怪獣がもう1人を睨みつけている

そして・・・その睨みつけられている人物は、私が良く知っている人物だった

フェイト「ゆ、ゆう・・・と!？」

そこには、手に数枚のカードのような物を持ち、向こう側に存在している怪獣を見つめる優斗の姿があった

フェイト side out

## 第22話 失われし都「アルハザード」(後書き)

天照大神「暑い・・・」

優斗「言っな・・・俺だって、辛いんだ」

アリシア「暑いよぉ～優斗」

優斗「暑い言いながら俺に抱きつくな！！余計に暑く感じるだろうが！！」

アリシア「じゃあさ優斗、私の部屋で涼しもうよ！！」

優斗「断る！！お前の部屋に行くと、絶対に何かされる！！」

天照大(過去に一体何があったんだよ・・・)

次回、恐らくは私が初めて書くタイプの文章になると思います

感が良い方は、分かるかもしれません・・・

その為、次回はもの凄く楽しみにされる方が出るかもしれませんし

実際に読んでつまらないと思われる方がいらっしやるかと思われるますが、どうぞご了承ください承をお願いします

というより・・・書いて大丈夫な内容なのだろうか？

次回、第23話「超獣の力を借りた遊び」



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2871q/>

---

魔法少女リリカルなのはStrikerS～相反する二色の翼～

2011年9月18日18時22分発行